岩 波 文 庫

32-065-1

アタルヴァ・ヴェーダ讃歌

――古代インドの呪法――

辻 直四郎訳

岩 波 書 店

Atharva-Veda

まえがき

本書は二部からなり、第一部はアタルヴァ・ヴェーダ第一―七巻の呪法讃歌の抜粋訳を収め、第二部は思想的讃歌の抄訳を載せている。拙著『リグ・ヴェーダ讃歌』(岩波文庫、一九七〇年)の姉妹篇であるが、厳格な意味における学術書ではなく、研究書でもない。リグ・ヴェーダやウパニシャッドの陰にかくれて、比較的に知られることの少ないアタルヴァ・ヴェーダの輪郭を、翻訳を通して一般に紹介せんとするものに過ぎない。

第一部は原則として個々の讃歌の翻訳・注記ならびに適用からなる。稀にはやや高級な問題に触れることはあっても、訳注はもっぱら初めてアタルヴァ・ヴェーダに親しむ読者の理解を助けるためである。したがって底本に改修を加えて翻訳した場合に、その旨を記したほか、概して文献学的あるいは語学的論議にわたることを避けた。また時に本文中に原語を挿んだのは、訳語に対する識者の疑問に答えんとしたもので、一般の読者は意に介しないでいただきたい。リグ・ヴェーダ以来知られ、訳文中にも頻出する神格名、たとえば火神アグニ、武勇神インドラ、司法神

ヴァルナ、酒神ソーマ(時には月神)等については説明を省いた。

呪法の効果を収めるためには、讃歌の唱誦のみならず、実際の使用法に対する知識が必要である。第一部の各讃歌につき、【適用】の項を設けて、インドの伝承による使用法を略記して、読者の便に資することとした。適用の詳細に関しては、巻末の「アタルヴァ・ヴェーダについて」中、カウシカ・スートラの項参照。祭式の用語は複雑であるが、せめて次の数語にはあらかじめ留意されたい。

献供(āhuti)は一般に供物を祭火に投入すること(焼灌)を意味し、供物としては液状バター(バター油)すなわちアージア(ājya)またはグリタ(ghṛta 両者を区別する場合には、グリタは固形バターを指す)が最も普通に用いられる。祭餅(puroḍāśa)は焼いた粉菓子の一種である。残滓(saṁpāta)は、献供に際し匙に付着して残った供物の部分で、呪法に重要な役割をもつ。

アタルヴァ・ヴェーダに親しみの薄い読者には、まず「アタルヴァ・ヴェーダについて」を一読し、前述の拙著『リグ・ヴェーダ讃歌』ならびに『インド文明の曙』(岩波新書、一九六七年)を参考とされんことをお勧めする。しかし直ちに翻訳を読まれる諸君も、最初に少なくも書目の略字の説明に一瞥を与えていただきたい。なお本文中に片仮名で表記した固有名詞、植物名等のサンスクリット原語は、一括して巻末の「サンスクリット語対応表」に譲った。

最後に本書の出版に協力を惜しまれなかった各位に厚く感謝する。筑摩書房版世界古典文学全集第三巻『ヴェーダ・アヴェスター』(一九六七年)に収められたアタルヴァ・ヴェーダの部分を、自由に利用できたのは、同書房の御好意によるものである。

書目の略字の説明

A: Atharva-Veda, Ed. Atharva Veda Sanhita, herausg. von R. Roth und W. D. Whitney, 2. verbesserte Auflage besorgt von Max Lindenau, Berlin 1924, 3. Auflage 1966. 本書の底本

AP or **P**: Atharva-Veda, the Paippalāda recension.

B: Hymns of the Atharva-Veda, transl. by M. Bloomfield, SBE, vol. 42, Oxford 1897.

BG: M. Bloomfield: The Atharva-Veda and the Gopatha-Brāhmaṇa, Strassburg 1899.

C: W. Caland: Altindisches Zauberritual, Probe einer Uebersetzung der wichtigsten Theile des Kauśika Sūtra, Amsterdam 1900.

G: Das Gopatha Brāhmaṇa, herausg. von D. Gaartra, Leiden 1919.

K: Kauçika-Sūtra of the Atharva-Veda, With extracts from the commentaries of Dārila and Keçava, Ed. by M. Bloomfield, New Haven 1890.

P: Paippalādas, the Paippalāla recension of the **A**.

R: Ṛg-Veda

Ś: Śaunakas, Śaunakīyas, Śaunakins, the Śaunaka recension of the **A**.

W: Atharva-Veda Saṁhitā, Transl. with a critical and exegetical commentary by W. D. Whitney, revised......and ed. by Ch. R. Lanman, Harvard Oriental Series, vols. 7 and 8, Cambridge 1905.

備考　〔 〕内は意味の補足、（ ）内は説明の文句。

v., *vv.* = verse(s)

目次

III 調伏法

IV 婦女法

VIII 増益法

IX 贖罪法

第二部　思想的讃歌

アタルヴァ・ヴェーダ讃歌

——古代インドの呪法——

第一部 呪法讃歌（アタルヴァ・ヴェーダ一―七より）

I 治病法（bhaiṣajya）

▽万病を癒すための呪文[1]（六・九一）

一 彼は大麦を力強く耕せり、八個の軛(くびき)もて、六個の軛もて（牽獣の数）。それ（大麦）をもちてわれは汝の身体の病患を遠ざけ、露(あらわ)になす。

二 下に向いて風は吹く。下に向いて太陽は輝く。下に向いて牝牛は乳をいだす。下に向いて汝の病患は去れ。

三 水は実に治療するものなり。水は病気を追いやるものなり。水は一切〔の病患〕を治療するものなり。そは汝のために医薬を作らんことを。

(1) 本讃歌の *v.* 2 は **R** X. 60. 11 にほとんど同じく、*v.* 3 は **R** X. 137. 6 に同じ。

【適用】 Cf. **K** 28. 17-20, **C** p. 90-91. 本讃歌は **A** V. 9 と併用されるが、後者の使用が主体となっている。しかし V. 9 の内容はきわめて空虚で訳出に値いしない。呪法としては VI. 91 における大麦と水との治癒力が特徴をなしている。大麦の使用を規定する **K** 28. 20 参照。

▽病気(1)を癒し、呪詛から解放せらるるための呪文 (六・九六)

一 ソーマ(植物名)を王とし、百様の外貌をもつ・あまたの薬草、ブリハス・パティ(神名)に激励せられて、われらを困厄より解放せよ。

二 彼ら(薬草)はわれを解放せよ、呪詛に基づく[困厄]より、さらにまたヴァルナに基づく[足枷](罠)より、またヤマ(「死神」)の足枷より、神々に対する一切の罪過より。

三 われらが眼もて、意もて、はたまた言葉もて、目覚めたる時にせよ、眠れる時にせよ、犯したる過誤、ソーマはその自律の力(svadhā)により、われらのためそを清めんことを。

(1) 呪詛も病魔と並んで病気の原因と認められる。この讃歌は種々な原典に共通の詩節をもち、寄せ集めの観を呈する。例えば、*v.* 1ab = **R** X. 97. 18ab, cd = **R** *ibid.* 15cd, *v.* 2 = **R** *ibid.* 16. 辻

『リグ・ヴェーダ讃歌』三六一頁参照。

【適用】 Cf. **K** 31. 22-25, **C** p. 102. ソーマの茎等をこの讃歌で清めたのち、それを燃やして、病気にかかった者または呪詛された者を燻す。水、酪漿(udśvit)、蜜、牛乳を取り合わせて作った種々の飲料を患者に与える。

▽病魔から解放せらるるための呪文 (二・九)

病気はしばしば魔類に憑かれたことから起こる。

一 十種の木[よりなる護符]よ、この者を羅刹(魔類の名)より解き放せ、彼の関節に憑きたる憑きもの(grāhi)より。しかるのち彼を、木よ、生くる者の世界に導き上げよ。

二 この者(患者)は来たれり、立ち上がれり、生くる者の群に加われり。彼の息子たちの父となれり、人々の中の最も幸福なる者と[なれり]。

三 この者は(1)達成(adhiti)に達したり。彼は生くる者の居所に達したり、百人の医師、千の植物(薬草)は、実に彼のものなれば。

四 神々は汝のために配合(2)(citi)を見いだせり、バラモンたちもまた植物も。一切の神々は地上において、汝のために配合を見いだせり。

五 そを(3)作りだしたる者(神?)、彼をして〔そを〕解除せしめよ。彼こそ最も勝れたる医師なれ。彼をして汝のために医薬を作らしめよ、〔地上の(4)〕医師と共に、清浄なる者として。

(1) 以前の意識(記憶)を回復したとの意味?

(2) 十種の木片の組合せ方?

(3) 病気を創りだした者が、その治療者でなければならないとの意味?

(4) 原文 bhiṣajā (*instr. sg.*) の意味不明。bhiṣajām (*gen. pl.*) と改めれば、「医師の中の清浄なる者として」?

【適用】 Cf. **K** 27. 5–6, **C** p. 82–83. 吉祥な木(**K** 8. 15 における列挙参照)十種から取った木片を粘着させ、黄金の針金を巻きつけ、これを患者の頸に結ぶ。祭儀終了後、患者は酸乳と蜜とを食べ、十人の親しいバラモンはこの讃歌を囁きつつ患者に触れる。

▽病魔(1)カンヴァに対する呪文(二・二五)

一 女神プリシュニパルニー(植物名)は、われらのために幸福を、ニルリティ(「破滅の女神」)のために不幸を創れり。強力なる彼女(上記の植物)は、実にカンヴァ(病魔)どもを貪り食う者なり。さればわれ彼女を使用せり。

二 プリシュニパルニーは、強力なるものとして最初に生まれいでたり。彼女もてわれは悪名高きものども(悪魔)の頭を切り落とす、あたかも鳥の〔それの〕ごとくに。

三 血を啜る悪魔、またわれらの肥満を奪い取らんとする者(衰弱させんとする者)、胎児を食らうカンヴァを滅ぼせ、プリシュニパルニーよ、しかして〔彼を〕克服せよ。

四 これら生命を消滅せしむるカンヴァどもを、山中に閉じこめよ。汝は、女神プリシュニパルニーよ、彼らの後を追い、アグニ(火)のごとく焼きつつ進め。

五 これら生命を消滅せしむるカンヴァどもを、遠く追い払え。暗黒のはびこるところ、そこにわれは、生命を食う者どもを行かしめたり。

(1) 古代の聖仙の名が魔類のそれとして使用されているのは奇異である。

【適用】 Cf. **K** 26. 36, **C** p. 79–80. 讃歌に名指された植物の粉末に、献供の残滓を注ぎ、悪魔に憑かれた者に上方から下方へと塗る。

▽魔類(1)ピシャーチャを追い払うための呪文（四・三六）

一　真の力あるアグニ・ヴァイシュヴァーナラ（アグニの称呼）、牡牛なす〔神〕は、彼ら（魔類）を焼き滅さんことを、われらを傷つけんとする者、害わんとする者、はたまたわれらに敵意を示さんとする者を。

二　害わんとせざるわれらを害わんとする者、また害わんとする〔われらを〕害わんとする者、かかる者を、われはアグニ・ヴァイシュヴァーナラの二本の牙の間に置く。

三　新月の夜、家（āgara）の中において吠声を挙げつつ（pratikrośa）われらを狩りたつる者ども、その他生肉を食らい、〔われらを〕害わんとする者、彼らをすべてわれは力もて克服す。

四　われは力もてピシャーチャどもを克服す。彼らの財産を奪い取る。われは殺す、〔われらを〕傷つけんとするすべての者を。わが意向をして成就せしめよ。

五　この太陽と競走し（hās-）、速力を競う神々、川に在る〔神々〕、山に在る〔神々〕と、われこれらの牛群ともども和合す。

六　われはピシャーチャどもを悩ます者なり、虎の牛群の所有者におけるがごとく。獅子を見た

る犬のごとく、彼らは隠れ場を見いださず。

七　われはピシャーチャどもと共なるを得ず、盗賊どもと、森の彷徨者（vanargu）どもと。わが入り行くその村より、ピシャーチャどもは消え失す。

八　わがこの強大なる力が入り行く村、そこよりピシャーチャどもは消え失す。〔そこに〕彼らは悪事を企まず。

九　饒舌を弄してわれらを怒らしむる者――あたかも蚊の象におけるごとく――われは彼らを惨なる者と考う、人にとまる小虫（alpaśayu）のごとく。

一〇　ニルリティ（「破滅の女神」）をして彼を捉えしめよ、あたかも馬を端綱もてなすごとく。われに対し怒る愚者（malva）は実に罠より解放せらるることなし。

（1）　魔類が病気を引き起こすことはすでに見た、例えば、ラクシャス（羅刹、上記二・九・一）、カンヴァ（上記二・二五）。そのほか半神族ガンダルヴァ、妖精アプサラスも、深く病気と関係する（cf. **A** N. 37）。

【適用】　Cf. **K** 25. 22-26, **C** p. 70-71.　この讃歌はいわゆる cātanāni *scil.* sūktāni「追放のための讃歌」（cf. **K** 8. 25）に属する。**K** 25. 22-36, **C** p. 70-78 は、チャータナ讃歌に関する一般的規定を含む。特

徴としては、燃料に木屑のような無価値な物を使用するにある(**K** 14. 15, **C** p. 28 をも参照)。——各詩節を唱えるごとに、上記のごとき燃料の一片を火に投じ、その煙を患者に吸わせる。カディラ樹で作った奇数の木釘(śaṅku)を、**A** V. 29. 4 を唱えつつ、祭火の後方に打ち込む、その頭部が地面と同じ高さになるように。同様に鉄および銅の釘を打ち込む。赤熱した若干の小石を、讃歌の各詩節ごとに、患者の寝床および穀物袋の廻りに撒く。

▽熱病を癒すための呪文(五・二二)

一　アグニがタクマン[1]をここより駆逐せんことを、ソーマ・ソーマ草を撃つ石・思慮清きヴァルナ・祭壇(vedi)・敷き草(barhis)・炎だつ薪もまた。敵意をして遠ざからしめよ。

二　すべての者を、燃え立たせ・火のごとく焼き尽しつつ、黄色[2]となす汝は、タクマンよ、今や実に無力のものとなれかし。いま低き方に、または下方に去れ。

三　節くれて高く低く、赤き粉を振りかけしがごとき(発疹の症状)このタクマンを、下方に追いやれ、万能の[3]〔薬草〕よ。

四　われは〔彼を〕下方に追いやる、まずタクマンに頂礼したるのち。シャカンバラ[4]の闘士(mus-

ṭihan)をしてマハーヴリシャ族のもとへ帰らしめよ。

五　彼の[5]居所はムージャヴァット族なり。彼の居所はマハーヴリシャ族なり。生まれて以来、タクマンよ、汝はバルヒカ族の住人なり。

六　タクマン[6]よ、いたるところ砒素[7]を振りかけられ(vy-ala)、病患に取り巻かれ(vi-gada)、斑点に蔽われ(vy-aṅga)、多くの苦痛をかもす者よ、放浪する奴隷女(niṣṭakvarī dāsī)を求めよ。彼女[8]を電撃もて襲え。

七　タクマンよ、ムージャヴァット族のもとへ行け。さらに遠くバルヒカ族のもとへ。淫奔なる奴隷女を求めよ、彼女[9]を軽く揺れ。

八　去りて汝の縁類なるマハーヴリシャ族、ムージャヴァット族を食え[10]。それらの〔土地〕を、われらタクマンに宣言す(指定す)、ここは〔汝にとり〕他国なれば。

九　他国において汝は楽しまず。威力ある汝はわれらを憐まんことを。タクマンは用務[11]を帯びたり。彼はまさにバルヒカ族へ赴かんとす。

一〇　冷たく次いで熱く(悪寒の症状)、汝が咳を伴って震えしめたるとき、汝の飛箭(heti)は恐ろしかりき、タクマンよ。それよりわれらを逃れしめよ。

一一 憔悴(balāsa ?)・咳・痙攣(udyuga ?)を、同伴者となすなかれ。そこ(遠隔の地)より再びここに帰り来たることなかれ。タクマンよ、われそを汝に歎願す。

一二 タクマンよ、〔汝の〕兄弟なる憔悴と、姉妹なる咳と、従兄弟なる吹出もの(pāman ?)と共に、かの他部族に行け。

一三 三日目に起こる熱、三日目に休む熱、連日起こる熱、はたまた秋の熱、悪寒・高温を伴う熱、夏の熱、雨期の熱を消滅せしめよ。

一四 ガンダーリ族[12]・ムージャヴァット族・アンガ族・マガダ族に、われらはタクマンを引き渡す、あたかも従者・財宝を〔送りだす〕ごとくに。

(1) タクマン(takman)は、熱病ならびにそれを引き起こす病魔を指す。タクマンに関しては次に訳出した **A** Ⅶ. 116 のほか、**A** Ⅵ. 20, I. 25 をも参照。——病気に関する語句には意義不明のものが少なくない。

(2) 黄疸の症状を指す。

(3) 薬草クシュタを指す、下記五・四参照。

(4) シャカンバラは、激しい下痢を起こさせる熱病を指すか?

(5) これらの部族名は、おそらく北方の住民を指す。*v*. 14 のガンダーリ族をも参照。ただし *v*. 14 に挙げられるアンガ族、マガダ族は、東インドに属する。

(6) この訳文は、H. Lüders: Philologica indica, p. 433-438 に従う。

(7) 砒素(āla)は黄色の顔料として用いられる。

(8) 電撃(vajra)は好色の意味を含んでいる、cf. *v*. 7.

(9) エロティックの意味は明瞭である、cf. *v*. 6.

(10) bandhv addhi < bandhum addhi(: ad-「食う」)。

(11) prārthaḥ を prārpyaḥ と改めれば(Caland)、「送りいだされんとせり」(: prārpayati)の意味となる。

(12) 部族名については、上記注(5)参照。

【適用】 Cf. **K** 29. 18-19, **C** p. 93. 熱病の患者に、炒った黒米の粥汁を飲ませる。山火事で生じた火をもたらし、この讃歌をもって主要献供を捧げたのち、その残滓を赤銅の皿(lohitapātra)から患者に飲ませる。

▽間歇熱を癒すための呪文（七・一一六）

一　熱き〔タクマン〕に頂礼あれ、震えしめ、昂奮せしめ、激烈なるものに。冷たき〔タクマン〕に頂礼あれ、かつてその願望を満したるところの。

二　隔日(1)に襲い来る〔熱〕、二日続きて襲い来る〔熱〕、この掟に背くものは、この蛙の中に入れ。

（1）上記五・二二・一三参照。

【適用】Cf. **K** 32. 17, **C** p. 106. この讃歌の使用法は **A** Ⅶ. 117 と共通。蛙の消火・冷却力の利用が特徴。緑の条のある蛙を青・赤の紐をもって(nilalohitābhyām, *instr. du.*)、患者の横たわる寝台の下に結びつけ、患者から蛙の上に滴り落ちるように、水を注ぐ。ちなみに青・赤の紐は、敵意ある呪法と関係が深い。

▽クシュタ草(1)に対する祈願（五・四）

一　山に生まれ、草木の中にて最も強力なる汝、ここに来たれ、クシュタ草よ、タクマン（熱病）の消滅者よ、ここよりタクマンを消滅せしめつつ。

二　鷲の誕生地たる山において、ヒマヴァット山（ヒマーラヤ山）より生まれたる汝に、〔なが名声を〕聞きて、人々は財宝を携えて赴く、汝をタクマンの消滅者と知りたれば。

三　ここよりして第三天（最高天）に、神々の居所たるアシュヴァッタ樹（菩提樹）は存す。そこに神々はクシュタ草を得たり、目のあたり甘露（amṛta 不死の飲料）の姿をなすところの。

四　黄金の舟は黄金の船具を備えて天空に走れり。そこに神々はクシュタ草を得たり、甘露の花を。

五　道は黄金なりし、櫂は黄金なりし。舟は黄金なりし、それにより彼らがクシュタ草を運び来たりし〔舟は〕。

六　ここなる人（患者）をわがために、クシュタ草よ、つれ来たれ、〔しかして〕治療せよ。彼をしてわがために無病ならしめよ。

七　汝は神々より生まれたり。汝はソーマの親友なり。かかる汝はわが出息（prāṇa）に、ヴィアーナ（vyāna 体内に遍満する気）に、わが眼に恵み深かれ。

八　北の方ヒマヴァット山より生まれたる汝は、東の方人々のもとにもたらされたり。そこにクシュタ草の最高の名（複数）は配分せられたり。

九 汝は、クシュタ草よ、最高と称せらる。なが父は最高と称せらる。しかしてすべての病患(yakṣma 特に肺結核)を消滅せしめよ。はたタクマンを無効ならしめよ。

一〇 頭痛、目の患い、肢体の病患、クシュタ草はこのすべてを治療せんことを、実に神聖なる雄力(vṛṣṇya)として。

(1) クシュタ草は万能薬と考えられ、ことにタクマン(熱病)の特効薬とされた。Cf. **A** Ⅵ. 95, Ⅻ. 39.

【適用】 Cf. **K** 28. 13, **C** p. 89. 新しい牛酪(navanīta)を混じたクシュタ草の粉末を、患者の頭から足まで、手を後へ戻すことなく、擦りこむ。

▽黄疸を癒すための呪文(一・二二)

一 太陽へ登り行かしめよ、汝の胸焼(hṛddyota)と黄疸(hariman)とを。赤き牡牛の色もて、われは汝を包む。

二 赤き色もて、われは汝を包む、長寿のために。この者をして病苦なからしめよ、しかしてまた黄色ならざらしめよ。

三 ローヒニー[1]を守護神となすもの、みずからもまた赤き牝牛たち——そのおのおのの形、おのおのの力、それをもてわれらは汝を包む。

四 鸚鵡[2](śuka)の中に、ローパナーカー鳥(鶫の一種?)の中に、われらは汝を置く。はたまたハーリドラヴァ鳥(黄鶺鴒?)の中に、汝の黄疸を据え置く。

(1) Rohiṇī は Rohita(太陽)の女性形。

(2) śuka, ropaṇākā, hāridrava は黄色の鳥と考えられる。これら三種の鳥の名は、**R** I. 50. 12 にも見えている。

【適用】 Cf. **K** 26. 14-21, **C** p. 75-76. 種々の行作を含むが、最も肝要な特徴は、赤いもの(例えば、赤い牡牛の毛、赤牛の皮の護符)を使用し、またこれとは逆に黄色のもの(例えば、黄色の植物、上記 v. 4 に挙げられている三種の鳥、'Sympathie-Zauber')を使用する点にある。

▽出血を止むるための呪文(一・一七)

一 赤き衣を身に纏う血管[1]、兄なき姉妹のごとく行くかの乙女たちは、威力を失いて止まれ。

二 下なるものよ、止まれ。上なるものよ、止まれ。中央なるものよ、汝もまた止まれ。最も細きものの止まるとき[2]、大いなる動脈もまた実に止まるべし。

三　一百の動脈、一千の静脈の、これら中央なるものは、すでに止まれり。同時に末端もまた静止せり。

四　汝らの回に、小石の高き堤は築かれたり。止まれ、静まれ、安らかに(su kam)。

（1）　hirā「血管、静脈」(*vv.* 1, 3) および dhamani「動脈」(*vv.* 2, 3) の区別は明確でない。

（2）　ca = cet 'if',「もし……するならば」。

【適用】 **K** 26. 10–13, **C** p. 74–75. 讃歌との関連において、最も肝要な処置は、止血の目的をもって、傷口の周囲に、砂・小石を撒くにある (cf. **K** *loc. cit.* 10. *v.* 4)。

▽過度の流出(出血・下痢等)を癒すための呪文（二・三）

一　かしこに山より流れ落つるもの(水)、そをわれはながために医薬となす。そがいみじき医薬たらんがために。[1]

二　実にや実に、ながもつ百の医薬(治療力)の中、なれこそ[2]最も勝れたれ、流出を止め、病苦を除くことに関しては。

三　アスラ(阿修羅、天神の敵対者)たちは、この偉大なる傷の治療者を、深く下方に掘り隠す。

そは流失の医薬なり。そは実に病苦を除き去りたり。

四　蟻[3](upajīka)は〔この〕医薬を海よりもたらす。そは流失の医薬なり。そは実に病苦を鎮めたり。

五　この偉大なる傷の治療者は、大地よりもたらされたり。そは流失の医薬なり。そは実に病苦を除き去りたり。

六　水はわれらに吉祥なれ。植物は〔われらに〕好意ある者たれ。インドラのヴァジュラ(電撃)をして、ラクシャス(Rakṣas 羅刹)どもを駆逐せしめよ。ラクシャスどもの放ちたる矢をして、〔われらより〕遠く落ちしめよ。

（1）　意味の円滑を期し、asasi 2. *sg. subj.* を asati 3. *sg. subj.* に改めて訳した。

（2）　多くの治療力の中、流出を防止する点が最も勝れているという意味か？

（3）　水の在所を感知する蟻の本能。Cf. *infra* **A** VI. 100.

【適用】 Cf. **K** 25. 6–9, **C** p. 68–69. この讃歌の使用法は **A** I. 2 と共通。讃歌自身はもっぱら水の効力を強調しているが、使用法は複雑である。主要献供の残滓を、一輪のムンジャ草の花に塗り、ムンジャ草で編んだ紐をもって患者の頸に結ぶ。芝土(ākṛtiloṣṭa)と蟻塚とを粉末にし、水と残滓とを混じ、

患者に飲ませる。この讃歌を唱えつつ患部にサルピス(sarpis 'ghee')を塗り、さらにこの讃歌を唱えたのち、革嚢(かわぶくろ)の口から息を患部に吹きかける。

▽水腫病(1)を癒すための呪文（一・一〇）

一 このアスラ(2)(ヴァルナ)は神々を支配す。何となれば、王者ヴァルナの意志は実現すればなり。われは呪文(3)(brahman)もて優越し、彼(4)(ヴァルナ)より、恐るべき〔彼の〕忿怒より、この者(患者)を救出す。

二 王者ヴァルナよ、汝の忿怒に頂礼あれ。何となれば、恐るべき者(ヴァルナ)よ、汝はあらゆる虚偽を認識すればなり。われは他の千人をこぞりて〔汝に〕引き渡す。されど汝に属するこの者(患者)をして百秋の齢を生きしめよ。

三 汝(患者)が舌もて語りたる不真実、多くの偽瞞、〔それより〕——本性に違うことなき(satya-dharman)王者ヴァルナより、われは汝を解放す。

四 われは汝(患者)をヴァイシュヴァーナラ(アグニの称呼)より、大水(水腫病を指す)より解放す。告げよここに汝の同胞(はらから)(信奉者?)に、恐るべき者(ヴァルナ)よ。しかしてわれらの呪文に留意せよ。

(1) この病気は虚偽者にヴァルナ神のくだす懲罰と考えられた。Cf. **A** VII. 83.

(2) 上記二・三・三の「アスラたち」と異なり、ここのアスラは一般の神(deva)に対し、不可思議な幻力・呪力に富む一群の神格を指す。ヴァルナ、ルドラ等はこれに属する。

(3) brahman は本来神聖な祈禱の文句、その神秘力を意味する。**A** においてはむしろ呪文と訳すのが適当である。

(4) tatas pári. 訳文は **W** の見解に従う。

【適用】 Cf. **K** 25. 37, **C** p. 73. この讃歌を唱えたのち、ダルバ草の二十一房および(または)二十一本の屋根の蒿と共に、患者の頭上に水を注ぐ。

▽水によって病気を癒すための呪文（六・二四）

一 水はヒマヴァット(ヒマーラヤ山)より流れいず。ともあれ(samaha)そはシンドゥ(インダス河、或いはむしろ海)に合流す。神聖なる水は実にそをわれに与えんことを、胸焼の薬を。

二 わが眼の炎症、踵(かかと)のそれ、また前膊のそれ、薬師(くすし)の中の最良の薬師たる水は、このすべてを治療せんことを。

三　シンドゥを夫とし、シンドゥを王とするこれらすべての川は、われらにこれを癒す薬を与えよ。それによりわれらは汝（水）よりの恩恵を享受せんと欲す。

【適用】 Cf. **K** 30. 13, **C** p. 97. 流水を流れに沿って汲み取らせ、この讃歌を唱えて、屋根の葺藁と共に患者に注ぐ。

▽ルドラの矢より守るための呪文（六・九〇）

一　ルドラ（神名）が汝（患者）の肢体にまた心臓に射たる矢、われらは今ここにそを散々に、汝より抜き取る。

二　これら汝の肢体に沿いて分散する百の脈管、汝のこれらすべてより、われらは毒を呼びいだす。

三　射んとするとき、ルドラよ、汝に頂礼あれ。弓に番われたる〔矢に〕頂礼あれ。まさに射放されんとする〔矢に〕頂礼あれ。射当てたる〔矢に〕頂礼あれ。

【適用】 Cf. **K** 31. 7, **C** p. 99–100. 腹痛等の激痛に悩む患者（śūlin）の頸に、金属または石で作った戟（śūla）の形の護符を結びつける。また患者に酸乳と蜜とを飲ませる。ちなみにシューラ（śūla「戟」）と

は、本来ルドラの武器の名で、ここで患者をシューリンと呼んでいるのは、戟形の護符を持つ者の意か？

▽咳を鎮むるための呪文（六・一〇五）

一　望を抱く意速く、遠くかなたへ飛ぶごとく、咳よ、飛び行け速やかに、意の翅に従いて。

二　研ぎすましたる矢の早く、遠くかなたへ飛ぶごとく、咳よ、飛び行け速やかに、地の拡がりに従いて。

三　天つ日の神光速く、遠くかなたへ飛ぶごとく、咳よ、飛び行け速やかに、海の潮に従いて。

【適用】 Cf. **K** 31. 27, **C** p. 103. **K** 28. 15–16 に述べられた祭儀が使用される。すなわち患者を家から外に数歩（おそらく東方へ）歩ませる。マンタ（mantha 大麦の粉を水中で攪拌したもの）を食べさせ、水を啜らせる。患者はこの讃歌を唱えつつ太陽を崇拝する。

▽白癩を癒すための呪文　その一（一・二三）

一　汝は夜より生まれたり、植物よ、暗き[1]、黒き、黒ずめる者よ、ラジャニー[2]よ、染めよ、この

癩の患部(kilāsa)を、また白味がかれる個所(palita)を。

二　癩の患部と白味がかれる個所とを、ここより消え失せしめよ、斑点(pṛṣat)を。なが本来の色をしてなれ(患者)に返らしめよ。白き斑点(śuklāni)をして飛び去らしめよ。

三　なが隠れ家は黒ずめり。なが居所は黒ずめり。なれは黒ずみたり、植物よ、ここより斑点をして消え失せしめよ。

四　骨より生まれたる癩、体より生じて皮膚にあるもの、毒あるもの(dūṣi)により生じたる白き斑点を、われは呪文(brahman)もて消え失せしめたり。

(1)　白癩(śvetakuṣṭha)とは反対の色。しかしインドの注釈によれば、ここに「暗き」等と訳した語(rāmā, kṛṣṇā, asiknī)も、植物の名とされる。

(2)　rajanī. 本来「染色者」を意味し、植物としては haridrā「鬱金」と同じであるといわれる。rajaya「染めよ」の使用は 'Wortspiel' のためである。

▽白癩を癒すための呪文　その二(一・二四)

一　鷲(suparṇa)は最初に生まれたり。汝(植物)はその胆汁なりき。そのとき戦いに敗れたるアスラ女(Āsurī)は、森の樹木の形を取れり。[1]

二　アスラ女は最初にこの癩に対する薬を作れり、癩を消え失せしむるところの。彼女は癩を消え失せしめたり。皮膚を同一色(sarūpa)ならしめたり。

三　なが母の名は「同一色」なり。なが父の名は「同一色」なり。なれは同一色ならしむる者なり、植物よ。されば汝はこれ(患部)を同一色ならしめよ。

四　暗黒色(śyāma)にして同一色ならしむる汝は、大地より持ち上げられたり。いみじくこれを完成せよ。再び色を整えよ。

(1)　rūpaṁ cakre vanaspatīn. ブラーフマナ散文の正規の構文は °patiḥ を要求する(＝**AP**, Kashm. ms.)。しかし **AP**(Orissa ms. I. 26. 1, ed. Calc., p. 22 end)はシャウナカ伝本に同じ。

【適用】　一・二三と一・二四とは共通の使用法をもつ。Cf. **K** 26. 22–24, **C** p. 76–77. 患部が充血するまで、牛糞をもって摩擦し、両讃歌を唱えたのち、鬱金等の粉末を塗る。同様のことは白髪(palita)を抜き取ったのちにも行われる。最後に頭を隠して(?)、マルト神群のために献供を行なう(cf. **K** 41. 1–7)。

▽クシェートリヤ病[1]に対する呪文（三・七）

一　疾く走る羚羊（hariṇa）の頭上に医薬あり。彼は角（viṣāṇā）もてクシェートリヤ病を四散せしめて消滅せしめたり。

二　牡の羚羊は、汝の後を追い、四足を飛ばして駆け行けり。角よ、クシェートリヤ病を解け[2]、彼（患者）の心臓にもつれ入りたるところの（guṣphita）。

三　四翼をもつ屋根のごとく輝くかの〔角〕、これをもちてわれらは、すべてのクシェートリヤ病を、汝（患者）の肢体より消滅せしむ。

四　ヴィチュリット（vicṛtau *du.*「解くもの」）の名にし負う、天に輝くかの麗しき両星をして、クシェートリヤ病の最も下なる罠を、最も上なる〔罠〕を解かしめよ。

五　水こそ実に治療者なれ。水は病気の駆逐者なり。水は一切の治療者なり。その〔水〕をして汝をクシェートリヤ病より解放せしめよ。

六　〔悪意をもちて〕調剤せられたる飲薬（āsuti ?）より、クシェートリヤ病が汝に達したらんには、われその医薬を知る。われはクシェートリヤ病を汝より消滅せしむ。

七　星宿の光薄らぐとき（apavāse）、また曙の光褪するとき、それ（*v.* 6 の医薬?）をして、あらゆる禍をわれらより〔消し去らしめよ〕。またクシェートリヤ病を消し去らしめよ（apa-vas-*trans.*）。

（1）　kṣetriya 病の意味は明確でないが、おそらく遺伝的病患を指すものかと思われる。Cf. **A** II. 8, II. 10.

（2）　vi-ṣya（vi-sā-）：viṣāṇā「角」は 'Wortspiel'.

【適用】　Cf. **K** 27. 29–31, **C** p. 85. 羚羊の角および皮の使用が特徴的である。すなわち羚羊の角で作った護符を巻きつける。羚羊の角を細く砕いて水に加え、これを患者に飲ませ、啜らせる。天体の光の薄らぐ時（暁天）、羚羊の皮にある、杭を通すための穴の部分を燃し、これを水に押し入れて煖めたのち、その水を患者に注ぐ。不定量の大麦の山から一握を取り、この讃歌を唱えつつ、各詩節ごとに大麦の若干粒を火中に撒く。

▽骨折を癒すための呪文（四・一二）

一　汝はローハニー[1]（薬草名）なり、癒すものなり。折れたる骨を癒すものなり。これを癒せ、アルンダティーよ。

二　汝（患者）の体内において害われたるもの、炎症を起こしたるもの（dyutta）、〔引き裂かれたる〕肉（peṣṭra）を、ダートリ（「創造神」）が優しく再び接合せんことを。

三　汝の髄は髄と接合すべし、また汝の関節は関節と。汝の裂け離れたる肉、〔汝の〕骨は再び合し生ずべし。

四　汝の髄は髄と合わせらるるべし。皮膚は皮膚と合わさりて生ずべし。汝の血、骨は生ずべし。肉は肉と合わさりて生ずべし。

五　毛を毛と合わせよ。皮膚を皮膚と合わせよ。汝の血、骨は生ずべし。断ち切られたるものを接合せよ、薬草よ。

六　立ち上がれ、進め、走れ、よき車輪・よき車輞（しゃもう）・よき轂（こしき）をもつ車〔のごとくに〕。確乎（かっこ）として直立せよ。

七　もし彼が穴に落ちて打ち砕かれたるとき（骨折）、或いは投げられたる石が彼を撃ちたるとき、リブ（「工巧神（くぎょうしん）」）が、車の部分を〔修理するごとく〕、〔ダートリは〕接合せんことを、関節を関節と〔繫ぎつつ〕。

（1）ローハニー（rohaṇī: ruh-）は、「癒すもの」の意味を兼ねる（'Wortspiel'）。この薬草はアルンダティー（cf. v. 1, **A** V. 5. 5, 9）、ラークシャー（cf. V. 5. 7）、シラーチー（cf. V. 5. 1, 8）とも呼ばれる。

【適用】 Cf. **K** 28. 5–6, **C** p. 88. 燃焼するラークシャー（'Lack'）を入れて熱した水を、星影の消える時刻に、患部に注ぐ。プリシャータカ（pṛṣātaka 牛乳とアージアとを混じた飲物）を患者に飲ませ、同様の液体を患部に塗る。

▽傷を癒すための呪文　その一（五・五）

一　夜は汝の母なり。雲は汝の父なり。アリアマン（神名）は汝の祖父なり。シラーチー[1]は実に汝（げ）の名なり。かかる汝は神々の姉妹なり。

二　汝を飲む者は生く。汝はかかる者を救う。汝はあらゆる者の支持者にして、また人々の庇護所なり。

三　いずれの木にも汝は登る、淫奔なる女子のごとくに。勝ちほこり、安立（あんりゅう）する汝の名は実に救助者（sparaṇī または「解放者」）なり。

四　傷が杖により、矢により、或いはまた炎により作られたるにせよ、汝はその治療者なり。かかる汝はこの者を治療せよ。

五　汝は吉祥なるプラクシャ[2]より芽生ゆ、アシュヴァッタより、カディラより、ダヴァより、ニアグローダより、パルナより。かかる汝はわれらに来たれアルンダティーよ。

六　黄金(こがね)色なし、幸多く、太陽の色なし、姿最も美しきものよ、骨折(ruta)に馳せつけんことを、治療者よ。汝の名は実に治療者なり。

七　黄金色なし、幸多く、激烈にして、毛深き内側を持つ者よ。汝は水の姉妹なり、ラークシャーよ、風は実に汝の生気(ātman)となれり。

八　シラーチー[3]はなが名なり、山羊のごとく褐色なる者よ、汝の父(雲? cf. *v.* 1)は処女の子(kānīna ?)なり。暗黒色なるヤマ(「死神」)の馬の血もて(asnā)汝は実に潤されたり。

九　馬の血より落下して、そは樹木に向かいて走れり、翼ある小川(sarā patatriṇī)となりて。かかる汝はわれらに来たれ、アルンダティーよ。

(1)　薬草の異名、シラーチー、ラークシャー、アルンダティーについては、上記 **A** Ⅳ. 12. 1, n. 1 参照。

(2)　以下は上記の薬草の蔓が巻きつく樹木の名と思われる。

(3)　*vv.* 8, 9 の語句には疑問が多く、予想されている神話(ヤマの馬の血、翼ある小川)が不明であるから、翻訳は臆測の域をいでない。

【適用】　Cf. **K** 28. 14, **C** p. 90.　薬草ラークシャーを熱い湯に入れ、よく濾過したのち、牛乳に混じて煎薬(phāṇṭa)を作り、患者に飲ませる。

▽傷を癒すための呪文　その二（六・一〇九）

一　ピッパリー(湿地に生える黍の一種)は打ち傷を癒す(kṣiptabheṣaja ?)。そはまた刺し傷を癒す(atividdhabheṣaja ?)。そを神々は調整せり。そは生命を〔維持せしむるに〕足る。

二　ピッパリーたちは、その生まるるや相集まりて語り合いたり、生命ある中にわれらが見いださん者、かかる人は危害を被ることあらじと。

三　アスラ[1]たちは汝を〔地中に〕埋めたり。神々は汝を再び掘りいだしたり、ヴァータ[2]により起こされたる病患の医薬として、また打ち傷の医薬として。

(1)　上記二・三・三参照。

(2)　vāta「風、気」、人体を構成する三要素の一。

【適用】　Cf. **K** 25. 38, **C** p. 80.　アージア献供の残滓をピッパリーの種子に注ぎ、患者に食べさせる。

△瘰癧を癒すための呪文（六・二五）

一　五あまり五十の〔腫瘍は〕頂に集まる。それらすべては消え失せよ。瘰癧(apacit)の膿疱(vāka ?)のごとくに。

二　七あまり七十の〔腫瘍は〕頸の上に集まる。それらすべては消え失せよ。瘰癧の膿疱のごとくに。

三　九あまり九十の〔腫瘍は〕肩の上に集まる。それらすべては消え失せよ。瘰癧の膿疱のごとくに。

【適用】 Cf. **K** 30. 14-16, **C** p. 97. パラシュ(paraśu 植物名)の葉五十五枚に点火し、その汁を土器の破片に集め、木片をもって患者に塗る。貝殻の粉末或いは犬の唾を塗る。もし前者を用いたときは蛭に、もし後者を用いたときは蜥蜴に患部を吸わせる。——この病気は比較的に多かったと思われる、cf. **A** Ⅵ. 57, Ⅵ. 83, Ⅶ. 74, Ⅶ. 76.

▽虫を退治するための呪文（二・三一）

一　あらゆる虫類を押し潰す、インドラの大いなる石臼、これをもちてわれは虫どもを磨り潰す。石臼もてカルヴァ(khalva 豆の一種)を〔潰すが〕ごとく。

二　目に見ゆる〔虫〕、見えざる〔虫〕を、われは押し潰せり、クルール(kurūru 虫の一種)をもまた。あらゆるアルガンドゥ(algaṇḍu 同上)、シャルナ(śaluna 同上)、虫どもをわれらは呪文(vacas)もて粉砕す。

三　強大なる武器もてわれはアルガンドゥを殺す。焼かれたるものも、焼かれざるものも無力となれり。残れるも、残らざるも、われは呪文(vāc)もて退治す、虫どもの一匹すら残らざるごとくに。

四　内臓に在るもの、頭部に在るもの、はた肋骨に在る虫ども、アヴァスカラ(avaskara 虫の一種)、ヴィアンダラ(vyandhara 同上)、虫どもをわれらは呪文(vacas)もて粉砕す。

五　山中に、森林中に、草木の中に、牛群の中に、水中に在る虫ども、われらの体内に入れるもの、われは殺す、虫どものこの一族を。

【適用】 Cf. **K** 27. 14-20, **C** p. 84. 施術者はこの讃歌を唱えて、カルヴァンガ(khalvaṅga 植物名、cf. khalva *v.* 1)、アルガンドゥ、ハナナ(hanana 虫の一種)を、アージアに混ぜて火中に捧げる。黒い

斑点のある葦の葉に牝牛の尾の毛を、右から左に向かって巻きつけ、それを石で砕き、火中に投じ、患者はその煙を吸う。施術者は南面し、右手をもって細くした砂を左手で患者の上に撒き、通常の薪を火に投じ、患者はその煙を吸う。

▽牛群の虫を退治するための呪文（二・三二）

一 太陽は昇りつつ虫どもを殺せ。沈みつつ光線もて牝牛の中なる虫どもを殺せ。

二 雑色(viśvarūpa)の虫、四つ目のもの、斑点あるもの、白きもの、われはその肋骨を打ち砕き、その頭を切り裂く。

三 アトリ(聖仙の名)のごとく、われは汝らを殺す、虫どもよ、カンヴァ(同上)のごとく、ジャマダグニ(同上)のごとく。アガスティア(同上)の呪文(brahman)もて、われは虫どもを磨り潰す。

四 虫どもの王は殺されたり。はたまた彼らの首長(sthapati)は殺されたり。虫は母もろとも殺されたり。兄弟もろとも殺されたり。姉妹もろとも殺されたり。

五 彼の同居者(veśás ?)は殺されたり。隣人(pariveśás ?)も殺されたり。またいわば微細なるもの、それらすべての虫どもは殺されたり。

六 われは汝の二本の角を打ち砕く、それをもちて汝が突き刺すところの。われは汝が毒を貯うる汝の容器(kusumbha)を破る。

【適用】 Cf. **K** 27. 21-26, **C** p. 84-85. 日出時に、虫に悩まされた牝牛の名を問い訊し、施術者はこの讃歌を囁き、その終わるを待って、虫どもは殲滅(せんめつ)されたと宣言し、ダルバ草をもって患部を打つ。同様の祭儀は正午にも行なわれ、さらに午後にも行なわれる。ただし、この際牝牛の頭は西方に向けられる。患部から毛の房を切り取ったのち、上記 **A** II. 31, **K** 27. 14-20 におけると同一の祭儀を行なう。

▽小児の体内の虫を駆除するための呪文（五・二三）

一 われ天と地とに告げぬ。女神サラスヴァティー(河神)に告げぬ。インドラとアグニとに告げぬ、虫を粉砕せよと。

二 インドラよ、この少年の虫を殺せ、財宝の主よ。わが強力なる呪文(vacas)により、すべての敵意は滅ぼされたり。

三 両眼の中を逼い廻るもの、両鼻孔の中を逼い廻るもの、歯の中央に到るもの、われらはこの

虫を粉砕す。

四　二匹の色同じきもの、二匹の色異なるもの、二匹の黒きもの、二匹の赤きもの、褐色(1)なるもの、褐色の耳もつもの、禿鷹なすもの、コーカ鳥(2)(koka 郭公の類)なすもの、これらの〔虫どもは〕殺されたり。

五　脇白き虫、黒くして腕白きもの、色さまざまなるあらゆる虫を、われらは粉砕す。

六　東の方に、あらゆるものに見られ、目に見えざるものを殺す太陽は昇る、目に見ゆるもの、目に見えざるものを殺し、すべての虫を砕きつつ。

七　イェーヴァーシャども(yevāṣa 虫の一種)、カシュカシャども(kaṣkaṣa 同上)、エージャトカども(ejatka 同上)、シパヴィトヌカども(śipavitnuka 同上)、目に見ゆる虫は殺さるべし。また目に見えざるものも殺さるべし。

八　虫どもの中のイェーヴァーシャは殺されたり。はたまたナダニマン(nadaniman 虫の一種)は殺されたり。われはすべての〔虫〕を挽き潰したり、石臼もてカルヴァ(豆の一種)を挽くごとくに(上記二・三一・一参照)。

九　三個の頭を持つもの、三個の瘤ある虫、斑あるもの、白きもの、われその肋を砕き、その頭

を断つ。

一〇　アトリ(聖仙の名)のごとく、われは汝らを殺す、虫どもよ、カンヴァ(同上)のごとく、ジャマダグニ(同上)のごとく。アガスティア(同上)の呪文(brahman)もて、われは虫どもを磨り潰す(上記二・三二・三に同じ)。

一一　虫どもの王は殺されたり。はたまた彼らの首長は殺されたり。虫は母もろとも殺されたり。兄弟もろとも殺されたり。姉妹もろとも殺されたり(上記二・三二・四に同じ)。

一二　彼の同居者(?)は殺されたり。隣人(?)も殺されたり。またいわば微細なるもの、それらすべての虫どもは殺されたり(上記二・三二・五に同じ)。

一三　すべての雄の虫、すべての雌の虫の頭を、われは石もて砕く。その口を火もて焼く。

(1)　babhru, babhrukarṇa. おそらく梟の種類。'Kauz', 'Uhu', P. Thieme Gedenkschrift H. Güntert. 1974, p. 298-300.

(2)　むしろ kāka「烏」と改めるべきである、cf. Thieme *op. cit.*, p. 295-300.

【適用】 Cf. **K** 29. 20-26, **C** p. 94. 種々な植物の使用が特徴的である。この際小児は祭火の西方(後方)において母の膝に乗せられる。一、カリーラの根を火に入れ、その煙を患者に吸わせる。二、シグル

の種子を新しいバターに混じて患部に塗る。三、ウシーラの根二十一本を粉末にして水に加え、この讃歌の v. 13 後半を唱えたのち、患者に注ぎかける。

▽蛇・害虫の毒に対する呪文（七・五六）

一　斜の縞ある〔蛇〕、黒蛇、蝮より集められたる〔毒〕、蝎(kaṅkaparvan)のその毒を、この薬草は消え失せしめたり。

二　蜜(1)より生まれ、蜜を滴らし、蜜のごとく甘く、蜜〔にまごうもの〕(madhū)、そは傷口を治療するものなり。かつまた刺虫(maśaka)を粉砕す。

三　嚙まれたるところ、吸われたるところ、そこよりわれらは汝のために〔毒を〕呼びいだす。微細にして素早く嚙む刺虫の毒は〔今や〕無力(arasa)なり。

四　この曲りくねりて関節なく、手足なきもの(蛇)は、口を曲げ捩る。汝は、ブラフマナス・パティ(神名)よ、これらの〔口〕を直ぐに伸さんことを(無害にせよの意)、葦の葉のごとく。

五　無力となりて地上を這うこの蝎(śarkoṭa ?)の毒を、われらは実に抜き取りたり。しかしてまた彼を粉砕せり。

六　汝の両腕に力なし、頭にもまた中央(胴)にも。しかるに汝何故、邪悪にも尾に小さき〔刺を〕担うや。

七　蟻は汝を食らう。雌孔雀は〔汝を〕引き裂く。卿らすべては実に宣言すべし、蝎の毒は無力なりと。

八　尾と口との二つもて打つ汝の口には、〔もはや〕毒なし。しかるをいわんや、汝の尾の容器に毒あらんや。

(1)　madugha または madhuka「甘草」を指す。

【適用】　Cf. **K** 32. 5-7, **C** p. 104. 甘草(cf. *v.* 2)の護符を患者の頸に巻く。芝生と蟻塚とを細かく砕き、老死または病死でない獣の皮に縫い込み、患者の頸に巻く。

▽解毒のための呪文（六・一〇〇）

一　神々は与えたり、太陽は与えたり、天は与えたり、地は与えたり、三筋(1)のサラスヴァティー河は与えたり、心を一にして解毒剤(viṣadūṣaṇa)を。

二　神々が汝のため、蟻(2)(upajīka)よ、乾燥地に注ぎたるこの〔水〕により、

この毒を消せ。

三 かかる汝はアスラたちの娘なり[3]、神々の妹なり。天より、地より生じたるこの汝は、毒を効果なきもの(arasa)となしたり。

(1) 詳細は不明。一説によれば、サラスヴァティー、イダー、バーラティーの三河を指す。

(2) 蟻の水の所在を感知する本能、cf. *supra* n. 3 *ad* **A** II. 3. 4.

(3) アスラたちに関しては、cf. *supra* n. 2 *ad* **A** I. 10. 2.

【適用】 Cf. **K** 31. 26, **C** p. 102-103. 蟻塚から取った土を、護符として患者に結びつけ、水に溶かして飲ませ、湯に入れて患部に上から下に向かって塗る。

▽毒矢に対する呪文 (四・六)

一 バラモン(brāhmaṇa)は最初に生まれたり、十個の頭、十個の口を持ちて。彼は最初にソーマを飲めり。彼は毒を効果なきもの(arasa)となせり。

二 広袤(こうぼう)において天地に等しく、七河の拡がり流るる限り、われはこの毒を消す呪文(vāc)を宣言せり。

三 鷲(garutmat)は、毒よ、最初に汝を食らえり。汝は〔彼を〕酔わしめざりき。〔彼を〕苦しめざりき。かえって汝は彼のために飲料となれり。

四 五本の指を持つもの(手、射手)が、しかも彎曲せる弓より汝を射たるとき——その矢(apaskambha ?)の鏃(やじり)(śalya)より、われは毒を呪文もて抜き去れり(niravocam)。

五 鏃よりわれは毒を呪文もて抜き去れり、その塗料(毒液)よりまた羽を矧(は)ぎたるところより。逆鉤(ぎゃくこう)ある角(apāṣṭhāchṛiṅga)より、クルマラ(kulmala 鏃と矢柄との接合点)よりわれは毒を呪文もて抜き去れり。

六 汝の鏃は、矢よ、効果なし。しかして汝の毒は効果なし。はたまた効果なき木より作られたる汝の弓は効果なし、効果なきものよ。

七 〔毒を〕砕きし者、塗りし者、投げし者、射放したる者、これらすべての者は不能(vadhri 'impotent')になされたり。毒ある樹木を産する山は不能になされたり。

八 汝を掘る者どもは不能なり。汝は不能なり、植物よ。その聳ゆる山は不能なり、そこよりこの毒の生じたるところの。

【適用】 Cf. **K** 28. 1-4, **C** p. 87-88. この讃歌は **A** IV. 7 と併用される。しかし後者の内容は毒矢に限ら

れず、不明の語句が多い。祭儀は複雑であるが、両讃歌で清めた水が中心をなしている。まず蛇類の王タクシャカ(Takṣaka)を崇拝したのち、種々な祭儀が行なわれる。例えば、熱した襤褸(dūrśa)または古い山羊の皮または掃屑(avakara)を水に投じ、これを患者に注ぐ。水を皿に満たし、毒を塗り、先端を上に向けた二本の矢で掻き廻して飲料を作り、両讃歌を唱えて各詩節ごとにマダナ果を入れ、これを患者に与えて嘔吐させる。

▽頭髪の生長を増進さするための呪文　その一（六・一三六）

一　女神（薬草）なる汝は、女神なる大地の上に、薬草よ、生じたり。かかる汝を、ニタトニー[1]よ、われは掘る、頭髪を強固ならしめんがために。

二　古きものを強固ならしめよ。いまだ生えざるものを生えしめよ。また生えたるものを一層長からしめよ。（この節散文）

三　汝の頭髪にして脱け落ちたるもの、毛根もろとも切[2]り取られたるもの、ここにわれそが上に、一切を癒す薬草を注ぎかく。

（1）nitatnī. 本来「下方に根を生やす」の意味をもつが、薬草としての実体不明。

（2）vṛścate = vṛścyate (pass.). むしろ後者を採用する方がよい。

▽頭髪の生長を増進さするための呪文　その二（六・一三七）

一　ジャマダグニ[1]（聖仙）がその娘のために掘りいだしたる、頭髪を生長せしむるこの〔薬草〕、そをヴィータハヴィアはアシタの家よりもたらせり。

二　そは手綱もて測るべかりし。ヴィアーマ[2]（vyāma）もて測量すべかりし。頭髪が葦のごとく生長せんことを、なが頭より黒々と（asita）。

三　根を強固ならしめよ。先端を伸ばせ。中央を拡げよ、薬草よ。頭髪が葦のごとく生長せんことを、なが頭より黒々と（asita）。

（1）この神話の詳細は不明。アシタは普通名詞として「黒」を意味するゆえに選ばれたものと思われる、cf. asita *vv.* 2, 3.

（2）長さの単位。両腕を拡げた長さ。

【適用】　Cf. **K** 31. 28, **C** p. 103. 使用法は **A** VI. 136, 137 両讃歌に共通。ニタトニーの実をその他の薬草と共に、水を満たした皿に入れ、新月の日に、施術者は黒い衣服を纏い（黒い頭髪の生長を象徴す

る）、黒い食物、すなわち黒い米また胡麻を食べ、星の消える時刻に、鳥の飛び来たる以前に、患者の頭上に注ぐ。

▽性欲を増進するための呪文（四・四）

一　ガンダルヴァ（半神族）が、性的活力を失いたる（mṛtabhraj ?）ヴァルナのために、掘りいだしたる汝、かかる汝をわれらは掘りいだす、男根（śepa）を昂奮せしむる薬草を。

二　ウシャス（「曙の女神」）をして、またスーリア（「太陽神」）をして、わがこの呪文（vacas）をして、また牡牛なすプラジャー・パティ（「造物主」）をして、強烈なる精力（śuṣma 旺盛な性欲）もて、［彼を］奮起せしめよ。

三　昂奮する汝にとり、いわば熱せられたるものが息づくごとく（性的昂奮？）、この薬草をして汝のため、［そを］さらに一層精力に富むものたらしめよ。

四　薬草の中の精力、牡牛の中の精髄（sāra）をして、［彼を］立たしめよ。インドラよ、男子の性欲（vṛṣṇya 生殖力）をこの者の中に置け、みずからを抑制する者（tanūvaśin）よ。

五　汝（薬草）は水の初生の活力（rasa）なり、また樹木の。はたまた汝はソーマの兄弟なり。さらにまた牡鹿の性欲（vṛṣṇya）なり。

六　今アグニよ、今サヴィトリ（神名）よ、今女神サラスヴァティーよ、今ブラフマナス・パティ（「祈禱主」）よ、彼の男根（pasas）をして硬からしめよ、あたかも弓のごとくに。

七　われは汝の男根を硬からしむ、あたかも弓に弦を［張る］がごとくに。抱け、牡鹿の牝鹿におけるがごとく、常に凋むことなき［力］もて。

八　馬の、騾馬の、山羊の、また牡羊の［力］、さらに牡牛の力、そをこの者に授けよ、みずからを抑制する者（インドラ、cf. v. 4）よ。

【適用】 Cf. **K** 40. 14-16, **C** p. 138-139. この讃歌は次の詩節と併用される。「汝を掘るは男の子なり。汝は男の子なり、薬草よ。汝は男の子なり、雄力に富む者よ。男の子のためにわれら汝を掘る。」**A** にないこの詩節は、Ⅳ. 5. 2 として **AP** (Orissa ms., ed. Calcutta p. 249) に見いだされる。——施術者は鉄製の器具（āyasa）をもって二種の薬草を掘る、すなわちウッチュシュマーとパリヴィアーダとを。これらの薬草を熱い牛乳で煮て二種の煎薬（phāṇṭa）を作り、これを患者に飲ませる。この際弦を張った弓が患者の膝の上に載せられる。或いは弓の代りに、患者は杖（mayūkha）または杵（musala）の上に坐らせられる。

▽狂気を癒すための呪文（六・一一一 意訳）

一 重き病の金縛、埒なきことを口ばしる、狂いし人のいましめを、われらがために解け、アグニ。癒えたるのちは怠らで、なれに供物を捧ぐべし。

二 なれの心の高ぶらば、アグニは疾くと鎮めなん。賢きわれは験ある、薬調え癒すべし。

三 神に犯せし罪ゆえか、悪魔に受けし気狂か。賢きわれは験ある、薬調え癒すべし。(1)

四 心狂わすアプサラス(2)（妖精）、またはインドラ、またはバガ（神名）、なべての神もすこやかに、なれを再び癒すべし。

（1） yadānunmādito の代りに yathānun° と改めた。

（2） アプサラスについては、cf. *supra* n. 1 *ad* **A** IV. 36.

【適用】 Cf. **K** 26. 29-32, **C** p. 78. 使用法は **A** II. 2 と共通。祭儀は複雑であるから、ここには特徴ある点のみを摘記する。種々の芳香ある物質の粉末にアージアを塗り、これを主要な供物とする。献供ののち、その残余を患者に上から下へ向かって塗りつける。十字路において患者の頭上に、ダルバ草で作った環を置き、その上に載せた皿の中の炭火の上に、同様の献供を行なう。患者は流れと反対の方向に水辺に赴き、篩から芳香物質を水に振り入れる。その間に施術者は患者の背後から水をかける。芳香物質を素焼の皿に入れ、水を注ぎ、ムンジャ草製の三つ縒の紐をもって、木に作られた鳥の巣の入口に結びつける。

II 息災・長寿法 (āyuṣya)

▽長寿と健康とを得るための呪文(1)（三・一一）

一 われ汝を供物によりて解放す、未知の疾病より、また癆痎(rājayakṣma 肺結核)より、〔汝の〕生きんがために。もしここに捕捉者(grāhi 病魔)が彼を捕捉したりとせば、インドラとアグニよ、それ（捕捉者）より彼を釈放せよ。

二 もし〔彼の〕寿命尽き、或いはもしこの世を去り、〔或いは〕もし死の近くに導かれたりとも、われは彼をニルリティ（「破滅の女神」）の膝より連れ戻す。われは彼を百年の〔齢の〕ためにかち得たり。

三　千の眼・百の雄力・百の寿命を伴う供物によりて、われは彼を奪い戻せり、インドラが彼を百年の間、あらゆる危険の彼岸に導かんがために。

四　生きよ、百秋の間健康を増進しつつ、百冬の間、また百春の間。百〔歳〕を、インドラとアグニ、サヴィトリ（神名）、ブリハス・パティ（「讃頌主」）は〔授けんことを〕。われは百年の齢を保つための供物もて、彼を奪い戻せり。

五　入れ、出息・入息よ、二頭の牡牛（anaḍvah）が囲い（vraja）に〔入る〕ごとく。他の死をして去らしめよ。なお百の〔死の〕残ると人は言う。[2]

六　ここにこそ留まれ、出息・入息よ、汝らはここより去ることなかれ。彼（患者）の身体を、肢体を再び運べ、老齢に〔達せんが〕ために。

七　われは汝（患者）を老齢に引き渡す。われは汝を老齢に委ぬ。幸福なる老齢をして汝を導かしめよ。他の死をして去らしめよ。なお百の〔死の〕残ると人は言う。

八　老齢は汝を抑止せり、あたかも綱もて牡牛を〔繋ぎ留むるが〕ごとく。汝の生まるるや、〔それをもて〕死が汝を抑制したる弛き罠（supāśā）、そをブリハス・パティは真実の両手もて解き放ちたり。

（1）　この讃歌の vv. 1-4 は僅少の差異をもって、R I. 161. 1-4 に相応する。辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三六二―三六三頁参照。なお R *ib*. *v*. 5 は A Ⅷ. 1. 20 に相当する。

（2）　インドには死の数を百一とする慣習があった。

【適用】　Cf. **K** 27. 32-33, **C** p. 86.　讃歌の本文に挙げられる病名は、肺結核（*v*. 1）だけであるが、**K** は過度の性交に起因する病気と解釈し、注釈書は小児の病気にまで拡大している。施術者は悪臭を放つ魚類を加えて作った米の粥を患者に与える。星の光の消える時刻に、野生の胡麻・麻・牛糞または吉祥な行事に用いられる植物（cf. **K** 8. 16）を燃やし、これで熱した水を、患者に灌ぎ、上から下に向かって洗い、患者にこれを啜らせる。

▽長寿を与うるための呪文（七・五三）

一　汝が、ブリハス・パティ（「讃頌主」）よ、かなたなるヤマ（「死神」）の世界より、〔また〕呪詛より、〔われらを〕解放したるとき、神々の薬師アシュヴィン双神は、アグニよ、死をわれらより力もて運び戻せり。

二　汝ら（出息・入息）は相共に歩め。肉体を離るることなかれ。出息と入息とをしてここに汝（師家に入門する少年）の伴侶たらしめよ。生長しつつ百秋（百年）を生きよ。アグニをして汝の

保護者たらしめよ、最良の支配者たらしめよ。

三 遠く隔離せられたる汝の寿命、入息と出息とは再び帰り来たらんことを。アグニはそをニルリティ（「破滅の女神」）の膝より奪い取りたり。われはそを再び汝の体内に入らしむ。

四 出息をして彼を棄てしむることなかれ。入息をして彼を棄ておきて、かなたに去らしむることなかれ。われは彼をサプタ・リシ（太古の七聖仙、後には北斗七星）に委ぬ。彼らが安祥に彼を老齢に運ばんことを。

五 入れ、出息・入息よ、二頭の牡牛が囲いに〔入る〕ごとく（cf. *supra* **A** III. 11.5）。この者のここに繁栄せんことを、老齢の宝蔵（śevadhi）として害わるることなく。

六 われらは汝の出息をこなたに促す。われらは汝の病患をかなたに逐いやる。いと好ましきアグニは、ここにあらゆる方面より、われらに寿命を授けんことを。

七 われら[1]は暗黒より〔いでて〕、最高の天空に昇りつつ、神々の中の神スーリア（「太陽」）、最高の光明に達しつ。

(1) **R** I. 50. 10. 有名な詩節として広く知られる。

【適用】 Cf. **K** 55. 17. 家庭的儀典の一つ、少年の就師入門（upanayana）に際し、同類の讃歌と共に、

師により入門者に唱誦される。

▽少年に長寿を与うるための祈願（二・二八）

一 老寿よ、この者が汝のためにのみ生長せんことを。他[1]の百種の死が、この者を害わざらんことを。思慮深き母が息子を膝の上に〔置くごとく〕、ミトラ（「盟友神」）が彼を友人[2]より起こる困厄より守らんことを。

二 ミトラ、または外敵[3]より守るヴァルナはともどもに、彼[4]を老寿によりてのみ死する者たらしめよ。しかしてアグニはホートリ祭官（讃誦祭官）として〔秘密の〕方途を知り（vayunāni vidvān）、神々のすべての出生を宣示す。

三 彼は地界の牛群、すでに生まれたるものをも、生まれんとするものをも支配す。出息がこの者（少年）を見棄てざらんことを。入息が〔彼を見棄て〕ざらんことを。友人がこの者を殺さざらんことを。敵が〔彼を殺さ〕ざらんことを。

四 父なる天と、母なる地とはともどもに、彼を老寿によりてのみ死する者たらしめよ、アディティ（「無垢の女神」）の膝の上に、出息・入息により守られて、汝が生き得んがために。

五　アグニよ、この者を寿命と栄光とに導け、この愛児を、ヴァルナよ、王なるミトラよ。アディティよ、母のごとく、彼に庇護を与えよ、一切の神々よ、彼が老寿に達し得んがために。

（1）百種の死に老齢による死を加えて、百一種となる、cf. *supra* n. 2 *ad* **A** III. 11. 5.

（2）Mitra「友愛の神」: mitriya < mitra「友人」は 'Wortspiel'.

（3）riśādaḥ < ri = ari + śādas- ?

（4）天寿を全うせしめよとの意味。

【適用】この讃歌の用法は普通の呪法と異なり、家庭的儀典の領域に属する。Cf. **K** 54. 13-14: godāna「最初の髯剃」、*ibid.* 15-17: cūḍākaraṇa「結髪」。**K** によれば、ゴーダーナに際し、両親は交互に三回少年を手渡し、バターの団子を食べさせる。

▽真珠貝の護符により少年に長寿・繁栄を与うるための祈願（四・一〇）

一　風より生まれ、空間より、稲妻より、光明より〔生まれ〕、黄金より生まれたるこの貝、真珠(1)(kṛśana)が、われらを困厄より守らんことを。

二　彼は光明の先頭に、海より(2)生まれたり。われらこの貝によりラクシャス（羅刹）どもを殺し、貪食者ども（atrin 魔類）を克服せんことを、

三　貝により、病患と窮境とを、また貝によりサダーヌヴァー（女性の魔類）どもを。一切を癒す貝、真珠がわれらを困厄より守らんことを。

四　天に生まれ、海より生まれ、川よりもたらされ、黄金より生まれたるこの貝は、われらの寿(3)命を全うせしむる（āyuspratarạṇa）護符なり。

五　海より生まれたる宝珠、雲（vṛtra ?）より生まれたる太陽、この護符が、あらゆるところにおいて、われらを神々およびアスラ（魔類）どもの飛箭より守らんことを。

六　汝は黄金の類の一つなり。汝はソーマ（月）より生まれたり。汝は車の上にありて美しく、箙(isudhi)の上にありて輝く。〔この護符が〕われらの寿命を全うせしめんことを。

七　神々の骨は真珠となりたり。そは生気を有して（ātmanvat）海中を歩む。われはそ（真珠の護符）を汝（入門者）に結ぶ、寿命のために、栄光のために、力のために、長寿のために、百歳の齢のために。真珠〔の護符〕が汝を守護せんことを。

（1）この讃歌では、真珠貝と真珠との間に区別が設けられていない。

（2）真珠の発生には種々の俗信が行なわれ（cf. *v.* 1）、海中に落ちた雨の滴から生じるというのもその

一つである。

（3） R. Geib: Indo-Iranian Journal 16 (1975), p. 269–283 に従った。

【適用】 Cf. **K** 58. 9. 家庭的儀典に属する就師入門の儀の後、師は若い学生に真珠貝の護符を結びつけて、その長寿を祈る。

III 調伏法 (abhicārika)

敵対者の呪詛を反撃する呪法 (kṛtyāpratiharaṇa) をも含む。

▽悪魔に対する呪文（一・一六）

一 いかなる貪食者ども (atrin 魔類) が、新月の夜に、群をなして (vrājam ?) 立ち上がりたりとも、呪術者を殺す (yātuhan) 第四[1]のアグニは、われらを祝福せんことを。

二 ヴァルナは鉛 (sīsa) を祝福す。アグニは鉛を援護す。インドラは鉛をわれに与えたり。そは

実に呪術者を退散せしむ (yātucātana)。

三 こはヴィシュカンダ (viṣkandha 病魔或いは病気の名?) を克服す。こは貪食者どもを追い散らす。これをもちてわれは、ピシャーチャ (魔類) の全族(うから)を克服せり。

四 汝もしわれらの牝牛を、もし馬を、もし使用人 (pūruṣa) を殺さば、かかる汝をわれは鉛もて貫き殺す、汝がわれらの勇者の殺者たらざらんがために。

（1） turiya. 祭式のため疲労した前代の三アグニ（祭火）に関する神話 (**R** X. 51, 52, *etc.*) を予想して、現在のアグニを指すか? 或いは tura「強き」と同義語か?

【適用】 Cf. **K** 47. 23–24, **C** p. 162. 悪魔よりもむしろ敵対者を対象としている。鉛の粉末その他を一緒に包み、食物に混じて食べさせる。同様に眼膏・香油に混じて敵対者に塗らせる。腕の長さの枯れ葦の棒に香油を塗って敵対者を打つ。いずれにせよ鉛の威力が特徴をなしている。

▽敵に対する呪文（三・六）

一 男[1](お)の子は男の子より生まれたり、アシュヴァッタ (菩提樹) はカディラ (植物名) より。彼 (アシュヴァッタ) をしてわが敵を殺さしめよ、われが憎み、またわれを憎むところの。

二 アシュヴァッタよ、われらが強暴なる敵を、駆逐者よ、粉砕せよ、ヴリトラ（悪魔の名）の殺戮者インドラと同盟し、ミトラ（「盟友神」）ともまたヴァルナとも。

三 アシュヴァッタよ、大いなる海（空界）に突[2]き破りいでたるごとく、正にかくこれらすべての者を突き破れ、われが憎み、またわれを憎むところの。

四 勝利を博したる牡牛のごとく、勝ちつつ進むなれ、アシュヴァッタよ、かかる汝と共にわれら願わくは勝利を博さんことを。

五 ニルリティ（「破滅の女神」）をして彼らを、解くることなき死の罠もて縛さしめよ、アシュヴァッタよ、わが敵を、われが憎み、またわれを憎むところの。

六 アシュヴァッタよ、汝が木々に登りつつ（寄生樹として）、彼らを下位（劣者）になすごとく、正にかくわが敵の頭を割り裂け、しかして克服せよ。

七 彼らをして下方に漂わしめよ、留め綱より切り離されたる舟のごとくに。駆逐者により追いやられたる者にとり、再び帰還する道はなし。

八 われらは彼らを追う、意（manas）により、思い（citta）により、はたまた呪文（brahman）により。アシュヴァッタの枝をもって、われらは彼らを追い払う。

（1） 寄生するアシュヴァッタも寄生されるカディラも共に男性名詞。

（2） nirabhanaḥ *2. sg.*, bhañj-

【適用】 Cf. **K** 48. 3-6, **C** p. 167. アシュヴァッタ樹が主役を演じている。カディラに宿ったアシュヴァッタから作った護符を、この呪法の行使者の頭に結ぶ。敵の数だけの罠にインギダ油（cf. **C** p. 159, n. 5 *ad* **K** 47. 3）を塗り、紐をもって結び合わせ、骨壺の中に入れ、敵の致命的場所（田野、祭火の場所、家等、cf. **C** p. 166, n. 41）に埋める。敵の数だけの罠を舟に入れ、この讃歌の第八詩節または **A** Ⅸ. 2. 4 を唱え、カディラに宿ったアシュヴァッタから取った枝をもって水上に押しやり、この讃歌の第七詩節を唱えて、罠が沈むように舟を水中に突き入れる。

▽悪魔・呪術者を見顕わすための呪文（四・二〇）

一 彼（呪術に憑かれた人）は近く見る。彼は向かい見る。彼は遠く見る。彼は見る、天界と空界とをまた地界を。女神（薬草）よ、彼はこのすべてを見る。

二 三層[1]の天、三層の地、ならびにこの六方位を、それぞれに、一切万物をわれ汝によりて見んと欲す、神聖なる薬草よ。

三 汝は神聖なる鷲（太陽または電光）の眸なり。かかる汝は大地に昇れり、疲れし女が輿に乗る

がごとくに。

四　千の眼（まなこ）もつ神（おそらく火神アグニ）は、そ（薬草）をわが右手に置かんことを。われそれによりてすべての者を見る、シュードラ（śūdra 奴婢階級）をもまたアリアン人をも。

五　一切の形を顕（あらわ）になせ。みずからを隠すことなかれ。しかして千の眼もつ者（薬草）よ、汝がキミーディン（魔類）どもを直視せんことを。

六　呪術者（yātudhāna）をわれに示せ。女の呪術者（yātudhānī）を示せ。すべてのピシャーチャ（魔類）どもを示せ。かく願いてわれ汝を手に取る、薬草よ。

七　汝はカシアパ（太陽と関係の深い聖仙）の眼なり。また四つ目の牝犬（神犬サラマー）の眼なり。白昼の空に進む太陽のごとく〔顕なる〕ピシャーチャを隠すことなかれ。

八　われは呪術者、キミーディンを、隠れ家（が）よりあばき捕えたり。(3)それによりわれらはすべての者を見る、シュードラをもまたアリアン人をも。

九　空中を飛ぶものにせよ、天空をよぎり這うものにせよ、地をおのが隠れ家と思うものにせよ、あらゆるピシャーチャをわれに示せ。

（1）　**R** 以来知られる宇宙の構造。

(2)　tena (cf. tayā *f.*, *v.* 4) は文法上の性にもかかわらず、薬草を指すか？　或いは漠然と呪術者の発見を指すか？

【適用】　Cf. **K** 28. 7, **C** p. 88. 危険な呪術者の発見を主眼とする。サダンプシュパーと称する薬草で作った護符を、憑かれた者の頸に結ぶ。またこの者に蜜と酸乳とを食べさせる。

▽呪詛・呪詛者に対する呪文（二・七）

一　罪悪に憎まれ（悪の敵）、神より生まれ、呪詛を払拭する（śapathayopani）植物は、われらよりあらゆる呪詛を洗い去りたり、あたかも水の汚点におけるがごとく。

二　競争者の呪詛、ならびに近親の女子の呪詛、怒りて(1)バラモンの発する呪詛、このすべてはわれらが足下に〔踏み躙（にじ）られて〕あれ。

三　その根(2)は天より吊り下がれり、地より生え登れり。千の節（または茎）あるこの〔植物〕もて、あらゆる方面よりわれらを守れ。

四　われらを守れ、わが子孫を。われらが財宝を守れ。悪意をしてわれらを克服せしむることなかれ。敵意をしてわれらを克服せしむることなかれ。

五　呪詛は呪詛者のもとに行け。友情に富む者と共にわれらをあらしめよ。[3]恐ろしき眼(まなこ)もて詛(のろ)う者、悪意ある者の肋骨を、われらは打ち砕く。

（1）brahmán *m.* ここでは bráhman *n.*「呪文」の使用者、すなわち呪術者？

（2）ニアグローダ(バニアン樹)の描写を想起させる。

（3）cakṣurmantrasya. いわゆる evil-eye(ghoraṁ cakṣuḥ)の信仰については、cf. **C** p. 79, n. 27.

【適用】 Cf. **K** 26. 35, **C** p. 79. 大麦或いはその粒で作った護符を、被害者の頸に巻きつける。しかし大麦(yava)の名は、讃歌の中に見えない。一説によれば *v.* 1 の °yopani の第一音節 yo=yava と解した結果であるという。

▽呪術[1]・呪術者に対する呪文（五・一四）

一　鷲は汝を見いだせり。猪は鼻もて汝を掘りいだせり。汝は、薬草よ、〔われらを〕害わんとする者を害わんと努めよ。呪術師(kṛtyākṛt)を打ち殺せ。

二　呪術者(yātudhāna)を打ち殺せ。呪術師を打ち殺せ。はたまたわれらを害わんとする者をも汝は殺せ、薬草よ。

三　羚羊(かもしか)におけるがごとく、彼の皮膚より一片を切り取りて、神々よ、呪術師にその呪術を括(くく)りつけよ、あたかも頸飾のごとくに。

四　その手を執りて呪術を、かなた呪術師に導き戻せ。そを彼の眼前に置け、そが呪術師を殺すべく。

五　呪術をして呪術師に振り掛からしめよ、呪詛をして呪詛する者に。快走する戦車のごとく、呪術をして呪術師に舞い戻らしめよ。

六　女子にあれ、或いは男子にあれ、悪行のために呪術を施せる者、われらはそを実に彼に導く、馬をその端綱(はづな)によりてなすごとく。

七　汝(呪術)が神々によりなされたりとも、或いは人間によりてなりとも、かかる汝をわれらは導き戻す、インドラを伴侶として。

八　戦闘の勝利者アグニよ、戦闘に勝て。われらは反撃(pratiharaṇa)によりて、呪術を呪術師に打ち返す。

九　貫くことに熟練せる者(kṛtavyadhanin ?)よ、彼を貫け。〔呪術を〕行ないたる者をこそ殺せ。われらは汝を研ぎすまさず、〔呪術を〕なさざりし者を貫かんとて。

一〇　行け、息子が父に〔行く〕ごとく。噛め、踏みつけられし蝮のごとく。縄目を踏み躙るがごとく、呪術よ、呪術師のもとに戻り行け。

一一　野生の羚羊が、牝鹿が、跳躍して〔牝鹿に達する〕ごとく、呪術をしてその行使者に達せしめよ。

一二　矢よりも直ぐに、天地よ、そ(呪術)をして彼に向かい飛ばしめよ。その呪術をして、牝鹿のごとく、再び呪術師を捉えしめよ。

一三　火のごとく流に逆らいつつ、〔しかも〕水のごとく流に従いて、快走する戦車のごとく、呪術をして呪術師に舞い戻らしめよ。

(1)　この讃歌は、危険な呪術・呪術師に対する反撃(pratiharaṇa)の好例である。

【適用】 Cf. **K** 39. 7. **C** p. 133. 他の多くの讃歌と共に、聖水(mahāśānti)の調製に際して使用される。

▽呪法を妨害する敵対者に対する呪文(二・一二)

一　天と地と、広闊なる空界、原野の守護女神、不可思議の濶歩者(ヴィシュヌ神)、はたまた広闊にしてヴァータ(「風神」)に守らるる空界[1]、これらはここに燃えあがれ、われ燃えあがるとき。

二　祭祀に値いする神々よ、これを聞け。バラドヴァージャ(聖仙の名)はわがために讃歌を唱う。われらのこの意図を害う者(敵対者)をして、罠に縛されて不幸に陥らしめよ。

三　ソーマを飲むインドラよ、これを聞け、燃ゆる心もてわれが汝に叫ぶところを。われらのこの意図を害う者を、われは裂く、あたかも斧もて木を〔裂くが〕ごとくに。

四　二百余り四十の歌詠祭官、アーディティア神群、ヴァス神群、アンギラス族(神聖な祭官族)と共に、祖霊(先祖)の祭祀と布施との功徳(iṣṭāpūrta)は、われらを援けよ。われはかの者(敵対者)を神聖なる炎もて捉う。

五　天と地よ、われらを見守れ。すべての神々よ、われらを支持せよ。アンギラス族よ、ソーマを飲む祖霊よ、恐るべきことをなす者をして、不幸に陥らしめよ。

六　マルト神群よ、いわばわれらを軽蔑する者、または執行せられつつある〔わが〕呪文(brahman)を批議する者、かかる者の非行は燃え木たれ。天は呪文の憎悪者を囲み焼け。

七　なれ[2](敵対者)の七息・八髄を(sapta prāṇān aṣṭau majñaḥ)、われ呪文(brahman)もて切り裂く。なれはヤマ(「死神」)の居所に赴くべし、いみじく飾られ、アグニを先導者として。

八　われは汝の足跡を、燃え立つジャータヴェーダス(アグニの称呼)の中に置く。アグニはなが

肉体を焼け。言語(3)もまた呼吸(asu)に入れ。

(1) 正当な呪法に専注する者が熱力(tapas)を発するとき、これらもまた熱力を発せよとの意味？

(2) *vv.* 7, 8 は意義・韻律から見て、本来この讃歌に属しなかったものと思われる。

(3) 意味なき単なる呼吸と化せということか？

【適用】 Cf. **K** 47. 25-29, **C** p. 162-163. 敵対者が南方(ヤマすなわち死の世界の方角)に向かって歩み去るとき、一枚のパラシュ(植物名)の葉をもって、毎回この讃歌を唱えつつ、彼の左足の跡に切れ目を作る、縦に三回、横に三回、最後に斜に。切れ目から塵を取り、葉に包み、揚げもの鍋に投げ入れる。そのときパチパチという音がすれば、敵対者は滅ぼされたのである。

▽敵対者を駆逐するための呪文(六・七五)

一 かの者をその家より逐え、〔われらと争う〕敵対者を。放逐のための供物により、インドラは彼を粉砕せり。

二 ヴリトラ(悪魔)の殺戮者インドラは、彼を最も遠き遠隔地に逐わんことを、そこより彼が永遠に再び帰ることなからんところの。

三 彼をして三個の遠隔地を〔超えて〕行かしめよ。彼をして五種の民族を超えて行かしめよ。彼をして三個の光明界を超えて行かしめよ、そこより彼が永遠に再び帰ることなからんところの、太陽が天にある限り。

【適用】 Cf. **K** 48. 29-31, **C** p. 169. 正規の敷草の後、拇指をもって葦を三回敷く。正規の祭火を消して、別の火を葦の中または籠の中で燃し、赤いアシュヴァッタの葉をもって、毒を混じたインギダ油をこの火の中に注ぐ。

▽敵意(1)に対し保護を求むるための祈願(四・一六 意訳)

一 世の果超えて見はらかす、神の長(ヴァルナ)の目曇りなく、ものみな近し。人知れず、忍ぶとすれど神は知る。

二 立つも歩むも這い行くも、隠るるもはた逃るるも、王者ヴァルナはこれを知る。ひそかに二人相逢うて、見る人なしと語ろうも、知らずやヴァルナここにあり。

三 大いなる地も果てしなき、高きみ空も御世しろす、王者ヴァルナが国の内。二つの海をさし挟む、神とし見れど僅かなる、水の滴もその住処。

四 天つみ空の果超えて、この世の外に行かば行け。ヴァルナの咎め逃れえじ。神の探偵は久方の、天よりここに降り来て、百千の目もて地を見張る。

五 王者ヴァルナは天地の、内外のことを見守りて、人の瞬く数をさえ、知る神なれば三界に、秘めしことなし、賭博者が、骰子の勝目を数うるがごと。

六 恐ろしの罠、なが下す数は七十七、ヴァルナよ、三重に解かれつ。偽りを語ろう輩残りなく、罪の縄目に縛めよ、真を語る人は赦して。

七 百の縄目に縛めて、偽り語る痴者を、ヴァルナよ、赦すことなかれ。箍切り取りし桶のごと、水気に腹のふくらみて（神罰としての水腫病）、悩むはおのが罪のため。

八 ヴァルナの罠、縦なるもまた横なるも、国の内なるも、国の外なるも、神々の罠、人間の罠、

九 なべての罠もて、われ汝を縛す、某々よ（実際には本名を入れる）、某々の末、某々女の子、なべての罠を、われ汝に定む。

(1) *vv.* 1-7 は通常の**A**讃歌と撰を異にし、その荘重な格調と措辞とによって、極めて高尚なヴァルナ讃歌と認められる。ただし最後の二詩節は呪法の目的を明らかにしている。

【適用】 Cf. **K** 48. 7, **C** p. 167. 或る敵を詛わんとするならば、その者が自身に向かって来るのを見たとき、彼に対してこの讃歌を唱える。

▽魔女たちを駆逐するための呪文（二・一四）

一 大胆なるニフサーラー(1)、ディシャナ(?)(2)、一声長く吠ゆる魔女、貪食なる魔女、チャンダ（悪魔）のすべての娘たち、サダーヌヴァー（魔類）どもを、われらは滅亡せしむ。

二 われらは汝らを牛舎より追い払う、車軸より、車体より。われらは汝らを、ムグンディー（悪魔）の娘たちよ、家より駆逐す。

三 下方なるかの家（地下）、そこに魔性の女たちはあれ。そこに破滅は宿れ、すべての魔女たちもまた。

四 万物の主長（ルドラ神）は追い払え、インドラもまたここよりサダーヌヴァーどもを。家の礎に坐する者、彼女をインドラはヴァジュラ（電撃）もて克服せよ。

五 汝らがクシェートリヤ病の(3)（魔類）にせよ、人間により派遣せられたるにせよ、或いはまた汝らがダスユ（土着民）より生まれたるにせよ、ここより失せよ、サダーヌヴァーどもよ。

六 われは彼らの住居を速やかに走せ廻りぬ、あたかも競馬場におけるがごとく。われは汝らと

のすべての競走に打ち勝てり。ここより失せよ、サダーヌヴァーどもよ。

(1) 以下の名称には不明の点が多いが、すべて魔女に関するものと考えた。特にサダーヌヴァーの名が頻出する。

(2) dhiṣaṇa は魔女の名称としては不適当。dhiṣaṇā *f.* と改めるべきである。

(3) おそらく遺伝的病患、三・七(四六頁)参照。

【適用】 内容上この讃歌は、いわゆる駆逐法(cātana)に属する。**K**は本讃歌の種々な使用法を挙げているが、ここには繰り返して流産した婦人のための呪法を説明する。Cf. **K** 34. 3-11, **C** p. 111-112. 流産した婦人は黒衣を纏う。東方と西方とに戸口をもつ三個の小屋を設け、特定の祭儀の後、婦人は黒衣を脱ぎ、東方の戸口から小屋を出る。施術者もこれに点火した後、小屋を出る。同様のことは、これより東方に設けられた他の二個の小屋においても行なわれる。火の西方に二本の草の茎を置き、この讃歌の各詩節の唱えられるにつれ、婦人はウドゥンバラの木片を火中に投入する。――なお流産に関しては、六・一七(一一二頁)を参照せよ。

▽呪詛等もろもろの災厄に対する呪文(四・一七)

一　薬草の女王なる汝(アパーマールガを指す)を、勝ち誇る者よ、われらは手に取る。われは汝を、なべてのため、千の力ある者となせり、薬草よ。

二　真の勝利者、呪詛の撃退者、克服者、反撃者たる〔汝を〕、〔その他〕すべての薬草を、われは呼び集めたり、これよりわれを救えと〔言いて〕。

三　呪詛もて詛いたる女子、悪計[1]をおのが根として取りたる女子、〔われらが〕子供を、その精力を奪わんがために、捉えたる女子、彼女をしておのが子孫を食らわしめよ。

四　彼らが汝に対し、生粘土の皿(呪術用品)の中にて行なえる〔呪術〕、青・赤の紐(nīlalohita 呪術用品)の中にて行なえる〔呪術〕、生肉の中にて行なえる呪術、これによりて呪術者どもを殺せ。

五　悪夢、悪しき生活、ラクシャス(羅刹)、怪しき顕現(abhu)、魔女たち、すべての悪しき名を持つ者、悪しき言葉を語る者、われらはこれらすべてを、われらより消え失せしむ。

六　飢のための死、渇のための死、牛群なきこと、子孫なきこと、アパーマールガよ[2]、われらは汝により、このすべてを拭い去る。

七　渇による死、飢による死、はたまた賭博による敗北、アパーマールガよ、われらは汝により、このすべてを拭い去る。

八　アパーマールガこそ、なべての薬草の中における唯一の支配者なれ。これによりわれらは、

汝の不幸を拭い去る。しかして汝は病患なく暮らせ。

（1） mūra = mūla「根元」？ 或いは「おぞましき悪計を企める女子」の意味か？

（2） apāmārga : apa-mṛj-「拭い去る」は 'Wortspiel'.

【適用】 Cf. **K** 39. 8-31, **C** p. 133-136. **A** Ⅳ. 17, 18, 19 は **A** Ⅱ. 11 等多くの讃歌(cf. **K** 39. 7)と共に、種々の災厄を鎮静させるための聖水(mahāśānti)を調製する際に使用される。特に呪詛のための人形(kṛtyā)の使用に関して、複雑な操作が規定されている。しかし讃歌自身からは、アパーマールガの使用のみが重要視されている。——**A** Ⅳ. 18, 19 も悪意ある呪術者を反撃し、彼らみずからを破滅させることを目的とし、本讃歌と同様にアパーマールガの威力を称讃しているが、特筆すべき興味はない。

▽呪詛を払い、罪悪より身を清むるための呪文（七・六五）

一　果実を逆に向けて(prācīnaphala)、アパーマールガよ、汝は実に生長せり。われよりあらゆる呪詛を駆逐せよ、ここより遙かに遠きかなたへ。

二　われらの悪行、汚点、または罪深くもわれらの犯したること、そを汝により、あらゆる方処に面するアパーマールガよ、われらは拭(1)い去る(apa-mṛj-)。

三　黒き歯をもつ者、不健全なる爪をもつ者、不具なる者と同席したるとき、アパーマールガよ、われらは汝により、その一切を拭い去る。

（1） Cf. *supra* n. 2 *ad.* **A** Ⅳ. 17. 6.

【適用】 Cf. **K** 46. 49, **C** p. 156. 黒い歯、不健全な爪をもつ者、または不具者と接触したとき、この讃歌を唱えて、アパーマールガを薪として燃やした火に、アパーマールガの薪を入れる。

▽呪詛する者を克服するための呪文（六・三七　意訳）

一　千の眼の曇りなく、「呪詛」は車を急がせて、われを詛いし者近く、今し迫りぬ、狼が羊の群を襲うごと。

二　「呪詛」よ、われらを避けて行け。燃ゆる山火も水湛う、池には触れで過ぐものを。われを詛いし者を撃て、雲間ひらめく稲妻が、木を引き裂きて倒すごと。

三　詛わぬわれを詛う者、詛いに詛い返す者、二つながらに恐ろしき、死の犠牲に投げ棄てん、犬に投げやる骨のごと。

【適用】 Cf. **K** 48. 23-26, **C** p. 169. 呪詛者を斃さんとする者は、犬に一塊の白粘土を与える。トリ

チャ(?)の護符を頸に巻き、インギダ油の献供を行ない、この讃歌を唱えて、バーダカの木片を火に投じる。

▽敵の栄光を奪い取るための呪文(七・一三)

一　太陽が昇りつつ、星宿の光輝を奪い取るごとく、正にかくわれは、女子にもあれ、男子にもあれ、〔われを〕憎む者の栄光を奪い取る。

二　いかほどの数にもあれ、汝らわが敵対者が、近づき来たるわれを見つむるとき、昇る太陽が眠れる者の〔栄光を奪い取る〕ごとく、われは〔われを〕憎む者の栄光を奪い取る。

【適用】　Cf. **K** 48. 35-36, **C** p. 170. *v.* 1を敵に向かって唱え、*v.* 2を唱えて彼らに近づき、彼らを見つめる。

▽敵の祭祀を無効ならしむるための呪文(七・七〇)

一　かの者(敵対者)が意(manas)によりまた語(vāc)により、供物と祭詞(yajus)とをもちて祭祀すとも、ニルリティ(「破滅の女神」)はムリティウ(「死」)とともに、彼の献供を、その効験の

実現する前に(purā satyāt)、破滅せしめんことを。

二　呪術者たち(yātudhāna)、ニルリティ、さらにはラクシャス(羅刹)が、彼の真実〔の行作〕(祭祀)を虚偽(anṛta 誤謬)もて、破滅せしめんことを。インドラに派遣せられたる神々は、彼のアージアを攪乱せしめんことを。かの者の行なう献供、そを成就せしむることなかれ。

三　敏捷なる両君王(1)(adhirāja)をして、共に飛ぶ二羽の鷲のごとく、敵対者のアージアを破滅せしめよ、いかなる者がわれらに対し悪意を抱くとも。

四　われは汝の両腕を背後に〔縛す〕。汝の口を閉ず。アグニの忿怒をもちて、汝の供物(havis)を破壊せり。

五　われは汝の両腕を背後に縛す。汝の口を閉ず。恐ろしきアグニの忿怒をもちて、われは汝の供物を破壊せり。

(1)　おそらく *v.* 1に見えるニルリティとムリティウ、或いはミトラ、ヴァルナ両神。

【適用】　Cf. **K** 48. 27-28, **C** p. 169. 本讃歌は **A** Ⅵ. 54と共通の使用法をもつ。祭火を設置した敵対者の祭祀を無効にするため、穀粒の粥を献供する。パラーシャの中央の葉(一本の柄についた三枚の葉の中央のもの)をもって、籾殻(phalīkaraṇa)を献供する。

IV 婦女法 (strīkarman)

▽恋仇の女子を詛うための呪文（一・一四 意訳）

一 恋の幸せ輝きを、奪いて取りぬ、花束を、木より離して棄つるごと。地の面に重く座を占めて、聳え動かぬ山に似て、嫁がで長く家にあれ。

二 黄泉の国知るヤマ王（「死神」）よ、この忌わしき娘子を、なれの嫁とし迎いとれ。この世のうちは味気なく、親同胞の掛り人、嫁がでかこて憂き思い。

三 黄泉の国知るヤマ王よ、この忌わしき娘子を、なれが妻とし授けてん。寄る年波に緑なす、黒髪脱けて落つるまで、嫁がで長く家にあれ。

四 アシタ（聖仙の名）、カシアパ（同上）はたガヤ（同上）の、験もしるき呪禁に、なれが恋路の幸せを、封じ了りぬ乙女子が、秘蔵の筥の蓋固く、いみじき飾り収むごと。

【適用】 Cf. **K** 36. 15–17, **C** p. 121. 恋仇に属する種々の品を、臼の割目に隠し、その上に三個の石を載せる。恋仇の花環を粉にし、その頭髪をもって編んだ環を、別々に黒い紐で括り、三個の石の下に敷く。第一の髪の環の上に第一の石を、第二の環の上に第二の石の順序で。

▽夫（一）の情人を克服するための呪文（三・一八）

一 われこの草を掘る、草木の中にて最も力強き〔草を〕、それにより恋仇を克服し、それにより夫を占有する〔草を〕。

二 平たき葉をもつものよ、幸多きものよ、神々に励まされたるものよ、威力あるものよ、わが恋仇を遠く追いやれ。夫をわれ独りのものとなせ。

三 彼は実になが名を告げざりし。なれはまたこの者を夫としてそがもとに止まらず。最も遙かなる遠方にこそ、われらは恋仇を去らしむれ。

四 われは最上なり、最上なるもの（植物）よ、最上の者たちよりさらに上位なり。しかして下位なるわが恋仇は、最下の者よりさらに下位なれ。

五 われは勝利者なり。なれ（植物）は常勝者なり。われら両者は勝利者となりて、わが恋仇に打ち勝たん。

六　われは勝利者（植物）をながそば近くに置けり。なが上にいとも強力なるものを置けり。なが心はわれに従いて走れ、牝牛の仔牛に〔従い走るが〕ごとくに。水が道を〔流るるが〕ごとく走れ。

（1）　この讃歌は僅少の差異をもって、**R** X. 145 に同じ（辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三七三頁参照）。

【適用】　Cf. **K** 36. 19–21, **C** p. 122–123. バーナーパルニー（おそらく *v.* 1 に挙げられた植物）の葉を細かく砕き、赤い山羊の乳から作った酸乳を混じた水とまぜ合わせ、施術者はこれを恋仇の寝台の廻りに撒く。この讃歌の *v.* 6a を唱えて、上記の植物の葉をその上に敷き、*v.* 6b を唱えてその上に投げる。

▽女子の愛を得るための呪文　その一（二・三〇）

一　ここに風が大地より草を揺がすごとく、かくわれはなが心を揺がす、なれがわれを愛さんがために、われよりほかに離れざらんがために。

二　アシュヴィン双神よ、もし汝らが彼ら（両恋人）を共に導き来たり、両恋人を共に伴い来たらんか、——汝ら両人（両恋人）の幸運は合体せり。心も〔合体せり〕。また誓約（vrata）も〔合体せり〕。

三　鴉たちの語り交さんと欲するとき、無病なる者の語り交さんと欲するとき、そこに彼女をしてわが呼声に向かい来たらしめよ、鏃（やじり）のクルマラ(1)に〔向かうが〕ごとく。

四　内(2)なるものは外となれ、外なるものは内となれ。あらゆる美質をもつ乙女たちの心を把握せよ、薬草よ。

五　この婦人は夫を求めて来たりぬ。われは妻を求めて来たれり。高く嘶（な）く馬のごとく、われは幸運に出合いたり。

（1）　kulmala に関しては、cf. *supra* Ⅳ. 6. 5.

（2）　恋人の内外に変化の起こることを指すか？

【適用】　Cf. **K** 35. 21, **C** p. 117–118. 使用法は **A** Ⅵ. 8, 9, 102 と共通。樹木から取った木片（こっぱ）と、これにまつわる蔓草から取った木片との間に、次の物質、すなわち矢（むしろ矢柄）、クシュタ（薬草）、マドゥガ（同上）、暴風により根こぎにされた草を粉末にし、アージアと混ぜて、その愛情を求めんとする婦人に塗る。

▽女子の愛を得るための呪文　その二（六・八　意訳）

一　仲むつまじく木にまとう、蔓草なしてわれを抱け。われのみなれが恋を得て、あだし契りは結ばざれ。

二　天路を指して飛ぶ鷲の、翼に地の面搏つごとく、われのみなれが恋を得て、あだし契りは結ばざれ。

三　一日のうちに天地を、廻る日の神さながらに、〔なれの心をわれ廻る〕。われのみなれが恋を得て、あだし契りは結ばざれ。

【適用】　上記二・三〇の〔適用〕を見よ。

▽女子の愛を得るための呪文　その三（六・九）

一　あこがれよわが体に、足に、あこがれよ〔わが〕眼に、あこがれよ〔わが〕腿に。われを恋い慕うなが眼、髪の毛が、愛情ゆえに乾かんことを。

二　なれをしもわが腕にすがらしめ、〔わが〕心にすがらしむ、なれわが意図に支配され、わが意志に従うべく。

三　[1]〔仔牛を〕甜むることに〔専念し〕（？）、心に愛情の湧きたる〔牝牛〕、グリタ（ghṛta 固形のバター）の母なる牝牛が、彼女をしてわれに愛情を湧かしめんことを。

（1）　この一行の意味不明。

【適用】　上記二・三〇の〔適用〕を見よ。

▽女子の愛を得るための呪文　その四（六・一〇二）

一　この牽馬（vāha）が、アシュヴィン双神よ、来たりかつ進むごとく、正にかく、汝（愛人）の意はわれに向かいて来たれ、かつ進め。

二　われはなが意を引きつく、駿馬（rājāśva ?）の添馬（pṛṣṭhyā *f.* ?）におけるがごとく。旋風に断ち切られたる草のごとく、なが意をしてわれにまつわらしめよ。

三　眼膏、マドゥガ（植物名）、クシュタ（薬草名）およびナラダ（植物名）の〔力により？〕、バガ（神名、「幸運」）の両手もて、われは素早く従順を選び取る。

【適用】　上記二・三〇の〔適用〕を見よ。

▽女子に熱烈な愛情を起こさしむるための呪文　その一（三・二五）

一　刺戟者（uttuda 愛神カーマ）が汝を刺戟せんことを。おのが寝床に留まるなかれ。カーマの恐ろしき矢をもって、われ汝の心臓を貫く。

二　渇望を羽とし、愛欲を鏃とし、空想をクルマラ（鏃と矢柄との接合点）となすこの矢を、狙い定めて〔番え〕、カーマをして汝の心臓を貫かしめよ。

三　狙い定めて番えられたるカーマの矢は、脾臓を涸らし、その矢羽は直進し、焼き尽くす。この矢もてわれ汝の心臓を貫く。

四　焼き尽くす熱情に貫かれ、口は涸れて、わがもとに忍び寄れ、しとやかにして怒らず、われのみを愛し、言葉やさしく、貞淑なる者として。

五　われ刺棒もて汝を駆り寄す、〔汝の〕母より、また父より、汝がわが意に服し、わが思いに従わんがために。

六　ミトラ（神名）とヴァルナよ、彼女の心より思考の力を除き去れ。しかして彼女を意力なき者として、われのみの支配に置け。

【適用】 Cf. K 35. 22-28, C p. 118-119. 特徴としては、人形(pratikṛti)を用い、特殊の材料で作った弓矢をもって、その心臓部を射抜く点が注目に値いする。求愛者は指で女子を押す(cf. *v.* 1)。マダニー（植物名）の東方に向く二十一本の刺にアージアを塗り、火に入れる。クディー（植物名）の二十一本の先端を赤い糸で括り、火に入れる。新鮮なバターを塗ったクシュタ（植物名）を三日間、毎日三回火で煖める。寝台の長い板を、表面を下に向けて置き、その上に横たわる。湯を満たした皿を、三本の紐で、寝台の足もとの前方に吊るし、横たわりながらこれを足の拇指で動かす。粘土で作った女子の人形の心臓部に、麻の弦を張った弓で、刺を鏃とし、梟の羽をつけ、黒いアーラ樹を棹とする矢を射込む。

▽女子に熱烈な愛情を起こさしむるための呪文　その二（六・一三九）

一　汝ニアスティカー（植物名）は生長せり、わが幸運をもたらしつつ。汝の百〔の梢〕は伸び拡がり、三十三は下に向いて伸びたり。われは千の葉をもつ〔薬草〕により、なが心を乾かす（恋い焦れしむ）。

二　なが心はわがもとにおいて乾け。またなが口は乾け。はたまたなれはわれへの恋ゆえに乾け。しかしてなれは口を乾かして暮らせ。

三　恋心を起こさしめ、恋を燃え立たす汝（薬草）は、褐色にして愛らしきものよ、われらを会合せしめよ。かなたの女子とわれとを会合せしめよ。〔われらの〕心を同じからしめよ。

四　水を飲まざる者の口が乾くごとく、正にかくなれば、われへの恋ゆえに乾け。しかしてなれは口を乾かして暮らせ。

五　鼬（いたち）(nakula)が蛇を切断したるのち、再び[1]結合せしむるごとく、正にかく恋の切れ目を結合せしめよ、威力に富む〔薬草〕よ。

（1）この習性は知られていない。

【適用】Cf. **K** 36. 12, **C** p. 120-121. この讃歌は **A** Ⅵ. 129, Ⅶ. 38 と共通の使用法をもつ。これらの讃歌の一篇をもって、すなわち男子は本讃歌を、女子は **A** Ⅶ. 38 を用い、正規の方法(**K** 33. 7-11, 13)によって、サウヴァルチャラ（植物名）の根を掘りいだし、男子はこれを女子の、また女子はこれを男子の頭上に置く。男子はこの植物の白い花を頭に載せて村に入る。

▽夫を得るための呪文　その一（二・三六）

一　アグニよ、願わくは求婚者(sambhala)が、われらの意に適いて(?)、この少女のもとに来たらんことを、われらの幸運とともどもに。彼女は求婚者たち(vara)に快く、祭典において愛らし。幸運は夫により速やかに彼女のものたれ。

二　ソーマ[1]により嘉（よ）みせられ、ブラフマン（「梵天」）により嘉みせられ、アリアマン[2]（神名）により集められたる幸運を〔われは招来し〕、ダートリ（「創造神」）の真実をもちて夫の獲得(pativedana)を行なう。

三　この女子が、アグニよ、夫を得んことを、王なるソーマは彼女を幸福なる者となせばなり。男の子を生みて正室(mahiṣī)となるべかり。夫のもとに赴き、幸福となりて光り輝け。

四　マガヴァン（インドラ神の称呼）よ、この快く愛すべき洞穴(akhara)が、野獣たちに住み心地よくなれるがごとく、正にかく彼女はバガ（神名「幸運」）に嘉みせられてあれ、相愛の女子として夫と不和をかもすことなく。

五　バガの舟に乗れ、満載して尽くることなき〔舟に〕。それによりなが意に適う求婚者を渡し来たれ。

六　叫びて連れ来たれ、ダナ・パティ（神名「財宝の主」、クベーラまたはインドラ）よ、求婚者の意を〔彼女に〕向かわしめよ。彼女の意に適う求婚者をして、すべて彼女に右側[3]を向くる者たら

しめよ。

七　この黄金、グッグル('bdellium')、アウクシャ(香油の一種)、はたバガ神(cf. *v.* 4)、これらは汝を夫に授けたり、なが意に適う者を見いださんがために。

八　サヴィトリ(神名)はなが意に適う夫を汝に導き来たれ。汝は、薬草よ、彼女に〔夫を〕授けよ。

(1)　ヴェーダの神話によれば、いかなる処女も最初にソーマ、ガンダルヴァ(半神族)およびアグニ(cf. *v.* 1)を夫とする、cf. **R** X. 85. 40, 41. **A** XIV. 2. 3, 4.

(2)　アリアマンとダートリも婚姻と深い関係をもつ、cf. **A** VI. 60. 1-3, XIV. 2. 13. ダートリの代りにプラジャー・パティ(「造物主」)も挙げられる、cf. **R** X. 85. 43

(3)　pradakṣiṇam. 敬意を表することを意味する。

【適用】 Cf. **K** 34. 13-18, **C** p. 112-113. 施術者は米と胡麻とで料理したクリサラ(kṛsara)を女子に食べさせる。この讃歌に挙げられた物品(cf. *v.* 7)に献供の残滓を添加し、野獣の住む洞穴から取った砂を祭壇に撒き、上記の物品を女子に渡す。また米と大麦とを真鍮の皿に入れて女子に渡す。ジャーミー(恐らく女神名)に献供を行ない、彼女は右足から踏みだして歩み去る。施術者は祭火の西方で舟を洗い清め、女子をこの舟に乗らせる。彼は綱に結ばれた七本の紐の先に、それぞれ一頭ずつ七匹の仔牛を繋ぎ、女子をして仔牛を解放させる。もし彼女がこれらの仔牛を、左から右に向かって順次に解くならば、彼女の結婚は成功する(占術、cf. **C** p. 113, n. 11)。最後に新しい衣服を牡牛の上に投げ、これを解放する。

▽夫を得るための呪文　その二(六・六〇)

一　ここにアリアマン(神名、求婚・婚姻の守護者)は来たる、髻髪(けいはつ)を前方に解きほごして、この未婚女のために夫を求め、また妻なき者のため妻を〔求めつつ〕。

二　この女子は、アリアマンよ、他の女子の結婚式に赴きて疲れたり。必ずや今、アリアマンよ、他の女子をして彼女の結婚式に来たらしめよ。[1]

三　ダートリ(「創造神」)は地を支う、ダートリは天を、また太陽を。ダートリはこの未婚女に、その意に適う夫を与えよ。

(1)　anyāḥ (*pl.*)……āyati (ā-ayati *sg.*) は文法上不一致。おそらく anyā (*sg.*) と改むべきであろう。

【適用】 **K** 34. 22-24 (34. 12-24 の1部分)、**C** p. 114. 鳥がまだいずれの方角からも飛んで来ない早暁に、アリアマンに献供する。祭場の四隅(東・南・西・北)に、食物を捧げる(bali 供養)。鳥が飛んで来るその方角から、求婚者が現われる(占術)。

▽男子の愛を得るための呪文（七・三八）

一　われこの薬草を掘る、「われ見草」[1]、〔愛の〕[2]涙をそそる草、遠く去る者を帰らしめ、近づく者を喜び迎うる草を。

二　それによりアスラ女（魔女）が、インドラを神々より誘いし〔草〕、それをもてわれ君を誘う、君の最愛たらんがために。

三　汝（薬草）はソーマ（月）に向かい、また日に向かい、一切の神々に向かう。かかる汝に向いてわれは呼びかく。

四　ここに語るはわれにして君ならず。君は集会（sabhā）においてのみ語れ。君はわれのみの者たれ。な語りそ他の女子につきて。

五　君たとい人なき里にありとも、川を超えてありとも、この薬草は君をわがもとに戻せかし、縄かけし囚人（めしうど）のごとくに。

（1）māṁpaśya. 特別の造語。語義は「われを見る」であるが、むしろ「われを見しむる」の意味か？

（2）インドの伝承によればサウヴァルチャラ草。涙を催させるような強い香気をもつ草か？

【適用】　上記六・一三九の〔適用〕（一〇二頁）を見よ。

▽男子に熱烈な愛情を起こさしむるための呪文（六・一三〇）

一　この情熱（smara）は、快楽の勝利者（rathajit）、快楽の勝利に関与するアプサラス（精女）たちのものなり。神々よ、情熱を送れ。かの者をしてわれに焦がれて燃えしめよ。

二　かの者をしてわれに焦がれしめよとて（iti）、いとしくわれに焦がれしめよとて、神々よ、情熱を送れ。かの者をしてわれに焦がれて燃えしめよ。

三　かの者がわれに焦がれんごとく、〔しかし〕われはかの者に決してかかることのなきごとく、神々よ、情熱を送れ。かの者をしてわれに焦がれて燃えしめよ。

四　彼を〔恋に〕狂わしめよ、マルト神群よ。空界よ。狂わしめよ、アグニよ、汝は〔彼を〕狂わしめよ。かの者をしてわれに焦がれて燃えしめよ。

【適用】　この讃歌は **A** VI. 131, 132 と併用される。Cf. **K** 36. 13-14, **C** p. 121. これらの讃歌を唱えて、女子は豆（māṣa）とスマラ（smara 植物名？）とを、男子の頭上、寝台、寝室または足跡に撒く。葦の先端に点火して四方（東・南・西・北）に投げる、これらの讃歌を唱えつつ、男子の粘土の人形（ひとがた）（āva-

lekhaṇī)に向かって。

▽家人[1]を眠らしむるための呪文（四・五）

一　海より昇りたる、千の角もつ牡牛（月）、この強力なる者により、われらは人々を眠らしむ。

二　風は地の面を吹き渡らず、誰一人見る者はなし。婦人をも犬をも眠らしめよ、インドラを友として進みつつ。

三　長椅子に横たわる〔婦人〕、寝台に横たわる〔婦人〕、吊台に横たわる〔婦人〕、芳香を放つ婦人、われらはこれらすべてを眠らしむ。

四　あらゆる動くものをわれは捉えたり。目を息をわれは捉えたり。あらゆる肢体をわれは捉えたり、夜の暗の深みにおいて（atisarvare）。

五　坐する者、歩む者、誰にもあれ、立ちつつ窺い見る者、これらの者の眼をわれらは閉ず、正にこの邸の〔扉〕のごとくに。

六　母親は眠れ、父親は眠れ、犬は眠れ、家長は眠れ。彼女の親族は眠れ。ここなる周囲の者たちは眠れ。

七　スヴァプナ（「睡眠」）よ、眠の施術もて、すべての人々を眠らしめよ。太陽の昇るまで他の人々を眠らしめよ。われをして、夜の明くるまで、目覚めてあらしめよ、インドラのごとく害わるることなく、傷つけらるることなく。

（1）　この讃歌の *vv.* 1, 3, 5, 6 は、それぞれ **R** VII. 55. 7, 8, 6, 5 に相当する。辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三七五頁参照。

【適用】　Cf. **K** 36. 1-4. **C** p. 119.　皿に満たした水を家に注ぎ、残余を戸口の内部に流す。裸体になって同様の祭儀を繰り返す。曰、家の北隅、目指す婦人の寝台の右前脚および寝台の綱に向かって、この讃歌を囁く。

▽嫉妬から解放せらるるための呪文（六・一八）

一　嫉妬の最初の衝撃を、また最初のものに続くそれを、火を、心を〔焦がす〕火を、われらは汝のために消す。

二　大地に心なきごとく、死者よりさらに心なきごとく、また死者の心のごとく、正にかく嫉妬する者の心は死してあれ。

三　なが心に巣くい、羽搏き飛ばんとするその心、われはそれより汝の嫉妬を解放す、革袋より熱き空気を〔除く〕ごとくに。

【適用】　この讃歌は **A** Ⅶ. 45, Ⅶ. 74. 3 と併用される。Cf. **K** 36. 25-27, **C** p. 123. 嫉妬から解放せんとする人に、これらの讃歌の一篇を囁き、任意の物品を渡し、または本讃歌を唱えて、その人の腹部に息を吹きかける（嫉妬の火を消すための象徴的行作）。火で熱した斧を差し入れて熱くし、**A** Ⅶ. 45. 2 をもって清めた水を飲ませる。

▽嫉妬を鎮むるための呪文（七・四五）

一　あらゆる種族の住む外国（jana）より、シンドゥ（インダス河）よりもたらされたる、遠方より運ばれたる汝こそ実に、われ思う、嫉妬を癒す薬草なれと。

二　燃ゆる火に〔焼かれ〕、ここにかしこに燃ゆる山火事に〔焼かるる〕彼、この者のこの嫉妬を鎮めよ、あたかも水もて火を〔消す〕ごとく。

【適用】　上記六・一八の〔適用〕を見よ。

▽男子を懐妊するための呪文（三・二三）

一　それゆえになれが不妊となれるもの、われはそをなれより消え去らしむ。われら正にそをなれよりよそに、遠く離れし所に置く。

二　男の子の種子（garbha）をして、なが胎に入らしめよ、あたかも矢が箙に〔入るが〕ごとく。そこにながが男の子をして生まれしめよ、十カ月の時満ちて。

三　男の子を生め。彼に続きて男の子をして生まれしめよ。なれをして息子たちの母たらしめよ、すでに生まれし者ならびにこれよりなれが生まんとする者の。

四　牡牛の射出するそれらの幸多き種子（bīja）、なれはそれより息子を得よ。かくしてなれは多産の乳牛たれ。

五　われはながため、プラジャー・パティ（「造物主」）の役目を果たす。種子（garbha）をしてながために入らしめよ。なれは息子を得よ、女子よ、なれに幸（śam）をもたらさんところの。またなれは彼に幸をもたらす者たれ。

六　天を父とし、地を母とし、水を根源となす植物、それらの神聖なる植物をして、息子の獲得

のため、なれを援護せしめよ。

【適用】 Cf. **K** 35. 1-4, **C** p. 114-115. 家庭的儀典プンサヴァナ(puṃsavana)の'**A**-version.' 月経終了の直後、月が男性の名をもつ星宿に宿るときに行なわれる。施術者は女子の頭上で葦(ここでは矢(bāṇa, cf. *v.* 2)と呼ばれる)を葉の鞘から抜きだし、所定の祭儀の後、これを護符として女子の頸に結びつける。鋤の木材から作った皿に、同色の仔牛をもつ牝牛の乳を入れて凝結させ、これに米と大麦とを混じ、さらに種々の植物を加え、全体を細かく砕き、その粉末を右の拇指をもって女子の右の鼻孔に塗る。

▽流産を防ぐための呪文(六・一七)

一 この広き大地が万物の種子(garbha)を孕めるごとく、正にかくなれの胎児(garbha)は保たれてあれ、懐妊の後出産せんがために。

二 この広き大地がこれらの樹木を支うるごとく、正にかくなれの胎児は保たれてあれ、懐妊の後出産せんがために。

三 この広き大地が山々・峰々を支うるごとく、正にかくなれの胎児は保たれてあれ、懐妊の後

出産せんがために。

四 この広き大地が様々に拡がる生物を支うるごとく、正にかくなれの胎児は保たれてあれ。懐妊の後出産せんがために。

【適用】 Cf. **K** 35. 12-15, **C** p. 116-117. 特徴ある祭儀としては、次の諸点が注目に値いする。三個の結び目をもつ弓弦を、妊婦またはジャンバ(口辺に痙攣を起こさせる病魔、cf. **C** p. 103, n. 1 *ad* **K** 32. 1)に憑かれたと思われる者の頸に巻くこと、粘土の粒を食べさせること、寝床の回りに黒い小石を撒くこと等。なお流産に関しては、上記二・一四の〔適用〕(八八頁)参照。

▽女子を不妊となすための呪文　その一(七・三四)

一 アグニよ、すでに生まれたるわが敵対者を駆逐せよ。いまだ生まれざる〔敵対者を〕駆逐せよ、ジャータヴェーダス(アグニの称呼)よ。われらに反抗する者どもを、足下に踏め。われら願わくは、汝に、アディティ(「無垢の女神」)に罪なからんことを。

▽女子を不妊となすための呪文　その二（七・三五）

一　他の敵対者たちを力もて克服せよ。いまだ生まれざる〔敵対者を〕駆逐せよ、ジャータヴェーダスよ。この王国を幸運のために満たせ。すべての神々はこの者を歓迎せんことを。

二　これら汝の百の血管（hirā）、千の脈管（dhamani）、われはこれらすべての孔穴を石もて塞げり。

三　われは汝の母胎（yoni）の上部を下部となす。汝に子孫もまた出産もあることなかれ。われは〔汝を〕石女（うまずめ）となす、子孫なき者となす。われは石もて汝の掩蔽（えんぺい）となす。

【適用】 Cf. **K** 36. 33-34, **C** p. 124. もし敵対者たる女子が男子を生むことを望まないときには、**A** Ⅶ. 34 をもって、もし一般に子孫を生むことを望まないときには、**A** Ⅶ. 35 をもって、牝の騾馬の尿に二個の丸石を粉砕して混ぜ、敵対者の食物に混じて食べさせる。同様に処理した物質を彼女の眼膏および香油に加える。また讃歌を囁きつつ彼女の髪の分け目を眺める。

▽男子を不能となすための呪文（六・一三八）

一　汝は植物の中の最勝なりと聞こえたり、薬草よ。この男子を今日わがために、オーパシャ[1]（opaśa）を戴く不能者（klība 'impotent'）たらしめよ。

二　彼をオーパシャを戴く不能者たらしめよ。さらにまたクリーラ[2]（kurīra）を戴く者たらしめよ。しかしてインドラは二個のグラーヴァン（grāvan ソーマ圧搾用の石）をもって、彼の睾丸を砕け。

三　不能者よ、われは汝を不能者たらしめたり。去勢者（vadhri）よ、われは汝を去勢者たらしめたり。無力者（arasa）よ、無力者たらしめたり。われは彼の頭上にクリーラとカンバ[3]（kamba）とを置く。

四　神の作りたる汝の二本の管――その中に汝の男性力（vṛṣṇya 'virility'）は存す――汝のそれを、われ棒（śamyā）もて砕く、かの女子の陰部の上に。

五　女子が葦を褥（しとね）のために石もて砕くごとく、正にかくわれは砕く、汝の男根を、かの女子の陰部の上に。

（1）婦人の髪飾の一種？　これを頭上に載せることは女装を意味する。

（2）婦人の髪飾または髪形？

（3） おそらくクリーラと同類のもの。

【適用】 Cf. **K** 48. 32–34, **C** p. 169–170. 婦人の恐るべき怨恨を示す呪法で、用語ならびに不潔な物質の使用はこれに相応する。仔牛の尿と糞とを牡の仔牛の包皮(śepyā)にくるみ、睾丸の上に置き、全体をバーダカ樹の棒で粉砕し、これを目指す者の神聖な場所(例えば畑、祭場、家の中)に埋める。同様の祭儀を牡の仔牛の包皮と葦とをもって行なう。

▽小児の上顎に最初の二歯の生えたるときの呪文（六・一四〇）

一 下に向いて生えたる二頭の虎(vyāghra すなわち歯)、父と母とを食わんと欲するこれら二本の歯を、ブリハス・パティ[1]－ジャータヴェーダス(神名)よ、吉祥ならしめよ。

二 米を食らえ、大麦を食らえ、はた豆を、はたまた胡麻を。これ汝らの分け前として蓄えられたり、〔汝らに〕財宝を授けんがために、二本の歯よ。父と母とを害うことなかれ。

三 快く、幸運に富む汝らは歓請せられたり、二本の歯よ。汝らの身体の恐ろしき部分は、他の所へ遠ざかれ、二本の歯よ。父と母とを害うことなかれ。

（1） 通常は別個の神名として扱われ、ジャータヴェーダスはアグニの称呼として用いられる。

【適用】 Cf. **K** 46. 43–46. **C** p. 155. 小児の上顎の二本の歯が、下顎の歯に先立って現われたとき、その悪影響を防ぐための呪法。施術者はこの讃歌の各詩節ごとに、若干の米、大麦または胡麻を撒き、米・大麦・胡麻・豆(cf. *v.* 2)を混ぜて小児に嚙ませる。上記の穀類の一種を水で煮て祭餅を作り、小児に食べさせ、両親もまた食べる。

V 和合法 (sāṁmanasya)

▽和合を得るための呪文 その一（三・三〇）

一 心の一致、意の一致、無敵意を、われ汝らのために致す。汝ら互いに他に愛情を示せ、牝牛がその生まれたる仔牛に〔愛情を示す〕ごとく。

二 息子は父に従順なれ。母と意(こころ)を同じくせよ。妻は夫に蜜を含む優しき言葉を語れ。

三 兄弟互いに、姉妹互いに憎み合うことなかれ。和合し、同じ掟(規律)に服し、言葉優しく語り合え。

四　それにより神々が離反せず、互いに憎むことなきこの呪文(brahman)を、われら汝らの家に施す、家人のために和合を〔もたらすところの〕。

五　年長者に従い、思慮深く、離散することなかれ。同じ軛のもとに一致協力し、互いに言葉優しく語りつつ来たれ。われ汝らを、結束固く意を同じくする者となす。

六　汝らの飲水は共通なれ。汝らの食物の配分は等しかれ。共通の馬具にわれ汝らを共に繋ぐ。一致してアグニを崇拝せよ、車の輻の轂の回りに〔集まる〕ごとく。

七　われ汝らを、結束固く意を同じくする者となす。和解によりて群を同じくする者となす。不死の飲料(amṛta)を守る神々のごとく、夕に朝に、好意をして汝らの有たらしめよ。

【適用】　Cf. **K** 12. 5-9, **C** p. 23-24. 同類の多くの讃歌(**A** V. 1, etc. 下記 **A** VI. 64, VII. 52 参照)と共通の使用法をもつ。水を満たした瓶を持って村の回りを三回右遶し(右側を向けて廻ること)、水を村の中央に流す。スラー酒(surā)を満たした瓶を持って、同様の祭儀を行なう。三歳の牝の仔牛の肉に、シュクティア(śuktya)すなわちアームラ果の酸い汁をかけ、和合を求める人々に食べさせる。

▽和合を得るための呪文[1]　その二(六・六四)

一　汝らは和合せよ、結束せよ、汝らの意は和合せよ、太古の神々が和合して〔供物の〕配分に立ち合いしごとくに。

二　協議は一致して〔あれ〕、会合は一致して〔あれ〕、掟は一致して〔あれ〕、彼らの心は一致して〔あれ〕。共同の供物をわれ汝らに捧ぐ。汝らは共同の意図を抱きてあれ。

三　汝らの意向は一致して〔あれ〕、汝らの心は一致して〔あれ〕。汝らの思考は一致してあれ、いみじき和合の汝らにあらんがために。

(1)　この讃歌の *vv.* 1-3 は、**R** X. 191. 2-4 に相応する、辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三九四―三九五頁参照。なお **R** *ibid. v.* 1 は **A** VI. 63. 4 に見いだされる。

【適用】　上記三・三〇の〔適用〕を見よ。

▽和合を得るための呪文　その三(七・五二)

一　身内との和合われらにあれ。他所人との和合〔われらにあれ〕。アシュヴィン双神よ、汝らはここわれらの間に和合を確立せしめよ。

二　われらをして意と和合せしめよ、知と和合せしめよ。われらをして神意[1]に抗して戦わしむる

ことなかれ。激しき殺戮において、喊声の立ちのぼることなかれ。インドラの矢をして落ちしむることなかれ、決戦の日の到来したるとき。

（1） manasā daivyena を m° adaivyena に改めることに賛成した。

【適用】 上記三・三〇の〔適用〕を見よ。

▽怒りを解くための呪文　その一（六・四二）

一　弓より弦を外すがごとく、われ汝の心より怒りを解く、心を同じくする者となり、二人の友のごとく相伴わんがために。

二　二人の友のごとく、われら両人の相伴わんことを。われ汝の怒りを解く。われらは重き石の下に、汝の怒りを投げ棄つ。

三　われ踵と爪先とをもって、汝の怒りを踏み躙る(abhi-sthā-)、汝が無思慮に（抑制なく）語らず、わが意に従わんがために。

【適用】 Cf. **K** 36. 28-31, **C** p. 123-124. 施術者は、その怒りを解かんとする〔婦人を〕認めたとき、*v.* 1 をもって石を手に取る。*v.* 2 をもって石を下に置く。*v.* 3 をもって石の上に唾を吐く(abhiniṣṭhi-

vati. 本文 *v.* 3 の abhitiṣṭhāmi と音形が類似しているためか?)。この讃歌を唱えて、彼は目指す人の影の中で、弓に弦を張る。（**K** は怒りを男女間のものと解している。）

▽怒りを解くための呪文　その二（六・四三）

一　このダルバ草は怒りを解くものなり(vimanyuka)、身内のためにも、他人のためにも。この怒り(1)を解くものは、怒りの鎮静者と称せらる。

二　多くの根をもち、海に下降するこのダルバ草は、大地より生じ、怒りの鎮静者と称せらる。

三　われらは汝の顎の中なる攻撃を、汝の口の中なる〔攻撃を〕除き去る、汝が無思慮に（抑制なく）語らず、わが意に従わんがために。

（1） vimanyukasya を vimanyukaś ca と改めた。

【適用】 Cf. **K** 36. 32, **C** p. 124. 施術者は所定の方式(cf. **K** 33. 7-11, 13)に従ってダルバ草の根を掘りだし、ダルバ草でこれを巻き、怒っている人の頭に載せる。

▽集会[1]において成功を収むるための呪文（七・一二）

一　プラジャー・パティ（「造物主」）の二人の娘なる集会(sabhā)と公会(samiti)とは、ともどもにわれを恵まんことを。われいかなる人と相会わんとも、彼がわれを援助せんことを。われ愛敬よく会衆に語らんことを、ピトリ（祖霊）らよ。

二　汝の名をわれら知る、集会よ。「談笑」(nariṣṭhā)こそ実にながが名なれ。いかなる人々がながための集会者なりとも、彼らは皆われに同調せんことを。

三　これらの集会者の栄光と分別とを、われわが身に収む。われをこの全集会の成功者たらしめよ、インドラよ。

四　汝らの意が遠く離れたりとも、ここかしこに固定したりとも、われらは汝らの〔意を〕廻り返らしむ。汝らの意はわれにおいて満足せんことを。

（1）集会・集会場は、公の会議・裁判に用いられたばかりでなく、社交場にも当てられ、公許の賭博にも使用された。

【適用】 Cf. **K** 38. 27–28, **C** p. 132. 勝利を得んとする者は、会場の二本の柱(sthūṇa)を握り、会場に敬

意を表する。なお彼は **A** XII. 1. 54 を唱えつつ、北東の方角から会場(pariṣad)に入る(cf. **K** 38. 30)。

▽論敵[1]に勝つための呪文（二・二七）

一　敵をして断じて弁論に勝たしむるなかれ。汝（薬草パーター）は威力ありて優越す。論敵の弁論を打破せよ。彼らをして無力(arasa)ならしめよ、薬草よ。

二　鷲は汝を見いだせり。猪は鼻端もて汝を掘りいだせり。論敵の弁論を打破せよ。彼らをして無力ならしめよ、薬草よ。

三　インドラは汝を腕に置けり、アスラ（魔類）どもを撃滅せんがために。論敵の弁論を打破せよ。彼らをして無力ならしめよ、薬草よ。

四　インドラはパーター草を食せり、アスラどもを撃滅せんがために。論敵の弁論を打破せよ。彼らをして無力ならしめよ、薬草よ。

五　これをもってわれは論敵を克服せんとす、インドラがサーラーヴリカ(sālāvṛka 豺)を〔克服したる〕ごとくに。論敵の弁論を打破せよ。彼らをして無力ならしめよ、薬草よ。

六　鎮静剤をもたらし(jalāṣabheṣaja)、蒼黒き髻髪を戴くルドラ（神名）よ、恐ろしの実行者よ、

論敵の弁論を打破せよ。彼らをして無力ならしめよ、薬草よ。

七　われらを脅す者の弁論を打破せよ、インドラよ。威力によりてわれらを弁護せよ。弁論においてわれを勝利者たらしめよ。

（1）この讃歌の内容は、和合法にふさわしくないが、伝承に従いここに収めた。

【適用】 Cf. **K** 38. 18–21, **C** p. 131. パーター草の使用が特徴をなしている。この薬草の根を嚙み、北東の方角から現われて論敵に近づき、この薬草の根を護符として頸に巻きつける。この讃歌を唱えてその葉七枚を花環として頭に載せる。

VI　国王法 (rājakarman)

▽敵を昏迷に陥らしむるための呪文　その一（三・一）

一　賢明なるアグニは、われらの敵に向かいて進め、呪詛と敵意とに向かいて焼きつつ。彼は敵の軍隊を昏迷に陥らしめよ。しかしてジャータヴェーダス（アグニの称呼）は、〔彼らを〕手なき者たらしめよ。

二　汝らは、マルト神群よ、かかる事態に強力なり。進め、粉砕せよ、克服せよ。これらのヴァス神群は、〔われらに〕請願せられて、〔敵を〕粉砕せり。賢明なるアグニは、実に彼らの使者として〔敵に〕向かいて進め。

三　マガヴァン（インドラの称呼）よ、われらに敵対する敵軍を、――汝ら両神、ヴリトラ（悪魔）の殺戮者インドラよ、またアグニは〔敵に〕向かいて焼け。

四　汝のヴァジュラ（電撃）をして、インドラよ、二頭の鹿毛により一路遙かに促されて、敵を粉砕しつつ進ましめよ。反抗する者、追い来たる者、逃走する者を殺せ。彼らの真の意図を四散せしめよ。

五　インドラよ、敵の軍隊を昏迷に陥らしめよ。アグニとヴァータ（「風神」）との衝撃により、彼らを四散せしめて絶滅せよ。

六　インドラは〔敵の〕軍隊を昏迷に陥らしめよ。マルト神群は力もて〔そを〕殺せ。アグニは〔その〕目を奪え。それをして敗れて退却せしめよ。

【適用】 下記三・二と共通。

▽敵を昏迷に陥らしむるための呪文　その二（三・二）

一　われら[1]の賢明なる使者アグニは〔敵に〕向かいて進め、呪詛と敵意とに向かいて焼きつつ。彼は敵の意図を昏迷に陥らしめよ。しかしてジャータヴェーダスは〔彼らを〕手なき者たらしめよ。

二　このアグニは汝らの心中にある意図を昏迷に陥らしめたり。彼は汝らを家より吹き散らせ。彼は汝らをいたる所より吹き払え。

三　インドラよ、〔彼らの〕意図を昏迷に陥らしめつつ、なが意向を伴いてこなたに進み来たれ。アグニとヴァータとの衝撃により、彼らを四散せしめて絶滅せよ。

四　彼らの意向よ、四散せよ。しかして、〔彼らの〕意図よ、昏迷に陥りてあれ。さらにまた、〔インドラよ〕、今日彼らの心中にあるもの、そを彼らより駆除せよ。

五　かの者どもの意図を昏迷に陥らしめつつ、アプヴァー（「不浄の女神」）よ、彼らの四肢を捉えて去れ。〔彼らに〕向かいて進め。その心中において〔彼らを〕苦痛もて焼け。敵対者を発作（grāhi）もて貫け、暗黒もて敵を。

六　かなたの敵の軍隊は、マルト神群よ、われらに向かいて来たる、力もて競いつつ。彼らを法

外の（apavrata）の暗黒もて貫け、彼らが互いに他を認識し得ざるごとくに。

（1）　Cf. *supra* **A** III. 1. 1.　このほか両讃歌はしばしば類似の語句を示す。

【適用】　三・一と三・二とは共通の使用法をもつ。Cf. **K** 14. 17-21, **C** p. 28. 施術者は米の粥に籾殻を混入し、両讃歌のいずれか一篇を唱えて、これを臼で献供する。同様にアヌ（穀物名）を捧げる。二十一個の小石（śarkara）を敵に向けて、各詩節ごとに若干ずつ箕（み）から篩（ふる）いだす。アプヴァー女神に祭餅を献供する。籾殻およびアヌの使用は、敵の四散を象徴し、小石の使用はその破壊的攻撃力を示す。

▽放逐せられたる王の復位のための呪文（三・三）

一　彼（火神アグニ）は叫びつ。彼がここによくその任務を果たさんことを。アグニよ、広き天地両界に拡がれ。一切の財宝をもつマルト神群は、汝を車に繋げ（活動を促進すること）。頂礼して供物を捧げたるかの者（旧王）を導け。

二　いかほど遠方にありとも、霊感あるインドラ（「王」の意味を兼ねる）を、友情のため赤き〔馬〕（aruṣa ?）は運び来たれ、神々がガーヤトリー（gāyatrī 韻律の名）、ブリハティー（bṛhatī 同上）、〔その他の韻律の〕讃歌を〔唱え〕、サウトラーマニー[1]祭（sautrāmaṇī）によりて、彼を鼓舞すると

き。

三　王者ヴァルナをして、水より汝を呼ばしめよ。ソーマをして、山より汝を呼ばしめよ。インドラをしてこれらの部族のために、汝を呼ばしめよ。鷲となりて、これらの部族に飛び来たれ。

四　鷲をして、呼ぶにふさわしき彼を、遠方よりつれ来たらしめよ、追われて他国に住む彼を。アシュヴィン双神をして汝のため、道を歩み易からしめよ。親族をしてこの者を囲み集わしめよ。

五　反対者をして汝を呼ばしめよ。友人は〔汝を〕選べり。インドラとアグニ、一切神群(Viśve devāḥ)、これらの神々は、汝の臣民に安泰を確保せり。

六　親族にもあれ、他人にもあれ、汝(インドラ)の召喚を批議する者あらば、インドラよ、その者を放逐して、この者をしてここに帰り来たらしめよ(復位せしめよ)。

(1)　本来過度にソーマを飲んで苦しむインドラを癒すための祭式。ここでは放逐のため憔悴した王の力の回復に移して言う。

【適用】　Cf. **K** 16. 30-33, **C** p. 38. **K**に従えば三・三と三・四とは同一の目的をもち、使用法を共通にするという。しかし両讃歌は内容から見て目的を異にするから、ここには三・三のみについて説明し、

三・四は別個に訳出した(下記参照)。この呪法の特徴としては、必要な物品、米、水、草、土塊等は、すべて王の旧領内からもたらされる点にある。王の旧領内の芝生の上に、プローヒタ(purohita 王室付き司祭官)は、水を満たした皿を置き、寝台(或いは軍隊)をかたどった祭餅を作り、それを草に載せて水中に入れる。旧領からもたらされた土塊を細かく砕いて、これをウッタラ・ヴェーディ(uttara-vedi「上部祭壇」)に撒き、王は粥を食べる。第四日の朝、旧領の人民は放逐された王を呼び戻す。

▽王を選定するための祈願(三・四)

一　王国はながもとに来たれり。栄光もて立ちあがれ。前進して汝は、人民の主として、独一の王者として支配せよ(vi rāja 或いは「輝け」)。王よ、一切の方処をして汝を呼ばしめよ。汝はここに侍かれ、敬わるるべき者たれ。

二　人民をして汝を王位に選ばしめよ、これら神聖なる五方処(四方と上方)をして汝を。王国の高所に、頂上に安らえ。強力なる汝は、そこよりわれらに財宝を分配せよ。

三　親族をして汝に向かいて、呼ばわりつつ来たらしめよ。アグニは迅速なる使者として、彼らと共に来るべかり。妻妾をして、息子たちをして、汝に好意あらしめよ。強力なる汝は多くの

貢物を、迎え見るべかり。

四 アシュヴィン双神をして最初に汝を、ミトラ、ヴァルナ両神をして、一切神群をして、マルト神群をして、汝を呼ばしめよ。そのとき汝の意(こころ)を財宝の贈与に専念せしめよ。そこよりわれらに財宝を分配せよ。

五 こなたへ走り来たれ、こよなく遠き所より。天と地との両神をして汝に好意あらしめよ。ここに王者ヴァルナはかく宣(の)れり。かかる彼は汝を呼べり。されば汝はここに近づき来たれ。

六 インドラよ[1]、人間の姿なすインドラ(国王)よ、来たれ、汝はヴァルナと心を同じくして一致したればなり。ここに彼(インドラ)は汝を、みずからの座に呼べり。彼(国王)は神々を祭るべし、また人民を統ぶべしとて。

七 富に満ち、いとも様々なる道は、すべて一致して汝のために広やかなる場所を作れり。彼ら(「道」の擬人化)をして、すべてともどもに汝を呼ばしめよ。汝は強力にして好意に満ち、百年(ももとせ)までもここに住め。

(1) この詩節の前半には不明の点が多く、翻訳は次の改修を含む。indra manuṣyaḥ を indro manuṣyaḥ に、parehi を prehi に、varuṇaiḥ を varuṇena に変えた。Cf. H. Lommel, Schubring-Festgabe, Hamburg 1951, p. 33, n. 4. **AP** III. 1. 6 (Orissa ms., ed. Calc. II, p. 190).

【適用】 上記三・三の〔適用〕を見よ。

▽王の成功・繁栄のための祈願（四・二二）

一 このクシャトリヤ(kṣatriya 王族)を、インドラよ、わがために繁栄せしめよ。汝はこの者を諸部族(viś)の唯一の君主(ekarāja)となせ。彼のすべての敵を去勢せよ(nir-akṣ-)。彼らを優越の闘争(ahamuttara)において、彼に屈服せしめよ。

二 彼に村落・馬群・牛群の配分を与えよ。彼に敵対する者より配分を奪え。この王をして主権(kṣatra)の頂点たらしめよ。彼のすべての敵を彼に屈服せしめよ。

三 この者をしてもろもろの財宝の財宝主(dhanapati)たらしめよ。この王をして諸部族の部族長(viśpati)たらしめよ。彼に、インドラよ、偉大なる栄光を与えよ。彼の敵を栄光なき者とならせ。

四 彼に、天地よ、いみじきものを沢(さわ)に搾りだせ、あたかも熱き乳をいだす二頭の乳牛のごとくに。願わくは、この王がインドラにいとしからんことを、牛群にも、草木にも、家畜にも。

五 われは勝利に富むインドラを汝に結合す、彼（インドラ）により人々は勝利を博し、敗ることなきところの。彼が汝を人民の唯一の君主になさんことを、また人間の諸王の最上者に。

六 汝は最上者なり。誰にもあれ、王よ、汝に敵対する者は劣等なり。唯一の君主、インドラを友として勝ち誇り、汝は敵として振る舞う者どもの食料を奪い来たれ。

七 獅子の形相をなしてあらゆる部族を食らえ。[1] 虎の形相をなして敵を圧倒せよ。唯一の君主、インドラを友として勝ち誇り、汝は敵の食料を掠め取れ。

（1） 王は食者(attṛ)、部族は食物(ādya)と考えられた。

【適用】 Cf. **K** 14. 8-11, **C** p. 27. 王の戦勝を祈る一連の讃歌(cf. **K** 14. 7. ただしこの讃歌は含まれていない)の一篇を唱えて、施術者(この場合おそらくプローヒタ祭官)はアージアまたは碾割の粥(saktu)を献供する。弓を薪とする火に、各詩節ごとに一張の弓を投じる。同様に矢を薪とする火に矢を投じる。アージア献供の残滓を弓に塗り、これを拭って王に授与する。――なお **K** 17. 28-29, **C** p. 41 によれば、ラージャスーヤ祭(Rājasūya 即位式)を行なった大王に対し、プローヒタ祭官は毎朝早くこの讃歌を唱えることが規定されている。

▽戦勝を得るための祈願 その一（六・九九）

一 われは広闊の地（自由）を求めて、汝に呼びかく、インドラよ。困厄（狭隘）より脱せんとして汝を呼ぶ。われは呼ぶ、強大なる復讐者、あまたの名ある独一の誕生者(ekaja)を。

二 われらを殺さんとして今立ちあがる敵の武器、これに対してわれらはインドラの双腕を、われらの周囲にくまなく纏う。

三 われらは救済者インドラの双腕を、われらの周囲にくまなく纏う。そがわれらを救済せんことを。サヴィトリ神よ、ソーマ王よ、われらを快適ならしめよ、安寧のために。

【適用】 上記四・二二の〔適用〕に準じる。

▽戦勝[1]を得るための祈願 その二（五・二〇 意訳）

一 刳りぬく胴の木も堅く、牛の皮はる陣太鼓、打ちこむ音の勇ましく、高鳴りすれば、うち向かう、敵の胆を冷やしつつ、獅子の雄叫さながらに、告げよ味方の勝軍。

二 木胴・牛皮高鳴りて、獅子の雄叫いま挙げぬ、夫恋いわぶる牝牛に、勇む牡牛の咆ゆるごと。

なれは牡牛よ、敵は弱し、なが勝ち誇る手力は、インドラ天の賜物ぞ。

三 群なす牛の中に立つ、牡牛のごとく勇ましく、獲物求めて陣太鼓、音もおどろに鳴り響け。敵は胸を貫かれ、村をうしろに蜘蛛の子を、散らすがごとく逃げゆかん。

四 矢並つくろう敵の陣、破りて撥もさえざえと、目に触るるもの奪いつつ、ここにかしこに鳴り響け。神の御声のほがらかに、高鳴りしつつ陣太鼓、敵の財を掠めとれ。

五 太鼓の音のとどろきに、熟寝の夢を破られし、敵の妻は怯えたち、駈けよるひまももどかしく、すがる愛子の手をとりて、つわものどもの打ちかわす、剣の下を逃げまどう。

六 初鳴りあげよ、陣太鼓、地の面あまねく木魂して、輝きわたり高響け。顎をくわっとうち開き、仇なす敵呑まんずと、ほがらに響け、陣太鼓、空にどよみて幸多く。

七 この天地のそのあわい、ながとどろきの拡がりて、とく鳴り渡れおどろめき。咆えよ鳴神いかずちの、みなぎる声もすさまじく、正しき味方選びつつ、わが勝鬨の喜びを。

八 作りいみじき陣太鼓、音高らかに鳴り響け。つわものどもの太刀・剣、振い励まし、インドラを、守りと頼み、逞しき、味方をつどい集めつつ、仇なす敵うちひしげ。

九 とどろとどろと触れ太鼓、猛きもののふ導きて、知らせの響ここかしこ、村里遠く鳴り渡り、

幸をかち得て、駈引の、道に迷わず、つわものに、戦の誉れ沢にもたらせ。

一〇 幸をめざして威もすごく、獲物に富みて勝ち誇り、わが祈ぎごとに力ます。ソーマを皮の上に打つ石(神酒圧搾の用具)の、若芽が上に踊るごと、調べ雄々しく陣太鼓、獲物の上に舞い踊れ。

一一 敵を滅ぼしとりひしぎ、獲物に心ときめかす、撃ちてしやまん雄力や、言葉の道に秀でたる、匠の歌を作るごと、音色さやけく鳴り渡れ。わが戦いに勝あれと。

一二 揺がざるもの揺がして、戦の庭に勇みたち、勝ちつ進みつ意気高く、刃向こう敵の影いずこ。インドラ天の加護あつみ、祈る味方に心よせ、敵の胆をひしぎつつ、とくとく進め、陣太鼓。

(1) この讃歌は**A**の呪文の一般水準を超えて、文学的に勝れているから、意味を汲んだ旧訳をそのまま載せることとした。正確度に欠ける点については読者の寛恕を乞う。

【適用】 下記六・一一六との選択使用が許される。Cf. **K** 16. 1, **C** p. 33-34. プローヒタ祭官はすべての楽器を洗い、タガラおよびウシーラの粉末で擦り、アージア献供の残滓を塗り、三回鳴らしたのち楽人に渡す。

▽**戦勝を得るための祈願　その三**（五・二一）

一　怯懦、意気沮喪を、敵の間に鳴り響かせ、陣太鼓よ。相互の憎悪、昏迷、恐怖を、われらは敵の間に置く。彼らを打ち倒せ、陣太鼓よ。

二　意（思考）により、眼により、心により戦きつつ、敵は恐怖におびえて逃亡せんことを、〔われらの〕アージアが〔祭火に〕捧げられしとき。

三　木材もて作られ、牝牛の皮もて張られ、すべての部族に属する汝は、恐怖を敵に鳴り響かせ、アージアもて塗りたてられしとき。

四　森の野獣が、人を恐れて震えおののくごとく、正にかく汝は、陣太鼓よ、敵に向かいて叫べ。恐怖に陥れよ、はたまたその意図を昏迷せしめよ。

五　山羊・羊が大いに恐れて、狼より逃げ去るごとく、正にかく汝は、陣太鼓よ、敵に向かいて叫べ。恐怖に陥れよ、はたまたその意図を昏迷せしめよ。

六　鳥たちが日にけに鷲を恐れて、震えおののくごとく、獅子の雄叫を〔恐れての〕ごとく、正にかく汝は、陣太鼓よ、敵に向かいて叫べ。恐怖に陥れよ、はたまたその意図を昏迷せしめよ。

七　すべての神々は、敵を陣太鼓により、また羚羊の毛皮（潔斎の用具）により、恐怖に陥らしめたり、合戦〔の勝敗〕を支配する〔神々は〕。

八　インドラが足音もて、影もろともに戯るるとき、それにより隊伍ごとにかしこに進み来たれるわれらが敵を、恐怖に陥らしめよ。

九　弓弦の響、陣太鼓をして〔あらゆる〕方処に向かいて叫ばしめよ、敵の軍隊が敗北して、隊伍ごとに逃げ行くところの。

一〇　アーディティア（「太陽神」）よ、〔敵の〕視力を奪い取れ。マリーチ（「光線」）よ、追いかけよ。足枷をして伴わしめよ、〔彼らの〕腕力の抜け去りしとき。

一一　汝ら、プリシュニを母とするかの強力なるマルト神群は、インドラを伴侶として、敵を粉砕せよ。王なるソーマ、王なるヴァルナ、マハーデーヴァ（「大神」、後にはシヴァ神の称呼）、はたムリティウ（「死神」）も、インドラも。

一二　神々のこれらの軍隊は、太鼓を旗印とし、心を合わせ、われらの敵を征服せんことを、スヴァーハー（svāhā 神聖な語）。

【適用】 Cf. **K** 16. 2-3, **C** p. 34. 祭儀は上記五・二〇の場合に準じる。ただしこの際プローヒタ祭官は

高声で献供し、祭匙を空中で回転させる。ソーマ草の茎に、アージア献供の残滓を塗り、これを護符として、王族の頸に結びつける。

▽戦勝を得るための祈願(1)　その四（六・一二六）

一　地をはた天を鳴りどよもせ。多くの場所に散り拡がる生類(jagat)を、人々が汝のために獲ち得んことを。かかる汝は、陣太鼓よ、インドラと共に、神々と共に遠方よりさらに遠く、敵を駆逐せよ。

二　高く鳴れ。われらに力をもたらせ。われらに雄力を与えよ。神鳴れ、危険を遠ざけつつ。陣太鼓よ、ここより不幸を駆逐せよ。汝はインドラの拳なり、確固たれ。

三　かなたの者ども(敵)を克服せよ。これらの者ども(味方)をして勝たしめよ。陣太鼓をして朗に鳴り響かしめよ。馬を翅とするわれらの勇士を飛ばしめよ。戦車を御するわれらの勇者を、インドラよ、勝たしめよ。

(1)　この讃歌は多少の差異をもって、**R** VI. 47. 29-31 に見える。

【適用】　上記五・二〇の〔適用〕を見よ。

VII　バラモンの利益を守るための呪法

▽バラモンの迫害者を詛うための呪文　その一（五・一八）

一　神々は、王よ、この〔牝牛を〕汝に与えざりし、食らわんがために。バラモンの牝牛を、王侯(rājanya)よ、食らわんと欲するなかれ、食ろうべからざるものを。

二　骰子(賭博)に誑されたる邪悪の王侯、おのが身を賭として失いし彼は、バラモンの牝牛を食むもよし、「今日われ生きん、ままよ明日を頼まず」〔と言うならば〕。

三　猛毒をもつ蝮(pṛdākū)のごとく、皮もて蔽われたるこのバラモンの牝牛は、王侯よ、硬くして(tṛṣṭa)食ろうに適せず。

四　彼(バラモン)は〔よく〕王権を奪い、栄光を滅す。燃え始めたる火のごとく、彼は一切を焼き尽くす。バラモンこそ食なれと考うる者、その者はタイマータ(taimāta 毒蛇の一種)の毒を飲む。

五　彼(バラモン)を柔和なりと考えて殺す者、神々を嘲る者、財宝を欲し、思慮を欠きて〔行動する者〕、インドラはこの者の心臓に火を点ず。天も地も共に、生存する彼を憎む。

六　バラモンは害わるるべからず、あたかも火のわが身をいとしむ者におけるがごとくに。ソーマは彼の後継者(dāyāda)にして、インドラは彼を呪詛より守る者なれば。

七　彼は百の鉤あるそれ(牝牛)を嚥みこみ、〔しかも〕そを引きいだす能わず、愚にもバラモンの食物(牝牛)を、われ美味を食らうと思う者は。

八　舌は弓弦となり、声はクルマラ(鏃と矢柄との接合点)、歯は苦行の火に血塗られたる棹となる。これらをもちてバラモンは、神々を嘲る者どもを貫く、心臓に達する力ありて、神々に促進せられたる弓をもちて。

九　バラモンは鋭き矢を持ち、飛箭を携う。彼らの射出す矢の雨は、徒事に終わることなし。苦行の火と忿怒とにより追跡し、遠方よりといえども、彼(愚者、cf. *v.* 7)を劈き倒す。

一〇　千人に君臨し、また〔みずから〕千を数えたるこれら[1]ヴァイタハヴィアの族は、バラモンの牝牛を食いて消滅せり。

一一　牝牛はみずから、殺されんとするや、これらヴァイタハヴィアの族を圧倒せり、ケーサラ・

プラーバンダーの最後の牝山羊を料理したる彼らを。

一二　大地が振い落としたるそれら百一の人々は、バラモンの後裔を害いたる者として、再び帰ることなく消滅せり。

一三　神々を嘲る者は、人間の間に徘徊す。彼は毒を飲み、ほとんど骸骨に等し。神々の親縁たるバラモンを害う者は、祖霊の道(pitryāna)によりて、その世界に赴くことなし。

一四　アグニは実にわれらの道導なり。ソーマは〔われらの〕後継者と称せらる(cf. *v.* 6)。インドラは呪詛を滅す。〔祭祀の〕指導者たち(バラモン)は、かくのごとく知る。

一五　毒を塗られたる矢のごとく、王よ、蝮のごとく、牛群の主よ、バラモンのこの矢は恐ろし。彼はこれをもちて、神々を嘲る者どもを貫く。

【適用】　下記五・一九の〔適用〕を見よ。

(1)　ヴィータハヴィアの子孫、cf. *infra v.* 11, **A** V. 19. 1. ただし背後の物語は詳かでない。

▽バラモンの迫害者を詛うための呪文　その二(五・一九)

一　彼らは過度に強大となれり。ほとんど天に触れんとせり。ブリグ(聖仙)を迫害して、スリン

ジャヤの族、ヴァイタハヴィアたちは消滅せり（cf. *supra* V. 18. 10, 11）。

二　アンギラス（聖仙）の後裔にして、バラモンなるブリハットサーマンを貫きたる者どもの子孫を、両顎に歯をもつ牡羊は食らいたり。

三　バラモンに唾を吐き、或いは鼻汁をかけたる者どもは、毛髪を噛みつつ、血の流の中央に坐す（地獄の情景）。

四　バラモンの牝牛が、料理せられつつ踠くとき、そは王国の光輝を絶滅す。牡牛なす（勇敢なる）男の子は生まれず。

五　その（牝牛の）肉を刻むは残酷なり。その肉片は食ろう[1]に硬し（tṛṣṭa）。その乳を飲むは、祖霊に対する罪科なり。

六　王みずから強大なりと思いて、バラモンを食らわんとするとき（迫害）、その王国は掃蕩せらる、バラモンの迫害せらるるその王国は。

七　牝牛は、八本の足・四つの眼・四つの耳・四つの顎・二つの口・二枚の舌あるものとなりて、そはバラモン迫害者の王国を揺り倒す。

八　〔牝牛〕は実にその王国を沈没せしむ、水が難破したる舟を〔浸すが〕ごとくに。バラモンに危害を加うる王国を禍は撃つ。

九　わが蔭に入るなかれと言いて、木々は彼を逐いいだす、バラモンの浄財に対し欲望を抱く者を、ナーラダ（聖仙）よ。

一〇　王者ヴァルナは、それ（バラモンの牝牛）を、神の作れる毒と言えり。バラモンの牝牛を食らいたる者、一人として王国の中に目覚むるなし（全部死滅）。

一一　大地[2]の振い落としたる九九八一〇（或いは九十九）の者ども、バラモンの子孫を害いたる者どもは、再び帰ることなく消滅せり。

一二　足跡[3]を消すために、死者の〔足に〕結ぶクディー、そを神々は、バラモンの迫害者よ、汝の褥と呼びなせり。

一三　迫害せられて悲歎する者の流せし涙、そを神々は実に、バラモンの迫害者よ、汝に宛がわるるべき水と定めたり。

一四　死者の体を洗い、その髯を霑す〔水〕、そを神々は実に、バラモンの迫害者よ、汝に宛がわるるべき水と定めたり。

一五　ミトラ、ヴァルナの両神が降らす雨は、バラモンの迫害者の上に降らず。公会（samiti）は彼

に好意なく、彼は友人を支配し得ず。

（1） asyate を aśyate と改めた。

（2） Cf. *supra* V. 18. 12. ただし数は一致しない。

（3） 葬儀の慣習。クディー（バダリー Judendorn）の枝を死者の足に結ぶ、cf. **C** p. 55 *ad* **K** 21. 13.

【適用】 Cf. **K** 48. 13-22, **C** p. 168. 五・一八と五・一九とは brahmagavī 讃歌と呼ばれて一体をなし、第二の讃歌としては、一二・五の使用が許される。施術者は両讃歌を唱えて、迫害者の足跡の塵を入れて巻いた木の葉を、牝牛の糞の上で解く。また墓地（śmaśāna）で解き、三回某々を殺せと唱える。第二の brahmagavī 讃歌すなわち一二・五を一個の石に向かって唱えたのち、牛糞のための穴に置く。十二日の間、あらゆる戒行を守りつつ、その近くで食物を逓減する苦行に服する（cf. **K** 41. 1, **C** p. 140）。太陽が二回その上に昇ったのち、敵は死んでいる。先端を下に向けた棒をもって、石を上記の穴から取りいだす。

▽アラーティ（「吝嗇・貪欲」）を避くるための祈願（五・七）

一　われらにもたらせ。立ちはだかることなかれ、アラーティよ。運ばれつつあるダクシナー（祭祀の報酬）を遮ることなかれ。頓挫[1]（virtsa）に頂礼あれ。失敗に頂礼あれ。アラーティに頂礼あれ。

二　汝が、アラーティよ、側近者に選べる巧弁者（parirāpin）、われらは汝のため彼に頂礼す。わが利得を挫折せしむることなかれ。

三　神々の作りなせるわれらの利得をして、昼に夜に、成功せしめよ。われらはアラーティを求めて行く。アラーティに頂礼あれ。

四　サラスヴァティー（「弁舌の女神」）、アヌマティ（「合意の女神」）、バガ（「幸運」）を、われらは行きつつ呼ぶ。われは快き、蜜に満ちたる言葉を語れり、神々の神聖なる勧請（devahūti）において。

五　意（思考）に伴わるる言葉により、サラスヴァティーにより、わが懇請する者を、今日信念（śraddhā 布施を喜ぶ心）をして見いださしめよ、茶色なすソーマに与えられて（励まされて）。

六　われらの利得、われらの言葉を頓挫せしむることなかれ。インドラとアグニとの両神は、われらに財宝をもたらさんことを。今日われらに布施せんと欲するすべての者は、アラーティを歓迎せよ。

七　遠くかなたに去れ、不成功よ。われらは汝の飛箭を他にそらす。われは知る汝を、圧迫し劈

くものなりと、アラーティよ。

八 また汝は裸形の女と化し、夢に人々に添う、アラーティよ、汝は人々の思考と意向とを頓挫せしめつつ。

九 偉大にして巨大、あらゆる方処に浸透する者、黄金色なす髪をもつこのニルリティ（ここではアラーティと同一）に、われは頂礼せり。

一〇 黄金色なし幸多く、黄金の褥に安ろう偉大なる者、黄金の衣を纏うこのアラーティに、われは頂礼せり。

（1） アラーティは破滅の女神ニルリティと同類。敬意を表して歓心を買い、悪影響を避けんとする常套手段。

【適用】 **K**はこの讃歌に三種の使用法を規定する。すなわち㈠ **K** 18. 13-15, **C** p. 44 ㈡ **K** 41. 8, **C** p. 141. ㈢ **K** 46. 6, **C** p. 150. ここには㈠の場合のみを紹介する。古いヴィーリナの粉末の上に燃料を置き、**A** Ⅲ. 20 を唱え、その各詩節ごとに古い籠から、小石を混じた米を火に投じる。次いで本讃歌の各詩節ごとに、古い籠から、小石を混じた穀粒を火に投じる。最後に上記の両讃歌（**A** Ⅲ 20, V. 7）を唱えて、二個の籠もろとも献供を行なう。

▽不当の布施の害を防ぐための祈願（六・七一）

一 われしばしば食する様々の食物、黄金、馬また牝牛、山羊、羊、われいかなるものを受領せりとも、ホートリ祭官（献供・讃誦を司る祭官）たるアグニは、そをいみじく捧げられたるものたらしめよ。

二 〔神々に〕捧げられ、〔または〕捧げられずしてわれに来たれるもの、祖霊により与えられたるもの、人間により許容せられたるもの、それによりわが心のいわば輝き渡るもの、ホートリ祭官たるアグニは、そをいみじく捧げられたるものたらしめよ。

三 われ不当に食したる食物、神々よ、布施せんとするにせよ、布施せざらんとするにせよ、われの約束する〔いかなる食物も〕、偉大なるヴァイシュヴァーナラ（アグニの称呼）の威力により、わがために吉祥にして蜜に富む食物たらんことを。

【適用】 Cf. **K** 45. 17. **K** 57. 29-30. 他の多くの讃歌と共にダクシナー（dakṣiṇā 祭祀の報酬）、布施を受領する際に唱えられる。

Ⅷ 増益法 (pauṣṭika)

▽新築の家を祝うための呪文(三・一二)

一 われここに堅固なる家を建つ。グリタ(バター油)を滴しつつそは安泰なる〔礎の〕上に立て。われら願わくは、家よ、この汝の中に入り住まんことを、男の子*のみに恵まれ、勝れし男の子に富み、健全なる男の子と共に。

二 ここに堅固に立て、家よ、馬に富み、牛に富み、富裕に満ち、滋養に富み、グリタに富み、乳に富みてそそり立て、大いなる幸運のために。

三 汝は貯蔵者(dharuṇī)なり、家よ、大いなる[1]屋根に蔽われ、清められたる[2]穀物に富む。仔牛の汝に来たらんことを、少年の来たらんことを。夕に牝牛の群なして帰り来たらんことを。

四 この家を、サヴィトリ、ヴァーユ、インドラ、ブリハス・パティ(以上神名)は、事わきまえて建立せよ。マルト神群は水・グリタもて霑せ*。王者バガ(「幸運」)はわれらの耕作を根深くな

せ。

五 家の主婦(patnī 家の女神化)よ、快き庇護所、女神として、汝は太初において神々に建立せられたり。汝は草を被り、好意に満ちてあれ。しかしてわれらに男の子を伴う富を与えかし。

六 梁よ、天則(ṛta)に従いて柱の上に乗れ。強力にして光り輝き、敵を追い払え。汝の住居にかしずく者どもの害われざらんことを、家よ。われら願わくは、男の子のみに恵まれて、千秋の間生き得んことを。

七 この〔家に〕幼き少年は〔来たれり〕、〔この家に〕仔牛は〔他の〕家畜と共に。この〔家に〕パリスルット酒(parisrut)の壺は、酸乳の瓶と共に来たれり。

八 婦女よ、この満たされたる瓶をもたらせ、甘露(amṛta 不死の飲料)を混じたるグリタの流を。甘露もてこれを飲む人々に注げ。祭祀と布施との功徳(iṣṭāpūrta)がこの家を守護せんことを。

九 われはこの水をもたらす、病患なく、病患を絶やす水を。われは不死の火と共に家に進み入る。

(1) bṛhac-chandāḥ = °chadiḥ ?

(2) pūtidhānya を pūta° に改めた。

【適用】 Cf. K 43. 8-11, C p. 148. ただし K 43. 3-15 に規定された祭儀の一部をなす。施術者は、中央の柱が測定され、建立されるときこの讃歌を唱える。柱にアージアを塗ったのち、この讃歌の *v.* 6 を唱えて横梁を柱の上に置く。彼が *v.* 8 を唱える間に、主婦は水を満たした皿を持ち、施術者自身は土器に入れた火を携えて中に入る。*vv.* 1, 2 を唱えて土台を踏み固める。(この後祭儀は続けられ、床に水を注ぎ、ヴァーストーシュ・パティ(「家の守護神」)に牛乳で煮た粥を捧げる。バラモンを饗応し、バラモンは祝福する。)

▽商売に成功するための祈願 (三・一五)

一 われは商人(1)インドラを促す。彼をしてわれらのもとに来たらしめよ。彼をしてわれらの嚮導者たらしめよ。敵意を、山賊を、野獣を駆逐し、支配力ある彼をして、われに財宝を与うる者たらしめよ。

二 神々の往来する多くの道は、天地の間に行き通う。それらは牛乳・グリタもてわれを満足せしめよ、われ商いて財宝を集め得んがために。

三 願望(2)を抱きて、われは薪もて、アグニよ、グリタもて献供を捧ぐ、不撓の力と雄力とのために。わが能力の及ぶ限り呪文(brahman)もて讃えつつ、この神聖なる讃歌(dhī 霊感、詩想)を〔捧ぐ〕、百の〔財宝を〕かち得んがために。

四 このわれらが侵犯(3)(saraṇi)を、アグニよ、赦せかし、われが遙々来つる道をしも。われらの商売(prapaṇa)と売却(vikraya)とをして成功を収めしめよ。交易(pratipaṇa)をわれに利得あるものたらしめよ。両神(インドラとアグニ)は共々にこの献供を嘉みせよ。われらの歩行と出発とをして成功を収めしめしめよ。

五 それもてわれが商売を行なう財宝、その財宝により、神々よ、われ財宝を求めつつある〔財宝〕、そがわがために増大せんことを。減少することなかれ。アグニよ、利得を害う神々(4)を供物もて遮断せよ。

六 それもてわれが商売を行なう財宝、その財宝により、神々よ、われ財宝を求めつつある〔財宝〕、わがためそれに、インドラをして光輝を添えしめよ、プラジャー・パティ、サヴィトリ、ソーマ(5)、アグニ(以上神名)をして。

七 われらは頂礼して汝を讃う、ホートリ祭官たるヴァイシュヴァーナラ(アグニの称呼)よ。かかる汝はわれらの後裔、われら自身、牛群、生命を監視せよ。

八　願わくは、われら日々欠かすことなく、汝に〔供物を〕もたらさんことを、〔厩に〕立つ馬に〔秣をもたらす〕ごとく、ジャータヴェーダス(アグニの称呼)よ。富の増強により、滋養により喜びつつある、汝の隣人われらをして、アグニよ、害わるることなからしめよ。

(1) インドラを商人(vaṇij)と呼ぶことは奇異であるが、彼は財宝の授受に強力な支配力をもつと考えられた。

(2) **R** III. 18. 3 と同じ。なお次の *v.* 4ab もほとんど **R** I. 31. 16ab に同じ。

(3) 故郷を離れて遠く旅行することを指す。

(4) 韻律・意味から見て、「神々」なる語は削る方がよい。「利得を害う者ども」とする。

(5) *v.* 7 および *v.* 8 は、内容ならびに祭儀における使用にかんがみ、本来この讃歌に関係がなかったものと思われる。

【適用】 Cf. **K** 50. 12, **C** p. 175. 商人はこの讃歌および他の讃歌を唱えて行なった献供の残滓を商品に塗ったのち出発する。なお下記六・一二八の〔適用〕参照。

▽好(よ)き天気を祈るための呪文(六・一二八)

一　星宿がシャカ・ドゥーマ(1)(Śakadhūma)を彼らの王となしたるとき、彼に好日(bhadrāha)を

捧げたり、これを〔汝の〕領有ならしめよと言いて。

二　好日は正午において、好日は夕暮において、われらのものたらんことを。好日は日ごとの早朝に、好日は夜に、われらのものたらんことを。

三　昼夜のために、星宿のために、日月のために、またわれらのために、シャカ・ドゥーマ王よ、汝は好日を作れ。

四　われらのため、夕(ゆうべ)に夜にまた昼に、好日を作れるもの、星宿の王よ、この汝に、シャカ・ドゥーマよ、常に頂礼あれ。

(1) 本来「燃やされた牛糞から出る煙をもつ」を意味し、天気を予知するための呪法に用いられる牛糞そのものを指すにいたったと思われる。またシャカ・ドゥーマを「星宿の王」と呼んだのは、星と天候との密接な関連に起因するものか。

【適用】 Cf. **K** 50. 15–16, **C** p. 175. この讃歌を唱えて、牛糞の団子(piṇḍa)を親しいバラモンの関節に(parvasu *loc. pl.*)に置いて質問する。「シャカ・ドゥーマよ、今日の天気はいかに」と。バラモンは答える。「好日にして吉祥なり」と。上記三・一五等と共に、商用のため旅立つ者の安全・幸運を祈る呪法に属する。

▽**牛群の繁栄を祈るための呪文**（二・二六）

一　離れ行きし牛群はここに帰り来たれ。ヴァーユ（「風神」）は彼らの同伴を楽めり。トゥヴァシュトリ（「工巧神」）は彼らの形態を知る。サヴィトリ（神名）は彼らをこの牛舎に抑留せよ。

二　牛群はこの牛舎に合流せよ。賢明なるブリハス・パティ（「讃頌主」）は彼らを導き来たれ。シニーヴァリー（「新月を支配する女神」）は彼らの先頭に立ちて導け。戻り来たりしものを、アヌマティ（「満月を支配する女神」）よ、抑留せよ。

三　牛群は残りなく合流せよ。馬群も合流せよ。使われ人たちもまた合流せよ、はた穀物の豊饒も。われは合流の名にし負う供物もて（saṁsravyeṇa haviṣā）献供す。

四　われは牝牛の乳を集め注ぐ。アージアもて雄力と滋液とを集め注ぐ。われらが男の子たちは集め注がれたり。牝牛は不動なれ、牝牛の主たるわがもとに。

五　われは牝牛の乳をもたらす。われは穀物の滋液をもたらせり。われらが男の子たちはもたらされたり。妻たちはこの家にもたらされたり。

【適用】 Cf. **K** 19. 14–21, **C** p. 49–50. 施術者は牛舎を掃き清めたのち、左足をもって砂と糞との堆積を

踏み、右手をもって堆積の半分を撒き散らす。同一色の仔牛をもつ牝牛の乳の中に、牡牛の糞、グッグル、塩を混ぜ、さらに米等を加えて祭餅を作り、所定の日に祭火の後方すなわち西方に埋める。第四日の朝、これを食べ、味等に変化が起こっていれば食べない。しかしこれにより目的の達成されたことを知る。

▽**家畜の繁栄を祈るための呪文**（三・一四）

一　心地よき牛舎と財宝と繁昌と、昼生まれたるものの名（吉祥なものの総称）と、われらは汝ら（家畜）を結合す。

二　アリアマン（神名）は汝らを〔これらと〕結合せよ、プーシャン（「牧畜神」）もブリハス・パティ（「讃頌主」）も、財宝の獲得者インドラも〔結合せよ〕。わがもとにおいて、あらゆる好きものを繁栄せしめよ。

三　この牛舎に恐れなく群れ集まり、肥料に富み、ソーマにふさわしき蜜（牛乳）をもたらし、病なく近づけ。

四　ここに来たれ、牛群よ。ここにありてシャカー（śakā 鳥の一種？）のごとく繁栄せよ。また

ここにありて増殖せよ。わがもとにありて、汝らに一致あれ。

五 汝らの牛舎は吉祥なれ。シャーリーシャーカー(sārīśākā 鳥の一種?)のごとく繁栄せよ。またここにありて増殖せよ。われらは汝らをわれと結合す。

六 牛群よ、牛群の主なるわれに伴え。ここなるこの牛舎は、汝らに繁栄をもたらさん。富の増進(rāyaspoṣa)により多数に生存する汝らに、われら願わくは、生き長らえつつ奉仕せんことを。

【適用】 Cf. **K** 19. 14–21, **C** p. 49–50. 上記二・二六等と同一使用法(goṣṭhakarman「牛舎法」)をもつ。主要点については二・二六の〔適用〕を見よ。

▽牛群を保護するための呪文(六・五九)

一 汝は最初の庇護を牡牛に与えよ、アルンダティー(薬草名)よ、汝は〔そを〕乳牛に、いまだ乳をいださざる若牛(?)に、活力あらしめんがために、おしなべて四足の〔家畜〕に〔与えよ〕。

二 薬草アルンダティーは、神々[1]もろともに庇護を与えよ。牛舎をして乳に富ましめよ、また人々をして病患なからしめよ。

三 われらは訴う、色様々に幸多く、生命を与うる〔アルンダティー〕に。そはルドラ(神名)の射かくる飛箭を、牛群より遠くそらさんことを。

(1) saha devīr を sahadevī と改めた。

【適用】 Cf. **K** 50. 13, **C** p. 175. 商用で旅立つ者の安全を祈る祭儀において、他の多くの讃歌と共に唱えられる。上記三・一五(一五〇頁)参照。

▽牝牛が仔牛に愛情を持つための呪文(六・七〇)

一 肉が、スラー酒が、賭場に骰子があるごとく(誘惑の三大原因)、好色の男の心が女子に引き寄せらるるごとく、正にかく、牝牛(aghnyā)よ、汝の心は仔牛に引き寄せられてあれ。

二 象が足もて牝象の足にからむがごとく(udyuje *inf.* 1)、好色の男の心が女子に引き寄せらるるごとく、正にかく、牝牛よ、汝の心は仔牛に引き寄せられてあれ。

三 車の大輪(pradhi)が、副輪(upadhi ?)が、轂(nabhya)が、大輪[1]に〔依存するが〕ごとく、好色の男の心が女子に引き寄せらるるごとく、正にかく、牝牛よ、汝の心は仔牛に引き寄せられてあれ。

（1） pradhāv adhi の意味不明。

【適用】 Cf. **K** 41. 18-20, **C** p. 142-143. 仔牛に母牛の尿を注ぎかけ、牝牛を三回右遶(左から右へ向かって廻ること)させたのち、この讃歌を囁きつつ、仔牛を牝牛の下に導く。この讃歌を牝牛の頭または耳に囁く。

▽大麦の豊作を祈るための呪文（六・一四二）

一 立ち上がれ、おのが威力により豊富なれ、大麦よ。すべての容器を破裂せしめよ。天空よりの電撃(稲妻)は汝を害うことなかれ。

二 耳傾くる神聖なる大麦、汝に向かいてわれらが呼びかくるとき、そのとき立ち上がれ、天空のごとくに。海のごとく無尽なれ。

三 汝の従者は無尽なれ。汝の堆積は無尽なれ。汝を授与する者は無尽なれ。汝の食者は無尽なれ。

【適用】 Cf. **K** 24. 1-2, **C** p. 62. 大麦の種子にアージアを混じ、畑の耕された所に撒く、この讃歌の各詩節ごとに(すなわち三回)、鋤をもって押しやりつつ。その後残りの種子を撒く。

▽穀物の害虫を退治するための呪文（六・五〇）

一 タルダ(tarda 穿孔性の虫?)を殺せ、サマンカ(samaṅka)を、鼠を、アシュヴィン双神よ、その頭を切れ、その肋骨を砕け。それらが大麦を食わざらんがため、その口を閉ざせ。かくして穀物に安全をもたらせ。

二 おおタルダよ、おお蝗(paṭaṅga)よ、おおジャビア(jabhya)よ、ウパクヴァサ(upakvasa)よ。バラモンが、完全に調理せられざる供物を[食わざるがごとく]、この大麦を食わず、害をなすことなく去り行け。

三 タルダー(タルダの女性)の主人よ、ヴァガー(vaghā 害虫の名?)の主人よ、鋭き歯をもつ汝らは、われに耳を傾けよ。森のヴィアドヴァラ(vyadvara 害虫の名?)も、またいかなるヴィアドヴァラも、われはこれらすべてを粉砕す。

【適用】 Cf. **K** 51. 17-22, **C** p. 178. 多くの虫の名に不明の点があるが、畑の害虫に対する象徴的呪法に興味がある。施術者はこの讃歌を囁き、鉄屑を擂り砕きつつ、害虫に荒らされた畑を廻り歩む。この讃歌で清めた石をその畑に撒く。彼は土竜の頭を下に向け、毛で口を縛り、これを畑の中央に埋める。

彼はアーシャー(神名、「場所」)、アーシャー・パティ(神名、「場所の主」)、アシュヴィン双神およびクシェートラ・パティ(神名、「畑の主」)に食物を捧げる(bali 供養)。これらの神格に献供するとき、日没まで沈黙を守らねばならない。

▽蛇を駆逐するための呪文(六・五六)

一 神々よ、蛇がわれらを、子孫と共に、男の子らと共に殺さざらんことを。閉じられたる〔口は〕開かざれ。開かれたるは閉じざれ。神聖[1]なる族(うから)に頂礼あれ。

二 黒き蛇に頂礼あれ。横縞ある蛇に頂礼あれ。褐色にして巻きつく蛇(svaja)に頂礼あれ。神聖なる族に頂礼あれ。

三 われ歯をもって汝の歯を打つ、また顎をもって汝の両顎を、舌をもって汝の舌を、蛇よ、また口をもって汝の口を。

(1) 蛇を宥(なだ)めるために尊敬していう。

【適用】 Cf. **K** 50. 17–22, **C** p. 175. この讃歌は六・一二八等と選択使用が許される。施術者はこの讃歌を唱え、寝所、住居、畑の周囲に条を引く。アージア献供の残滓を轅の穴を通して若干の草の上に注ぎ、戸口に吊す。死んだ牝牛または山羊の胃腸の内容物を細かく砕き、これを住居等に撒く。または土中に埋め、または火に入れる。同様にアパーマールガ(植物名)の花、グドゥーチー(同上)およびシャパ(同上?)につき、同様の祭儀を行ない、根を下に向けて埋める。

▽電光より穀物を守るための呪文(七・一一)

一 汝の広く轟(とどろ)く雷鳴、高らかにこの一切万物の上に拡がる神聖なる旗印(電光)は、われらの穀物を電光もて害うことなかれ。神(インドラ?)よ、また太陽の光線もて害うことなかれ。

【適用】 Cf. **K** 38. 8–10, **C** p. 129–130. この讃歌は下記一・一三と併用される。電光に撃たれたものを取りあげ、讃歌を唱え終わるや速やかに穴に埋める(**K** 38. 8)。種々の植物を白樺の皮に包み、畑の中の穴(?)に埋める。酸乳ならびにまだ採集されていない新鮮な果実を食べる(以上一・一三の〔適用〕、**K** 38. 9–10)。

▽電光に対する祈願(一・一三)

一 汝の電光に頂礼あれ。汝の雷鳴に頂礼あれ。汝の電撃に頂礼あれ、それをもって汝が、敬虔

ならざる者に投擲するところの。

二 汝に頂礼あれ、高所の子よ、そこより汝が熱を集積するところの。われらの身を憐れめ。われらの子孫に慰安を与えよ。

三 高所の子よ、実に汝に頂礼あれ。汝の飛箭と熱気とにわれらは頂礼す。われらは知る、ながの秘密の最高の居所(dhāman)を。なれは海中(雲海)に、中枢(nābhi)として置かれたり。

四 すべての神々が創造したるこの汝、投擲せんがために、勇敢なる矢として〔作られたる汝〕、かかる汝は祭祀の場(vidatha)において、ほめ讃えられつつ、われらを憐め。この汝に頂礼あれ、女神よ(電光 vidyut は女性名詞)。

【適用】 上記七・一一と併用される。

▽雨をこうための呪文(七・一八)

一 裂けよ、大地よ(大雨を受け入れるため?)。破れこの天界の雲を。ダートリ(「創造神」)よ、汝は支配者として、われらのために、天界の水の革袋(dṛti)を解け。

二 熱は焼かざりし。霜は打たざりし。生気を与うる大地をして裂けしめよ。水は、グリタ(バター油)は、実に彼(請雨者)のために流る。ソーマのあるところ(天界)、そは常に吉祥なり。

【適用】 Cf. K 41. 1-7, C p. 140-141. 相当に複雑な祭儀を伴うが、ここには要点のみを摘記する。請雨者は十二日の間次第に痩せるように生活する。マルト神群に献供し、種々の植物を水中に投入する。犬の頭・牡羊の頭・人間の頭髪・古い一対のサンダルを大梁の先に吊し、互いにぶつかり合うようにする。生の土器に水を満たし、これに石を入れ、最後にこれを水中に落とす。――四・一五は、雨神パルジャニア、マルト神群に対して雨を乞い、詩的表現に富み、文学的に勝っているが、やや長篇で部分的に不明の点もあるから割愛した。

▽野獣および盗賊に対する呪文(四・三)

一 ここより三者は去りぬ、虎と人(盗賊)と狼と。実に視界の外に(hiruk)河川は流れ行く。視界の外に神聖なる樹木(バニアン樹?)は〔存す〕。視界の外に敵をして屈服せしめよ。

二 遠き道により狼をして去らしめよ、また最も遠き〔道〕により盗賊をして、遠き〔道〕により歯ある縄(蛇)をして。遠き〔道〕により悪意ある者をして急がしめよ。

三 汝の両眼ならびに口を、虎よ、われらは粉砕す、さらに汝の二十の爪すべてを。

四　歯あるものの先頭に立つ虎を、われらは粉砕す、さらに盗賊をも、次に蛇をも、呪術者(yātudhāna)をも、さらに次には狼をも。

五　今日近づき来たる盗賊、彼をして粉砕せられて去らしめよ。彼をして道の断崖を通りて行かしめよ。インドラはヴァジュラ(電撃)もて彼を殺さんことを。

六　野獣の歯は毀たれたり。肋骨も砕かれたり。汝のため大蜥蜴(godhā ?)をして姿を消さしめよ。兎追う野獣をして墜落せしめよ。

七　口(1)の閉じられたるときは、〔再び〕開くなかれ。口の開かれたるときは、〔再び〕閉ずるなかれ。インドラより生まれ、ソーマより生まれたる汝は、アタルヴァン(聖仙)の「猛虎粉砕呪」(vyāghrajambhana *scil.* brahman)なり。

(1)　野獣の口から開閉の機能を失わしめること。

【適用】 Cf. **K** 51. 1–6. **C** p. 176–177. この讃歌を唱えて捧げたアージア献供の残滓を、カディラ樹の杭に塗る。この杭を持ち上げるごとに、毎回地面に差しつつ、牛群が牛舎或いは村を離れる際、その後から進む。同一色の仔牛をもつ牝牛の乳で作った祭餅を、途上三回インドラに捧げる。その残余により、**A** Ⅲ. 26 を唱えて四方に食物を供え(bali 供養)、**A** Ⅲ. 27 を唱えて四方を崇拝し、中央に特定の

神格を欠く第五のバリ供養を行なう。最後に残余を地上に零す。

▽火事・火熱を防ぐための呪文(六・一〇六)

一　な(火)が来たるところ、なが去るところ、花咲くドゥールヴァー草(水草の一種)、湿地に生ゆる黍の生ぜんことを。或いはそこに井戸の生まれんことを、または蓮華(puṇḍarīka)に満つる池の。

二　ここは水の落ち集まるところ、海の住居なり。池の中央にわれらの家はあり。ながロをかなたに向けよ。

三　われらは膜(jarāyu 本来胎児を包む膜)もて、家よ、汝を包む。汝は実にわれらのため冷たき池たれ。アグニが医薬を作らんことを。

【適用】 Cf. **K** 52. 5–9, **C** p. 179. この讃歌には三種の用法がある。一、鎮火。火事場と延焼の恐れのある場所との間に、水溜を作り、その上にこの讃歌を唱える。家の中で延焼を防がんとする個所に穴を掘り、同様の祭儀を行なう。アヴァカー(水草の一種)をもって家の周囲を囲む。二、試罪法(ordeal)に耐えるため。当事者に燃え立つ油(彼はその中から一片の黄金を取りださねばならない)を渡す、そ

の油にこの讃歌を唱えたのち。彼は熱に耐えることができる。三、火傷の治療。この讃歌で清めた水で患部を洗う。

▽賭博に勝利を得るための呪文　その一（四・三八）

古代の賭博には、ヴィビーダカ（またはヴィビータカ）の実が用いられ、これを多数賭場（地面に作られた窪み）に撒き、賭博者はその若干を握り取り、その数或いは賭場に残った数によって勝負を決したらしい。従って骰子という言葉は全く不適当であるが、翻訳の便宜のために用いられる。四で割り切れる場合をクリタ（kṛta）と呼んで最善とし、割り切れずに一を余す場合をカリ（kali）と呼んで最悪とした。ただし競技法の詳細についてはなお不明の点が多い。辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三二七―三三一頁参照。

一　賭博に成功し・勝利を博する・巧妙なる賭博女、アプサラー(1)を、〔骰子の〕一握り（glaha）にクリタを取るアプサラーを、われここに招請す。

二　〔賭場に〕投げ・撒き散らす・巧妙なる賭博女、アプサラーを、〔骰子の〕一握りにクリタを摑むアプサラーを、われここに招請す。

三　〔骰子の〕一握りよりクリタをかち得つつ、骰子（aya）によりて乱舞するアプサラーは、われらのためその幻力により賭（prahā）を勝ち取らんことを。よき賭物に富み、彼女のわれらに来たらんことを。他の者をしてこのわれらの財をかち得しむることなかれ。

四　骰子(2)に歓喜し、悲しみと怒とをもたらすアプサラーを、魅惑し・狂喜せしむるアプサラーを、われここに招請す。

（1）　精女アプサラスに同じ。ここでは賭博を支配する半神となっている。

（2）　yā akṣeṣu pramodante (*pl.*)を、yākṣeṣu pramodate (*sg.*)に改める。

【適用】　Cf. **K** 41. 10-13. **C** p. 141-142. この讃歌は七・五〇、七・一〇九と併用される。月が星宿プールヴァ・アーシャーダに宿るとき、賭場となるべき場所に穴を掘る。月が星宿ウッタラ・アーシャーダに宿るとき、ヴィビーダカの実を集める。賭場に草を敷きつめ、所定の期間牛乳と蜜とに漬けて保存したのち、上記の讃歌を囁きつつヴィビーダカの実を撒く。

▽賭博に勝利を得るための呪文[1] その二（七・五〇）

一　電撃が常に抗(あらが)うすべなく、樹木を打ち倒すごとく、正にかくわれは今日賭博者たちを抗うすべなく、骰子もて挫(ひし)がんと欲す。

二　活潑なるも、活潑ならざるも、もろもろの種族の財産は、避くるすべなく、あらゆる方面より〔わがもとに〕集まり来たらんことを。クリタ（最善の場合）はわが手中に〔来たらんことを〕。

三　アグニをわれ頂礼して呼び讃う、おのが財宝をもつ〔アグニを〕。彼ここに留りて、われらのためにクリタをかち得んことを。われはあたかも競走する戦車によってのごとく前進す。われ願わくは、敬意を表しつつ（pradakṣiṇam）、マルト神群の讃歌を成就せしめんことを。

四　われら願わくは、汝を伴侶として、〔敵の〕軍隊に勝たんことを。合戦ごとに、われの獲物（aṁśa）を援助せよ。われらのために、インドラよ、広やかにして進み易き道を作れ。マガヴァン（「富裕者」、インドラの称呼）よ、敵の力を破摧せよ。

五　われは汝（敵対者）よりサンリキタ[2]（saṁlikhita）をかち得たり。われはまたサンルッド[2]（saṁrudh）をかち得たり。狼が羊を掠め取るごとく、正にかくわれは汝のクリタを掠め取る。

六　勝れたる賭博者（atidivan）は〔敵対者の〕進出をも克服す。〔熟練したる〕賭博者（śvaghnin）のなすごとく、彼は適時にクリタをかち得。神を愛し、財宝を隠匿せざる者、かかる者に彼（おそらくインドラ）は、実にその本性に従いて、富裕[3]を賦与す。

七　われら願わくは、牝牛もて惨(みじめ)なる当惑を乗り超えんことを、またはわれらすべては大麦もて饑餓を、しばしば呼ばるる者（インドラ）よ。われら願わくは、王者の中の先頭として、害わるることなく、策略もて財宝をかち得んことを。

八　クリタはわが右手に、勝利はわが左手に置かれたり。われ牝牛を得んことを。馬を得んことを。財宝の獲得者たらんことを。黄金を得んことを。

九　汝ら骰子よ、実り多き博戯を与えよ、乳をいだす牝牛のごとく。われをクリタの奔流（連続）と結合せよ、あたかも弓を弦と〔結合するが〕ごとくに。

（1）　この讃歌の vv. 3, 4, 6, 7 は多少の差異を伴いつつ、**R** に相応詩節を有し、**A** 本来のものではない。

（2）　この両語はおそらく賭博の術語で意味不明。正規の賭物と予備？

（3）　rāyaḥ の代りに rāyā と改めた。

【適用】　上記四・三八の〔適用〕を見よ。

IX 贖罪法 (prāyaścitta)

▽祭式の欠陥を是正するための祈願[1] (六・一一四)

一 神々よ、われら〔地上の〕神々(バラモン)が、神に非礼(devaheḍana)を行ないたりとも、アーディティア神群よ、汝らはそれよりわれらを解放せよ、天則の理法に従いて(ṛtasyartena)。

二 天則の理法に従いて、祭祀に値いするアーディティア神群よ、ここにわれらを解放せよ、われらが、祭祀の伝達者よ、祭祀をなし遂げんと欲しつつ、なし遂げ得ざりしとも。

三 脂肪に富む〔祭獣〕もて祭祀しつつ、祭匙(さいじ)もてアージアを捧げつつ、一切の神々よ、汝らのため祭祀をなし遂げんと欲しつつ、わがその意に反してなし遂げ得ざりしとも。

(1) **A** Ⅵ. 114–124 は devaheḍana「神に対する非礼」(本讃歌の冒頭の語)と呼ばれる特別の一節をなし、種々の贖罪のために使用される。**K** 46. 30–42, **C** p. 154–155 によれば、師匠(guru)の死んだとき(**K** *loc. cit.* 31–32)、特殊の食料を食べたとき(33–35)、債権者の死んだとき(36–40 : **A** Ⅵ. 117–119)、

雲なき空から降ってきた雨に濡れたとき(41–42 : **A** Ⅵ. 124)に用いられる。——さらにいわゆるサヴァ・ヤジュニャ章の一部として使用される、cf. **K** 60. 7, Gonda : The Savayajña (Amsterdam 1965). p. 77, p. 118–119, **K** 67. 19 (: **A** Ⅵ. 114, 115, 117), Gonda : *op. cit.*, p. 110, p. 397–401.

▽罪より解放せらるるための祈願 (六・一一五)

一 知りつつまたは知らずして、われらがいかなる罪を犯したりとも、汝らは、一切の神々よ、一致してそれよりわれらを解放せよ。

二 覚めたる時にせよ、眠れる時にせよ、罪深きわれの犯したる罪、過去のものも未来のものも、それよりわれを解放せよ、あたかも木の柱より〔解く〕ごとくに。

三 あたかも木の柱より解放せられたる者のごとく、汗をかきたる者が、水浴して垢より〔清めらるるが〕ごとく、パヴィトラ(pavitra 浄化のための祭式用具)により、清められたるアージアのごとく、一切の〔神々は〕われを罪より清めんことを。

【適用】 Cf. n. 1 *ad supra* **A** Ⅵ. 114.

▽**負債の罪より解放せらるるための祈願**（六・一一七）

一　わが負ういまだ返済せざる債務(apamitya)、そを負いてわれ暮らすヤマ(「死神」)への貢(bali 意味不明)、それにつきここに、アグニよ、われ負債なき者となる。汝はすべての罠を解くべき(vicṛtam *inf.*)〔術を〕知る。

二　実にここにありて、われらはそを返済す。われらは生きつつ、生くる者のためにそを支払う。借用してわが食らいたる穀物、それにつきここに、アグニよ、われ負債なき者となる。

三　われら願わくは、この世において負債なき者たらんことを。さらに遠き〔世界に〕おいて負債なき者たらんことを。また第三〔最高〕の世界において負債なき者たらんことを。神々の通い路(devayāna)の、祖霊の通い路(pitṛyāna)のもろもろの世界、われら願わくは、すべての道に負債なく住し得んことを。

【適用】 Cf. **K** 46. 36–40. **C** p. 154–155. この讃歌は **A** Ⅵ. 118, 119 と併用される(cf. n. 1 *ad supra* Ⅵ. 114)。——これらの讃歌の内容よりも、債権者の死亡後に、負債をいかに処理すべきかにつき、**K** の述べるところに興味がある。すなわち債権者が死亡したとき、債務者は上記の讃歌(**A** Ⅵ. 117–119)を唱えて、その息子に返済する。息子のないときは親類の者に。もしこれもないときは、債権者の埋葬所に投げる。もしこれもないときは十字路に。債務者は借りた物品を灌木の上に置き、上記の讃歌を唱えたのち、これに点火する。

▽**罪より赦免せられて天国に至るための祈願**（六・一二〇）

一　もし空界・地界はた天界を、もし母をまたは父を、われら害いたりしとも、このアグニ・ガールハパティア(「家火」)は、われらをこれ(この罪)よりして実に善行の世界へと導きいださんことを。

二　大地はわれらの母、アディティ(「無垢の女神」)は母胎なり。空界は兄弟としてわれらを呪詛より〔守らんことを〕。父なる天は、祖霊の〔世界より〕安祥をわれらに〔与えよ〕。われ願わくは、縁者(祖霊)のもとに到達し、その世界より墜ちざらんことを。

三　良き友人たち、善行者たちの愉悦する天界(svarga)、おのが身体の病患を棄て去りて、跛者なく、肢体に欠くる者なき所、われら願わくは、そこに両親を、息子を見得んことを。

【適用】 Cf. n. 1 *ad supra* **A** Ⅵ. 114.

▽雨滴の悪影響を払うための祈願（六・一二四）

一 いま天より、広大なる空界より、水の滴はわれに滋味もて降り来たりぬ、雄力・牛乳もろともに。われは、アグニよ、韻律[1]もて、祭祀もて、善行者の所行と〔共ならんことを〕。

二 もし木より降り来たりしならば、その果実なり。もし空界よりならば、そは実に風なるのみ。そがわが身体のいかなる部分、また衣服のいかなる部分に触れたりとも、水はニルリティ（「破滅の女神」）を遠く逐いやれ。

三 そは香わしき脂膏(abhyañjana)なり、成功なり。黄金・栄光、そは実に浄化物なり。すべての浄化具(pavitra)はわれらより張り拡げられたり。ニルリティをしてまた敵意をして、そを超えしむることなかれ。

（1） 韻律(chandas)は祭祀の重要な要素として呪力をもつ。

【適用】 Cf. **K** 46. 41-42, **C** p. 155 (cf. n. 1 *ad supra* **A** VI. 114). この讃歌を唱えて、雲なき空から降ってきた雨滴を拭う。施術者はもろもろの吉祥な物質をもって、雨に濡れた者に触れる。

▽妖魔グラーヒより解放せらるるための呪文（六・一一三）

一 トリタ[1]の上に神々はこの罪を拭えり。トリタはそれ[2]を人間の上に拭えり。さればもしグラーヒが汝に到達したるときは、そをそれらの神々は呪文(brahman)もて消え失せしめんことを。

二 光線に、煙に入れ、罪悪よ。蒸気にまた霧に入れ。水泡の中に消え失せよ。プーシャン（神名）よ、胎児を殺したる者(bhrūṇahan)の悪行を拭え。

三 トリタにより拭い去られたるもの、人間の罪は、十二[3]の場所に置かれたり。さればもしグラーヒが汝に到達したるときは、そをそれらの神々は呪文もて消え失せしめんことを。

（1） 神々はすべての罪をトリタに移し、トリタはそれをさらに人間に移す。

（2） enam を enan = enat と改めた。

（3） この数字を満たす試みは的確でない。

【適用】 下記六・一一二の〔適用〕参照。

▽**兄に先立って結婚する弟の罪を消すための呪文**（六・一一二）

一　この者（兄に先んじて結婚した弟）をして、アグニよ、長兄（jyeṣṭha）を殺さしむることなかれ。根絶（mūlabarhaṇa）より彼を守れ。賢明なる汝は、グラーヒ（上記六・一一三参照）の罠を解け。すべての神々は汝に同意せんことを。

二　汝は、アグニよ、彼らの罠を解け、その三個〔の罠〕により彼ら三者が縛められたりしところの。賢明なる汝はグラーヒの罠を解け、父と息子・母、すべてを解放せよ。

三　それをもって長兄が縛せられ、各肢において煩わされかつ縛められたりし罠、それらが解き去られんことを。何となれば彼らは解放者[1]なれば(?)。プーシャンよ、胎児を殺したる者の悪行を拭え。

(1)　vimucaḥ : vi-muc-, 'Wortspiel' ?　罠自体を指す？

【適用】 Cf. 46. 26–29. **C** p. 153–154. この讃歌は上記六・一一三と併用される。弟が先に結婚した兄（parivitti, °vitta. etc.）と兄に先だって結婚した弟（parividāna）とを、流れの岸に坐らせ、施術者は両者の関節の回りに、ムンジャ草で編んだ紐を結ぶ。アージア献供の残滓を混じた水を皿に入れ、草の

若芽を加え、これを彼らの関節に注ぐ。頸および腕の紐を、川の水泡の上に置き、**A** VI. 113. 2cd を唱えて流しやり、他の紐を流れの中央に投げる。両人が家にはいったのち、施術者は彼らに水をかける。

▽**災厄を避くるための呪文**（六・二六）

一　災厄（pāpman）よ、われを自由ならしめよ。威力ある汝はわれを憐め。われを幸福の世界に置け、災厄よ、曲げ害うことなく。

二　汝もしわれらより離れざらんか、われらは実に汝より離る。別れ道において、災厄は他の者の後を追わんことを。

三　われらより他の所に、不死なるサハスラークシャ[1]をして好んで住ましめよ。われらの憎む者に達せんことを。またわれらの憎む者、実に彼を殺せ。

(1)　「千眼を有する者」、おそらく呪詛、cf. *supra* **A** VI. 37. 1.

【適用】 Cf. **K** 30. 17–18, **C** p. 97–98. 施術者は夜中に炒った大麦の粒を篩に入れ、この讃歌を唱えてこれを南西(?)の方角に撒く。翌日彼はこの讃歌を唱えてサハスラークシャのため水中に供養する。十字路において三個の祭餅を捏ね合わせて投下し、これを撒き散らす。

▽[1]不吉なる鳥に対する呪文　その一（六・二七）

一　神々よ、いかなることを望みつつ鳩が、ニルリティ（「破滅の女神」）の使者として派遣せられ、ここに来たれりとも、われらはそれに〔呪文を〕歌わんと欲す。贖罪を行なわんと欲す。われらが二足のもの（人間）に安祥あれ。四足のもの（家畜）に安祥あれ。

二　鳩は派遣せられてわれらに吉祥なれ。鳥は、神々よ、われらの家に向かいて無害なれ。霊感あるアグニは実にわれらが供物を嘉みせよ。翼ある飛箭（鳩）はわれらを避けよ。

三　翼ある飛箭はわれらを害うべからず。炉辺において（āṣtri *loc.* ?）〔鳩は〕足を炉中に入る（灰に足跡をつける）。われらが牛群と人間とに吉祥あれ。鳩が、神々よ、ここにわれらを傷つくることなかれ。

（1）　この讃歌は僅少の差異をもって、**R** X. 165. 1-3 に同じ。辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三八三―三八四頁参照。

【適用】　下記六・二九の〔適用〕を見よ。

▽不吉なる鳥に対する呪文　その二（六・二八）

一　聖なる詩節（ṛc）もて、鳩を逐いに逐え、栄養を享受しつつ、われらは牝牛を導き廻る、険しき道を踏み破りつつ。そ（鳩）はわれらに活力を残して最も[1]速やかに飛び去れ。

二　ここなる者たちは聖火を運び廻りたり。ここなる者たちは牝牛を導き廻りたり。彼らは神々の間に名声をかち得たり。誰かあえてこれらの者を襲わんや。

三　多くの者のために道を窺いつつ見いだして、〔天の〕高所に達したる者、二足のもの（人間）を、四足のもの（家畜）を支配する者、この死神ヤマに頂礼あれ。

（1）　pathiṣṭaḥ を patiṣṭhaḥ = **R** X. 165. 5 と改めた。

【適用】　下記六・二九の〔適用〕を見よ。

▽不吉なる鳥に対する呪文　その三（六・二九）

一　翼ある飛箭（不吉な鳥）は、かなたの者に命中せんことを。梟（ふくろう）の鳴くとき、そは無効なれ、或いは鳩が足を火に踏み入るるときにも（cf. *supra* **A** VI. 27. 3）。

二　ニルリティ(「破滅の女神」)よ、汝の両使者がここに派遣せられざるにせよ、派遣せられたりしにせよ、われらが家に来たるとき、鳩と梟とにとり、足を入るべき所ならざれ。

三　〔不吉なる鳥は〕ここに飛び来たるもよし、〔われらの〕男の子を殺すためならずんば。そはここに止まるもよし、〔われらが〕男の子に富まんがためならば。かなたに向かい、呪文もてかなたの地にそを逐い払え、ヤマ(「死神」)の家において、汝(鳥)が憔悴せるを見んがために、汝が空虚(abhūka 無力)なるを見んがために。

【適用】　Cf. **K** 46. 7-8, **C** p. 150-151.　六・二七―二九は併用される。不吉な鳥(鳩または梟)が飛んで来たとき、施術者はこれらの讃歌をマハーシャーンティ聖水の調製(cf. **K** 39. 8-9)に当って追加する。呪法を要請する者は、燃えさしの薪と牝牛とを伴い、夜中、施術者が **A** Ⅵ. 28. 2 を唱える間に、自家の周囲を三回廻る。

▽黒い鳥による汚れを払うための呪文(七・六四)

一　黒き鳥(烏?)が飛び来たりて落としたるもの、水はこのすべての不幸より、困厄よりわれを守れ。

二　黒き鳥が、ニルリティ(「破滅の女神」)よ、汝の口をもって触れたるこのもの、アグニ・ガールハパティア(「家火」)はこの罪垢よりわれを解放せよ。

【適用】　Cf. **K** 46. 47-48, **C** p. 155.　黒い鳥が何ものかをその上に落としたとき、それを水で洗い落とす。黒い鳥に触れられたとき、施術者は燃えさしの薪を手にし、右側を向けて三回その人の周囲を廻る。

▽悪夢を払うための呪文(六・四六)

一　生けるもの[1]にもあらず、死したるものにもあらざる汝は、神々の不死の子なり。眠りよ、ヴァルナーニー(ヴァルナの神妃、ここでは「夜の女神」)は汝の母なり。ヤマ(「死神」)は汝の父なり。汝の名はアラル(悪魔)として知らる。

二　われらは汝の出生を知る、眠りよ。汝は神々の妹の子なり。ヤマの手先なり。汝は終熄者(antaka)なり。死なり。この汝を、眠りよ、われらはかく熟知す。かかる汝はわれらを悪夢(duṣvapnya)より守れ、眠りよ。

三　あたかも人が十六分の一(kalā)を、あたかも八分の一(śapha)を、あたかも〔全〕負債を弁済するごとく、われらはかくすべての悪夢を、われらを憎む者にもたらす。

(1) この讃歌の vv. 1, 2 は散文。

【適用】 Cf. **K** 46. 9-13. **C** p. 151. この讃歌は六・四五と併用されるが、後者は特に悪夢に関連がない。夢を見た人は顔を拭う。特に恐ろしい夢を見たときには、混合穀類で作った祭餅を献供する。或いはこれを他人(敵)の敷地内に置く。なお夢に関しては、**A** Ⅷ. 100, 101 参照。

▽悪運を払い幸運を招くための呪文（七・一一五）

一　ここより飛び去れ、凶兆よ(pāpi lakṣmi *voc.* 黒い鳥)、ここより消え失せよ。かしこに飛び去れ。われらを憎む者に対し、われらは鉄作りの(ayasmaya)鉤を汝に付く。

二　飛翔する邪しき前兆(lakṣmī)はわれに降りかかりぬ、蔓草の木に〔まつわるが〕ごとくに。われらよりよそに、黄金の手もつサヴィトリ神よ、そをここよりほかに置け、財宝をわれらに授けつつ。

三　百一の兆候は、人間の身体と共に、その生まるるや生じたり。そが中の最悪なるものを、われらはここより駆逐す。吉祥なるものを、ジャータヴェーダス(アグニの称呼)よ、われらのために確保せよ。

四　これら(兆候)をわれらは選別せり、荒野に散らばる牝牛のごとくに。吉祥なる兆候をして留まらしめよ。不吉なるものをわれらは消え失せしめたり。

【適用】 Cf. **K** 18. 16-18. **C** p. 44-45. 黒い鳥の左足に、施術者は鉄の鉤を結びつけ、これに祭餅を吊るし、この讃歌の *v.* 1 を唱えつつ、鳥を南西方に飛ばす。暗色の下衣、赤い上衣、白い頭布を身につけ、彼は *v.* 2 を唱えて頭布を、鉤をもって水辺に置き、左手をもって、面をそむけつつ、鉤ごと水中に投げ入れる。同様に *v.* 3 を唱えて赤い上衣を水中に投げ入れる。その後彼は新しい衣服とサンダルとを身につけ、振り返ることなく家に向かう。

第二部　思想的讃歌

リグ・ヴェーダ末期に発達した哲学思想の後を承け、ウパニシャッドの一元哲学に帰着する道程にあって、呪法と哲理との矛盾を感じず、高尚な哲学的概念や術語を呪法に応用して怪しまない**A**の思想的讃歌は、その数と主題の変化とにおいて**R**を凌ぎ、着想にも独創性なしとしない。例えば**R**の「プルシャの歌」(一〇・九〇、辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三一八―三一九頁参照)、「ヒラニア・ガルバの歌」(一〇・一二一、同書三一六―三一八頁参照)、「謎の歌」(一・一六四、同書二九九―三〇四頁参照)は、それぞれ**A**一九・六、四・二ならびに九・九および一〇・四に、**A**版をもっている。以下に抄訳した代表的讃歌のほか、「遍照者」(Virāj 八・九および一〇)、「蜜鞭」(Madhukaśā 九・一)、「梵行者」(Brahmacārin 一一・五)、「残饌」(Ucchiṣṭa 一一・七)、「牡牛」(Anaḍvan 四・一一、Ṛṣabha 九・四、Gavya 九・七)、「牝牛」(Vaśā 一〇・一〇)等の名を挙げることができる。名称には一見奇異なものが多いが、全体として帰一思想は躍進し、生理的・心理的観察は進歩している。

様々な名称で呼ばれつつも、最高者はしばしばウパニシャッドの根本原理ブラフマンに肉迫し或いはこれと一致させられ、かつ多くの場合その背後には、プラジャー・パティ（「造物主」）が潜んでいる。また暗々裡に太陽と関連することも看過できない。**A**の思想的讃歌には長篇のものが多く、その規模は華麗であるが、呪法との絆は断ち切られず、組織的に一貫した哲学には到達しなかった。しかしこれらの讃歌も、インド思想発達史上の重要な一環として見るとき、その価値を軽視することは許されない。

《備考》 **A**の思想的讃歌の重要性に関しては、cf. e.g. **BG** p. 86-91; F. Edgerton: The philosophic materials of the Atharva Veda, Studies in honor of M. Bloomfield, New Haven 1920, p. 117-135; The beginnings of Indian philosophy, London 1965, p. 17-27.

▽ヴェーナ（「見者」）の歌（二・一）

一 ヴェーナは見たり、隠微にかくれたる最高処を、そこに一切は一様の形態をもつところの（未分離の状態）。プリシュニ[1]はここに乳をいだせり。牝牛たち（vrāḥ 暁紅）は生まるるや、天界をかち得て歓呼せり。

二 願わくは、不死（amṛta 最高の秘密）を知るガンダルヴァ（ここでは秘密の宣示者）が宣言せんことを、隠微にかくれたる最高の発現（dhāman 状態）を。秘密の四分の三[2]は隠し置かれたり。そを知る者は父の父（最高者）たらん。

三 彼（ヴェーナ）はわれらの父なり、親なり、はたまた親縁[3]なり。彼は知る〔一切の〕居所を、一切万物を。彼こそ実に神々の唯一の命名者なれ。一切万物は問わんがために彼のもとに赴く。

四 われ（ヴェーナ自身）は天地をたちまち遍歴せり。われは天則（ṛta）の初生者に近づけり。話者における言語のごとく、万物の中に存し、熱意あり（dhāsyu ?）。彼は実にアグニ（祭祀の主宰者）にあらずや。

五 われは一切万物を遍歴せり、張られたる天則の糸（織物の比喩）を見んがために。そこにおいて神々は不死に到達し、共通の母胎に向かいて立ちあがりたり。

（1） 「斑点ある牝牛」、最高原理の一名、特に**A** Ⅷ. 9 (Virāj) 参照。

（2） 万有の四分の三は不可知の天的領域で、四分の一のみが人間の世界として顕現する。**R**以来の思想で、ウパニシャッドにも継承されている。

（3）天界と人間界とを連結する絆。

上記のヴェーナ（二・一）と密接な関係にあることは明瞭であるが、一層神秘的であり晦渋である。ただしブラフマン（中性）が呪文の意味でなく、根本原理の一名として現われている点（*v.* 1）は看過できない。ヴェーナ「見者」（男性、*v.* 1）、ヴァーチュ「言語」（女性、*v.* 2？）、ブラフマンの具現者ブリハス・パティ（「讃頌主」）＝ブラフマナス・パティ（「祈禱主」、cf. *v.* 5）およびカーヴィア「詩人」（*v.* 6）が、いずれも最高原理の様相を示しながら、その相互の関係は明確でない。ここでは男性・単数の主語は、ヴェーナを代表するものとして翻訳した。

▽ブラフマン（「梵」）の歌（四・一）

一　太初に東方に生じたるブラフマンを、ヴェーナは輝かしき辺際に顕わせり。彼はその深遠にして〔しかも〕近き様相を現わせり、有と無との[1]（sataś ca……asataś ca）の母胎（yoni）を。

二　この祖先伝来の支配者（rāṣṭrī *fem.*, おそらくヴァーチュ「言語」）、万物の中に存する者は先頭に立ちて進め、太初の世代に向かいて。われは彼にこの輝かしき太陽[2]を送れり。人々をしてガルマ[3]（gharma）を太初の熱意ある者（dhāsyu, cf. *supra* II. 1. 4）のために調理せしめよ。

三　生まれながらにして知る彼、この〔万有の〕親縁（cf. *supra* II. 1. 3）たる彼は、神々の一切の出生を語る。彼はブラフマンのただ中よりブラフマンを抽出せり。彼は低くまた高く、みずからの本性（svadhā）に向かいて立ちあがれり。

四　天則（ṛta）に住する彼は実に支えたり、彼の住居として偉大なる両界（rodasī）、すなわち天と地との〔両界を〕。みずから偉大なる彼は生まるるや、偉大なる〔両界〕、天空と地界とを、分離して支えたり。

五　彼は深遠の出生よりして頂上に到達せり。ブリハス・パティ、最高の支配者は彼の神格なり。清明なる日が光明より生じたるとき、その時霊感ある人々（vipra 詩人）は光彩を放って輝きわたれ。

六　カーヴィア[4]は正に、この偉大なる太初の発現（dhāman, cf. *supra* II. 1. 2）を推進す。彼はかくのごとく多くの者と共に生まれたり。〔しかして〕今彼は東の方に離れて（超越して）眠る。

七　いかなる者にもあれ、アタルヴァン（聖仙）、父にして神々の親縁ブリハス・パティに、頂礼

して近づかん者――かくして汝はすべての者の出産者、詩聖(kavi)、神、不可侵者、自律者(svadhāvat)たらんとす。

(1) 有と無との関係については、cf. **R** X. 72. 2, X. 129. 4, 辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三一五頁、三二二頁。

(2) hvāra「曲りて行く者」、したがって普通「蛇」と解されているが、ここでは不適当、おそらく鳥＝太陽？

(3) プラヴァルギア祭の供物として沸騰させた牛乳。そのために用いられる灼熱した釜は、太陽を象徴する。

(4) Kāvya「霊感ある者」、ここではkavi「詩人」に等しい。

▽プラーナ(「生気」)の歌(一一・四 抄訳)

プラーナは呼吸を意味する。小宇宙すなわち個体の生気・主体と考えられ、大宇宙の風・生気と照応して、万有の支持者とされるにいたり、ウパニシャッド哲学への一連鎖として重要な地位を占めている。

一 プラーナに頂礼あれ。万有はその支配下にあり。そは万有の主宰者となり、万有はその中に安立す。

二 プラーナ(1)よ、汝の咆吼に頂礼あれ。汝の雷鳴に頂礼あれ。プラーナよ、汝の電光に頂礼あれ。プラーナよ、雨降らす汝に頂礼あれ。

三 プラーナが雷鳴をもって植物に叫びかくるとき、これらは受胎し、懐妊す。しかしてまた多量に発生す。

四 季節の廻(めぐ)り来たりて、プラーナが草木に吼えかくるとき、地上にあるすべてのものは喜ぶ。

五 プラーナが雨を大地に降らしむるとき、家畜は喜ぶ、われらに豊饒あるべしと思いて。

六 雨を得て草木はプラーナに語れり、汝はわれらの寿命を全くしたり、汝はわれらすべてを香しくなせりと。

七 来たる汝に頂礼あれ。去る汝に頂礼あれ。立てる汝に頂礼あれ、プラーナよ。坐れる汝に頂礼あれ。

八 出息する汝に頂礼あれ。入息する汝に頂礼あれ。いで行く汝に頂礼あれ。帰り来たる汝に頂

礼あれ。この頂礼は汝の一切(すべての顕現)に捧げられてあれ。

九 プラーナよ、汝のいとしき形態、プラーナよ、汝のさらにいとしき形態、また汝のもつ薬餌(やくじ)(治癒力)、それをわれらに授けよ、われらの生きんがために。

一〇 プラーナは生類を蔽う、父が愛児を蔽うごとくに。プラーナは、息するもの・息せざるもの一切の主宰者なり。

一一 プラーナは死なり、熱病なり(恐ろしき半面)。神々はプラーナを崇う。プラーナが、真実を語る者を、最高の天界に置かんことを。

一二 プラーナはヴィラージュ(3)なり。プラーナはデーシュトリー(3)なり。一切のものはプラーナを崇う。プラーナは太陽なり、月なり、人はプラーナをプラジャー・パティ(「造物主」)と呼ぶ。

一八 汝につき、プラーナよ、このことを知る者、その中に汝が安立するところの者、かかる人にすべての者をして、かの最高の世界において貢(bali)をもたらしめよ。

一九 プラーナよ、これらすべての生類が、汝に貢をもたらすごとく、正にかく、かかる人に彼らをして貢をもたらしめよ、汝に耳傾くる人に、名声ある[プラーナ]よ。

二〇 彼(4)は胎児として諸神の中に徘徊す。過去の彼は顕現して再び出生す。過去の彼は未来にして当来の者なり。父たる彼はその力を伴って子の中に入れり。

二一 ハンサ(5)(haṁsa「鵞鳥」)は飛び立つとき、その一足を水中より抜かず。彼もしこれを抜かば、今日なく明日なからん。夜なく昼なからん。決して黎明(れいめい)あらざるべし。

二二 そは八輪・一輞(もう)を有し(太陽の象徴)、千音節を有して転現す、前方(東)に進み、後(しりえ)(西)に退きつつ。そは(6)半(なかば)もて万有を生めり。その他半の標識やいかに。

二三 一切の生類を含むこの世界、一切の動くものを支配し、他の者(敵)に速やかなる弓を引く(生命を奪う)汝に頂礼あれ、プラーナよ。

二四 一切の生類を含むこの世界、一切の動くものを支配し、倦(う)むことなく、呪力(brahman)により賢きプラーナは、われらに伴いてあれ。

二五 眠れる(7)者の中にありて、プラーナは端然と目覚め、決して伏し横たわることなし。眠れる者の中にありて、プラーナが眠りしをかつて聞きし者なし。

二六 プラーナよ、われを回避するなかれ。汝はわれより離るることなかるべし。「水の胎児(8)」(apāṁ garbhaḥ)のごとく、われは汝をわが中に拘束す、生きんがために、プラーナよ。

(1) プラーナに雨神パルジャニアの性格が与えられている。辻『リグ・ヴェーダ讃歌』四五頁参照。

(2)「遍照者」、最高原理の一名、A Ⅷ. 9, 10 参照。

(3)「指示者」、ここではヴィラージュと同様に、最高原理の名として用いられている。

(4) 父が子を親として再生するという、素朴な輪廻説の先駆として注目に値いする。後にも本格的輪廻説の傍らに存続した。

(5) 太陽の象徴。ここでは最高原理の一名。

(6) 大宇宙の本体としてのプラーナ。現象界を超越しつつこれを支持する。

(7) 個人の本体としてのプラーナ。

(8) **R** X. 121 におけるヒラニアガルバに相当。ここでは体内の活力を指す。**R** の「黄金の胎児」については、辻、前掲書、三一六頁参照。

▽ローヒタ(「紅光者・太陽」)の歌(一三・一　抄訳)

ローヒタの名のもとに最高原理としての太陽を讃美すると同時に、国王の威力を宣揚する。しかし種々な要素が雑然として混在し、一元思想から反転して呪法的性格を発揮し、敵対者の克服・呪詛にも及んでいる。

一　昇れ、牡馬[1]よ、水の中にある汝は。この賜物に富む王国に入れ。この万有を生みしローヒタが、よき支持ある汝(国王)を、主権のために支持せんことを。

二　水中にありし牡馬は昇りつ。汝より生まれたるこれらの部族の上に昇れ。ソーマ・水・草木・牛群を身に占めて、四足のもの(家畜)・二足のもの(人間)を、この(王国)に入らしめよ。

三　プリシュニ(cf. n. 1 *ad* **A** Ⅱ. 1)を母とする汝ら強大なるマルト神群は、インドラを伴侶とし敵を粉砕せよ。よき賜物をもつ汝らに、ローヒタをして耳傾かしめよ、数は三七(二十一神)、甘き飲物を好むマルト神群に。

四　ローヒタは高所に登れり。女神たち(暁紅)の胎児(ローヒタ)は登れり、出生の膝(母胎)に。彼女らに抱かれたる彼を、広大なる六界(天・空・地の倍数)は見いだせり。彼は前途を洞見しつつ、ここに主権をもたらしたり。

五　ローヒタは汝(国王)のため、ここに主権をもたらしたり。敵を潰走せしめたり。安全はなが有に帰したり。かかる汝に天地はここに、富裕なる女神たち(暁紅)ともども、意のままに賜物を授けたり、シャクヴァリー調(韻律の名)に合わせて。

六　ローヒタは天地を生めり。そこにパラメーシュティン(「最勝者」=プラジャー・パティ「造

物主」)は〔祭祀の〕糸を張りたり。そこに一足の山羊(aja ekapādaḥ 太陽)は依り立てり。彼は力もて天地を固めたり。

七　彼は天地を固めたり。彼により天は、彼により蒼穹は、彼により空界は確立せられたり。空間は測られたり。彼により神々は不死(amṛta)を発見せり。

八　ローヒタはすべての形態(宇宙)を吟味せり、斜面と高所とを総括しつつ。彼が大いなる威力によりて天に登り、乳もて、グリタもて汝の主権を塗り清めんことを。

二一　斑の牝馬(暁紅)が先馬となりて、車に乗れる汝を運ぶとき、ローヒタよ、汝は水を流れしめつつ、華麗に進む。

二二　ローヒタに従順なるローヒニー[3]は、寛裕にして色うるわしく、高らかにして光彩に富む。彼女によりわれらが、あらゆる形の財宝をかち得んことを。彼女によりあらゆる敵意を克服せんことを。

二三　ここにローヒタの座あり、ローヒニーあり。かしこに斑の牝馬の行く道あり。ガンダルヴァ(半神族)とカシアパの族(聖仙)とが、これ(おそらく牝馬)を導き、詩聖らは弛むことなくこれを守る。

二四　鹿毛なる太陽の馬は、光輝に満ち不死にして、常に軽やかなる車を牽く。グリタを飲む神ローヒタは、輝きつつ、斑なす天空に入れり。

二五　牡牛なして多くの角(光線)もつローヒタは、アグニとスーリア(「太陽神」)とを凌げり。彼は地界と天界とを分け支う。彼よりして(彼を本源の力として)神々はその創造を行なう。

二六　ローヒタは大海より天に昇れり。ローヒタはすべての山に登れり。

二七　乳に富み・グリタに富むもの(大地)を測り拡げよ。そは神々の乳牛にして蹴ることなし[3]。インドラはソーマを飲め。平和あらしめよ。アグニは讃歌を唱えよ。敵意ある者を駆逐せよ。

三一　汝スーリア神は昇りつつ、わが敵対者を打ち倒せ。石もて彼らを打ち倒せ。彼らをして最下の暗黒に赴かしめよ。

三三　ヴィラージュ(cf. n. 2 *ad* **A** XI. 4)の仔牛、思想(霊感)の牡牛(ローヒタ)は、背を輝かして空界に登れり。人々はグリタを伴う讃歌を仔牛に向かいて歌う。ブラフマン(最高原理)たる彼を、呪文(brahman)もて増強す。

三四　天に昇れ、また地に登れ。主権に登れ、また富力に登れ。後裔に登れ、また不死に登れ。汝(国王)の身体をローヒタと結合せよ。

三五　主[4]権をもつ神々は、太陽を周りて行く。彼らと共々にローヒタは、好意をもちて汝(国王)に主権を授けんことを。

三六　讃歌によりて清められたる祭祀は、汝(ローヒタ)を上方に運ぶ。道を進む鹿毛の駒は汝を運ぶ。汝は海のかなたに水波を超えて輝く。

三七　天地はローヒタの上に安立す、財宝の獲得者・牝牛の獲得者・戦利品の獲得者の上に。彼の出生は千余り七つなり。われ願わくは、汝の出生〔の秘密〕を、広大なる世界あまねく宣り得んことを。

五六　牝牛を足もて蹴る者、また太陽に向かいて尿する者、われはかかる汝の根元を切断す。以後汝は影を投ずることなかるべし(死ぬこと)。

五七　われと祭火との間を、影を投じつつ過ぎ行く者、われはかかる汝の根元を切断す。以後汝は影を投ずることなかるべし。

五八　スーリア神よ、汝とわれとの間を、今日過る者、われはかかる者に、悪夢、汚点、不幸を拭いやる。

(1) vājin「戦利品に富む者」、ここでは太陽を競馬の勝者と見なしている。同様に v. 2 の vāja「戦

利の賞」も、牡馬＝太陽を指す。

(2) ローヒタの愛人、おそらく曙。

(3) 搾乳を拒むことをしない。

(4) 領主たちと君主との関係を指す。

▽カーマ(「意欲」)の歌(九・二　抄訳)

ここでカーマは「愛欲」を意味せず、「最初に意欲はかの唯一物に現ぜり。こは意(思考力)の第一の種子なりき」(**R** X. 129. 4, 辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三二三頁参照)といわれている「意欲」である。カーマは牡牛と呼ばれ(cf. **A** IX. 4)、最高原理の一顕現として、信奉者を庇護し、敵対者を駆逐する。万有の上に置かれつつも、神々の中では特にアグニに近い威力を備えている。

一　敵対者を絶滅する牡牛(ṛṣabha)カーマに、われはグリタ・供物・アージアもて奉仕せんと欲す。讃えられて汝は、わが敵対者を投擲せよ、大いなる雄力もて。

四　逐え、カーマよ、駆逐せよ、カーマよ。わが敵対者をして災厄に陥らしめよ。これら最下の暗黒に逐われたる者どもの住居を、アグニよ、汝は焼き尽くせ。

五　乳牛(dhenu)は、カーマよ、汝の娘と称せらる。そを賢者(kavi)はヴァーチュ[1]と呼び、ヴィラージュと呼ぶ。これによりわが敵対者を回避せよ。〔これに反し〕呼吸・牛群・生命をして彼らを回避せしめよ。

六　カーマの、インドラの、王者ヴァルナの、ヴィシュヌ(神名)の力により、サヴィトリ(神名)の激励により、アグニの祭祀力(hotra)により、敵対者を駆逐せよ、熟練せる舵子が舟を水上にやるがごとくに。

七　わが逞しく強力なる監視者カーマは、わがために敵対者なき〔安全〕のみを作れ。すべての神々はわが庇護所たれ。なべての神々はわがこの呼声に向かいて来たれ。

八　このアージアをグリタともども嘉みしつつ、彼らはカーマを最勝者(jyeṣṭha)として、ここに愉悦せんことを、われらのために敵対者なき〔安全〕のみを作りつつ。

一六　カーマよ、三重に保護せられたるなが掩蔽、充足せる呪文(brahman)、〔なが上に〕張られ傷つけ難くなされたる鎧、これによりわが敵対者を回避せよ。〔これに反し〕呼吸・牛群・生命をして彼らを回避せしめよ(cf. *supra v.* 5)。

一七　それにより神々がアスラ(魔族)どもを駆逐せるところのもの、それによりインドラがダスユ(悪魔視された先住民)どもを最下の暗黒に導きたるところのもの、それにより、カーマよ、わが敵対者をこの世界より駆逐せよ。

一八　神々がアスラどもを駆逐したるごとく、インドラがダスユどもを最下の暗黒に圧迫したるごとく、かく汝は、カーマよ、わが敵対者をこの世界より駆逐せよ。

一九　カーマは最初に生まれたり。神々は彼に達せざりき、父祖たちも、また人間も。これらより汝は常に偉大にして勝れたり。

二〇　いかほど広く天地が〔拡がるとも〕、いかほど水が流るるとも、いかほど火が〔燃ゆるとも〕、これらより汝は常に偉大にして勝れたり。

二一　いかほど方位が、中間の方角が拡がるとも、いかほど天界の仰視者たる空間が〔伸ぶるとも〕、これらより汝は常に偉大にして勝れたり。

二二　いかほど蜂が、蝙蝠が、クルール(kurūru 虫の一種?)が〔あらんとも〕、いかばかりヴァガー(vaghā 同上?)が、木に這い登る虫(vṛkṣasarpya ?)があらんとも、これらより汝は常に偉

大にして勝れたり。

二三　汝は瞬くもの（生物）より勝れたり、静止せるもの（無生物）よりも。汝は海より勝れたり、カーマよ、激情[2]（manyu）よ。これらより汝は常に偉大にして勝れたり。

二四　風すらもカーマに達せず、火も、太陽もはたまた月も。これらより汝は常に偉大にして勝れたり。

二五　吉祥にして幸運に富む汝の形態、カーマよ、それにより汝の選ぶところの実現する〔形態〕、それにより汝はわれらに入れ。禍々しき思想は他の所に送りやれ。

（1）　ヴィラージュ（cf. n. 2 *ad* **A** XI. 4）と同じく、ヴァーチュ「言語」も最高原理の一顕現と見なされる、cf. **R** X. 125, 辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三〇七頁。

（2）　ここでカーマはマニウ「激情」と呼ばれている、cf. **R** X. 84, 辻、前掲書、三四三頁。

▽カーラ（「時」）の歌　その一（一九・五三）

カーラを最高原理の地位に高め、造物主プラジャーパティの父と呼び（cf. *vv.* 8, 10）、ブラフマン（cf. *supra* **A** IV. 1）と同一視し（cf. *v.* 9）、太陽との同化が明瞭に看取される。

一　カーラは七条[1]の手綱もつ馬として、〔車を〕牽く。千の眼を有し、老ゆることなく、種子に富む。霊感ある詩聖らは彼に乗る。彼の車輪は万有（一切の世界・生類）なり。

二　このカーラは七個の車輪を牽く。彼の車轂は七個にして、彼の車軸は不死なり。この万有を出現せしめつつ、カーラは最高神として進み行く。

三　充満せる瓶（豊満の象徴）は、カーラの上に置かれたり。われらは彼が多くの所に遍在するを見る。彼はこの万有に面す。人は言う、このカーラは最高の天界にありと。

四　彼は実に万有を成立せしめたり。彼は実に万有を包囲せり。彼はその父[2]にして、その子となれり。これに勝る威力は他にあることなし。

五　カーラはかの天を生めり。またカーラはこれらの地界を生めり。既存のもの・未存のものは、カーラに促されて展開す。

六　カーラは地を創れり。カーラの中に太陽は輝く。カーラの中に万有は存在す。カーラの中に目は見はらかす。

七　カーラの中に意（思考力）あり。カーラの中に生気あり。カーラの中に名称は含まれたり。カ

ーラの到着するや、この一切の生類は歓喜す。

八 カーラの中に熱力[3](tapas 創造力)あり。カーラの中に最高物あり。カーラの中にブラフマンは含まれたり。カーラは万有の主なり、プラジャー・パティの父なりし彼は。

九 彼により促され、彼により産出せられて、この万有は彼の中に安立す。カーラはブラフマンとなりて、パラメーシュティン(「最勝者」＝プラジャー・パティ)を支う。

一〇 カーラは生類を創れり、カーラは太初にプラジャー・パティを。自生(じしょう)のカシアパ(創造力をもつ聖仙)はカーラより生じたり。熱力(cf. *supra v.* 8)はカーラより生じたり。

(1) 以下数字七を多用している、'Zahlenmystik' 太陽の七光線、七頭の馬参照。またおそらく二カ月ずつの六季節と閏年の第十三月(*e.g.* cf. **R** I. 64. 15)との合計を指す？

(2) 神秘的循環発生、辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三一四頁参照。

(3) 辻、前掲書、三〇九頁参照。

▽カーラ(「時」)の歌　その二(一九・五四)

一般に上記一九・五三と重複している。

一 カーラより水は生じたり。カーラよりブラフマン(cf. **A** XIX. 53. 9)は生じたり、熱力も(cf. *ibid.* 8)、方位も。カーラによりて太陽は昇り、カーラの中に再び沈む。

二 カーラによりて風は吹き清め、カーラによりて大いなる地は存し、大いなる天はカーラの中に置かれたり。

三 子たるカーラは(cf. *ibid.* 4)太初において、実に既存のもの・未存のものを生じたり(cf. *ibid.* 5)。カーラより詩節(ṛc)は生じたり。カーラより祭詞(yajus)は生まれたり。

四 カーラは祭祀を生起せしめたり。神々のため不滅の分前として。カーラの中にガンダルヴァ(半神族)とアプサラス(その配偶、精女)とは存す。カーラの中にもろもろの世界は安置せられたり。

五 神聖[1]なるアンギラス[2]とアタルヴァンとはカーラを支配す。この世界と最高の世界とを、清浄なる世界と清浄なる区分(vidhṛti)とを、

六 一切の世界をブラフマン(cf. *v.* 1)により克服して、カーラは実に最高神として進み行く(cf. *ibid.* 2)。

(1) divo を devo と改めた。
(2) 両聖仙の名の並び挙げられている点に関しては、Aの最古の名称 Atharvāṅgirasaḥ 参照。

▽人体の構造を讃うる歌（一〇・二 抄訳）

まず人間(puruṣa)の肉体的諸部分の列挙に始まる。しかしこの「人間」は宇宙的意義を有し、R一〇・九〇におけるプルシャ(Puruṣa「原人」、辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三一八―三二一頁参照)に近い地位に高められ、ブラフマンと一致される。ブラフマンは最高原理として一切の上に置かれ、人体はブラフマンの砦(pur)と呼ばれ、その中にアートマン(ātman「我」、個人の本体)が存在する。最後にブラフマンもアートマンと一致されて、この砦の中に入る。

なおA一一・八は本讃歌と密接な関係にある。肉体的部分、生理的作用、精神的機能、抽象的概念の列挙は、一層複雑となり、一層神秘性を増す。しかしこれらの諸要素は、神・神格(deva, devatā)と呼ばれてプルシャの中に入る。「それゆえ実にプルシャ(アートマン)を知る者は考う、そはブラフマンなりと。何となれば、その中に一切の神格は安住す

ればなり、牝牛の牛舎の中にあるごとくにと」(*v.* 32, cf. *infra v.* 32)。ここにウパニシャッドの梵我一如説の暁鐘が聞こえている。

一 誰により人間の両踵はもたらされたりや。誰により筋肉は結合せられたりや。誰により両踝は、誰により麗しき指は、誰により孔穴は、誰により中央に両ウッチュラカ(uchlaka ?)は。誰が依止所(両足)を〔作りたりや〕。

二 さて何より人間の下方なる両踝は作られたりや、上方なる両膝蓋骨は。そもいずこより取りいだして両脚は安立せられたりや、両膝の関節は。誰か実にこれを理解する者ぞ。

三 両膝の上に柔軟なる胴体は置かれたり、その末端は集まりて四〔肢〕をなすところの。臀部、両腿、誰がこれを生みたりや、それにより胴体が鞏固となれるところの。

四 幾何の、いかなる神々なりし、人間の胸、頸を寄せ集めたるは。幾何の神々が両乳を配置したりや。誰が〔両〕咽喉(kaphoḍau ?)を、誰が肩を、誰が肋骨を寄せ集めたりや。

五 誰が彼の両腕を結合したりや、彼は勇敢なる行為をなすべしと〔考えて〕。彼の両肩を、胴体の上に安置したる神は誰なりし。

六　誰が七個の孔穴を頭に穿ちたりや、すなわち両耳・両鼻孔・両眼・口を、その勝利の力において、四足のもの（家畜）、二足のもの（人間）が、多くの所に道を進み行くところの。

七　彼（神）は実に両顎の中に、豊饒なる舌を置けり。次いでそれに偉大なる言語を付置したり。彼はもろもろの世界の中に、水を纏いて転現す。誰か実にこれを理解する者ぞ。

八　脳を、額を、項を、頭蓋骨を最初に〔作り〕、人間の両顎のため集むべきものを集めて天に昇りたる神、彼はいかなる神なりし。

二〇　何により彼は聖智者[1]（śrotriya）に達するや、何によりこのパラメーシュティン（「最勝者」＝プラジャー・パティ「造物主」）に、何によりプールシャ[2]（プルシャ）はこのアグニ（祭火）に。何により年（時の象徴）を測量したりや。

二一　ブラフマンは聖智者に達す、ブラフマンはこのパラメーシュティンに、ブラフマンすなわちプールシャはこのアグニに。ブラフマンは年を測量したり。

二二　何により彼は神々の上に住するや、何により神々に属する種族の上に、何によりこの他の非[3]王権（nakṣatra）の上に。何により〔ブラフマンは〕真正の王権（kṣatra）と称せらるるや。

二三　ブラフマンは神々の上に住す、ブラフマンは神々に属する種族の上に、ブラフマンはこの他

の王権の上に。ブラフマンは真正の王権と称せらる。

二四　誰によりこの大地は配置せられたりや。誰により天は高らかに置かれたりや。誰によりこの空界は拡がりて高くかつ横しまに置かれたりや。

二五　ブラフマンによりこの大地は配置せられたり。ブラフマンは高らかに置かれたる天なり。ブラフマンは拡がりて高くかつ横しまに置かれたる空界なり。

二九　実に不死（amṛta）に蔽われたるブラフマンの砦（pur 人体）を知る者、彼にブラフマンとブラフマンの配下（brāhma）とは、目・生気・後裔を与えたり。

三〇　実に目は彼を見棄てず、老齢の来たる前に生気は〔見棄てず〕、ブラフマンの砦を知る者を、それよりしてプルシャ[4]がその名を得たるところの。

三一　八輪（人体の八肢分）を有し、九門（人体の九穴）を有する、神々の冒しがたき砦、その中に黄金の容器（kośa 心臓）あり、天的にして光明に蔽われたるところの。

三二　三輻を有し、三支点を有するこの黄金の容器、その中にアートマン（「我」）よりなる不可思議物（yakṣa）存す。ブラフマンを知る者は実にこれを知る。

三三　ブラフマンはこの黄金の砦に入れり、輝きわたり、黄金色映え、栄光もて蔽われつくし、決

して敗るることなき[この砦に]。

(1) 天啓に通暁する祭式の権威。

(2) ここでプールシャは単なる人間ではなく、ブラフマンとの一致が予想されている。

(3) 真正でない王権、クシャトリヤ階級以外の庶民に対する支配権。

(4) puruṣa を pur によって説明せんとする 'Volksetymologie'.

▽スカンバ(「支柱」)の歌　その一(一〇・七　抄訳)

両スカンバ讃歌は、**A**の思想的讃歌中、随一の雄篇で、宇宙の大支柱たるスカンバの名のもとに、当時問題とされた諸原理を統合しようと企てたかのごとく思われる。ここに最高原理は一切を包容し、一切に遍在すると同時に一切を超越し、かつ他面においては創造神としての風格を具えている。種々な思想の並存によって、徹底・統一を欠く憾みはあるが、ウパニシャッドを彷彿させる文句をも含んでいる。

七　その上にプラジャー・パティ(「造物主」)が、一切の世界を支えて固定したるそのスカンバを

説け。そはそもいかなるものなりや。

八　プラジャー・パティが、最高・最低・中間として創造し、一切の形態を備うるものとして創造したる中に、[1]スカンバは幾何(いくばく)の部分をもって進入せりや。また進入せざりし部分は幾何なりしや。

九　[1]スカンバは幾何の部分をもって、既存の中に進入せりや。その幾何が未存のために伏在するか。その一支分を千分したるとき、スカンバはその幾何の部分をもって、その中(現象界)に進入せりや。

一〇　その中に人がもろもろの世界と、宝蔵と、水(太初の原水)と、ブラフマン(最高原理)とを知り、その中に[2]無と有とを含むそのスカンバを説け。そはそもいかなるものなりや。

一七　人間の中に在るブラフマンを知る者は、パラメーシュティン(「最勝者」)を知る。パラメーシュティンを知る者ならびにプラジャー・パティを知る者、最も善きブラフマンの具現者を知る者、彼らは同時にスカンバを知る。

一八　その頭は[アグニ・]ヴァイシュヴァーナラ(「普遍火」)、太陽の熱)にして、アンギラス族(聖仙)がその目となりたるもの、呪力(yātu)がその四肢なるそのスカンバを説け。そはそもいか

なるものなりや。

一九　その口はブラフマン、その舌は「蜜の鞭」(madhukaśā, cf. **A** IX. 1)なりと人は言い、その乳房はヴィラージュ(「遍照者」)なりと人は言うそのスカンバを説け。そはそもいかなるものなりや。

二〇　それ[3]より讃歌が作りいだされ、祭詞が削りいだされ、歌詠はその毛髪にして、呪文(atharvāṅgirasaḥ)はその口なるスカンバを説け。そはそもいかなるものなりや。

二一　聳えたつ非実在の枝(現象界)を、人々(俗人)は最高物なるかのごとくに認む。汝の〔この〕枝を崇拝する低級なる人々は、そを〔真の〕実在と考う。

二二　そこにアーディティア神群・ルドラ神群・ヴァス神群が相集まり、過去と未来と、すべての世界の安立するそのスカンバを説け。そはそもいかなるものなりや。

二三　その伏蔵[4]を常に三十三天(全神格)は守る。神々よ、汝らが守護するその伏蔵を、今日知る者は誰ぞ。

二四　その中に、ブラフマンを知る神々は、最高のブラフマンを崇拝す。それらの神々を如実に知らん者は、ブラフマンの具現者、〔真の〕知者となり得べし。

二五　非実在(現象界)より生じたる神々は、崇高なりと称せらる(俗見)。スカンバの一支分に過ぎざる非実在を、人々(俗人)は超越的なりと呼ぶ。

三二　地はその尺度(pramā)にして、空界はその腹部、天をその頭となせるこの最高のブラフマンに頂礼あれ。

三三　太陽と常に形を新たにする月とはその眼にして、火をその口となせるこの最高のブラフマンに頂礼あれ。

三四　風はその出息・入息にして、アンギラス族はその眼となり、方位をその意識となせるこの最高のブラフマンに頂礼あれ。

三五　スカンバはこの天地両界を支う。スカンバは広き空界を支う。スカンバは広き六方位(四方と上下)を支う。スカンバはこの万有に入れり。

三六　疲労[5](śrama)と熱力(tapas)とより生じ、すべての世界に滲透し、ソーマをその独占物としたるこの最高のブラフマンに頂礼あれ。

三七　いかなれば風は静止せず、意(思考力)は休むことなきか。何故に水は真理を求めつつ(法則通りに流れること)、かつて静止することなきか。

三八　偉大なる神的顕現(yakṣa)は、万有の中央にありて、熱力(創造の原動力)を発し、水波(太初の原水)の背に乗れり(万有の展開)。ありとあらゆる神々は、その中に依止す、あたかも枝梢が幹を取りまきて相寄るがごとくに。

（1）　最高原理と現象界との関係、最高原理の超越性と遍在性、cf. **R** X. 90. 3-4. 辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三一九頁。

（2）　無と有、cf. n. 1 *ad* **A** Ⅳ. 1.

（3）　四ヴェーダの創出、cf. **R** X. 90. 8, 辻、前掲書、三二〇頁。

（4）　秘宝すなわち個人の本体アートマン。

（5）　プラーフマナ書の創造神話において、プラジャーパティは熱力を発し、創造後に疲労する。辻『古代インドの説話』(春秋社、一九七八年)九八―一〇一頁参照。

▽スカンバ(「支柱」)の歌　その二(一〇・八　抄訳)

一　過去および未来、万有を主宰し、天をその独占物とするこの最上のブラフマンに頂礼あれ。

二　スカンバに支持せられて、この天地両界は安立す。この一切の生命あるもの、呼吸し・瞬きするものは、スカンバの中に〔存在す〕。

一一　動くもの、飛ぶもの、立つもの、呼吸するもの、呼吸せざるもの、また瞬きするもの、それは一切の形態を備えて地を支う。それは相合してただ一物たるのみ。

一二　無限にして多くの所に拡がるもの(天)と、無限にしてかつ有限なるもの(地)とは相接す。この両者を天空の守護者(太陽)は、分離しつつ進む、万有の過去と未来とを知りて。

一三　プラジャー・パティ(「造物主」)は胎内に動く。彼は目に見えざれども(本体)、多様に出生せり。彼は(1)その一半をもって万有を生ぜり。他の一半(本体)の標識やいかに。

二五　唯一物(最高原理)は毛よりも細く、唯一物は目に見えざるがごとし。しかもわが愛するこの神格は、万有(2)よりも広闊なり。

二六　この美しくして不老・不死なる〔神格〕(個人の本体アートマン)は、人間の家(肉体)に住む。そのためにこの〔神格が〕創られたる者(人間)は、〔すでに死し〕横たわる。そを創りし者(創造神)はすでに老いたり。

二七　汝は(3)女なり。汝は男なり。汝は少年なり。または少女なり。汝は老いたるとき、杖に倚りてよろめく。生まるるや汝は一切の方位に面す。

二八　彼[4](アートマン)は人々の父なると同時に、また彼らの息子なり。そは彼らの最年長者たると同時に最年少者なり。唯一の神(アートマン)は、意の中に入れり(意識・思考の発生)。そは最初に生まれたるものにして、しかもなお胎内にあり(太初以来の絶対的存在)。

二九　彼[5]は豊満(pūrṇa)より豊満(無尽蔵の完全性)を汲む。豊満は豊満をもって普及す。われらは今日これを知らんと欲す、いずこより万有が展開せるかということを。

三二　彼は近きにありながら、人これを知らず。彼は近きにありながら、人これを見ず。見よ、神のこの賢慮を。彼は死することなく、老ゆることなし。

三三　未曾有(みぞう)のものに促されて言語は、それぞれ適当に語る。語りつつ言語が帰りゆくところ、そを人は偉大なるブラフマンの威力と呼ぶ(言語の本源)。

三四　そこに神々および人間が、車の輻(や)の轂(こしき)におけるがごとく、依止するところ、そこに幻力(māyā 不可思議力)により、「水中の花」(apāṁ puṣpam 創造神の一名)の置かれたるところ(創造の本源)、そをわれ汝に問う。

四三　九門(人体の孔穴)を有せる蓮華(心臓)は、三性[6](guṇa)に蔽われたり。その中にある神的顕現(yakṣma アートマン)は、ブラフマンを知る者ぞ知れ。

四四　欲望なく、賢明にして不死、みずから生じ、活力に満ち、欠陥なきもの、すなわち、賢明にして老いざる常若(とこわか)のアートマンを知る者は、死を恐れず。

(1)　Cf. n. 1 *ad* **A** X. 7.

(2)　微よりも微、大よりも大(coincidentia oppositorum)という表現は、ウパニシャッドにも見られる。

(3)　アートマンはあらゆる人間の中に、その本体として存在する。

(4)　Cf. n. 2 *ad* **A** XII. 53.

(5)　アートマンの完全・遍在性は、その本源たる最高原理ブラフマンと本質を同じくすることに由来する。

(6)　おそらく肉体・物器界を構成する三要素。後世の哲学における三種のグナ、善性・動性・暗性の前駆か？

▽ブーミ(「大地」)の歌（一二・一　抄訳）

自然界の観察を主体とする本篇は、厳密な意味における思想的讃歌とはいえないが、一切を包蔵し忍持する大地を讃えた美しい詩節に富み、**A**中白眉の一佳什と目される。

一　高大なる真実(satya)、強力なる天則(ṛta)、潔斎(dīkṣā)、熱力(tapas)、呪文(brahman)、祭祀(yajña)は大地を支う。過去のもの、未来のものの支配者(patnī)、この大地はわれらのために広闊なる世界を作らんことを。

二　人間の中より圧迫を蒙ることなく、高所・斜面・多くの平地を有し、様々の効力ある植物を担う大地は、われらのために拡がらんことを。

三　そが上に海・川・水が存し、そが上に食物・耕作者が生起したる、そが上にこの呼吸するもの、運動するものの生存するこの大地は、われらに優先して飲む権利を授けんことを。

四　四方を所有する大地、そが上に食物・耕作者が生起したる、呼吸するもの、運動するものを、様々に担う大地は、われらに牛群はたまた他のものを授けんことを。

五　そが上にかつて太古の人々の拡がれる、そが上に神々がアスラ(魔類)どもを征服したるところ、牛・馬・鳥の群れいるところ、大地はわれらに幸運と栄光とを授けんことを。

六　一切を載せ、宝を容れたる依止所、黄金の胸もつ生類の宿、アグニ・ヴァイシュヴァーナラ(「普遍火」)を支え、インドラを牡牛(配偶)となす大地(bhūmi *fem.* すなわち牝牛)は、われらを富ましめんことを。

七　神々が常に、眠らず、弛まず守る広き大地は、われらにいとしき蜜(特に詩的才能)を滴らし、しかして〔われらを〕栄光もて霑さんことを。

八　太初に大海(太初の原水)の上の一波濤たりしもの、そを聖賢らが幻力(māyā 詩的神秘力)もて探し求めたるもの、その心は真実に包まれ、最高の天界において不死なる大地は、われらに光輝と力とを授けんことを、最も勝れたる支配のために。

九　その上に水が、昼も夜も常に等しく、流るる大地は、多くの流れに満ちて、われらに乳を滴らし、しかして〔われらを〕栄光もて霑さんことを。

一一　汝の山々、雪を戴く山脈、汝の森は、大地よ、〔われらに〕快適なれ。褐に黒に赤に、あらゆる色もて堅固なる、広き大地の上に、われは立てり、冒さるることなく、敗るることなく、傷つけらるることなくして。

一五　人間は汝より生まれて、汝の上を歩む。汝は二足のもの(人間)・四足のもの(家畜)を担う。これら人間の五種族(全人類)は汝に属す。その人間の上に、太陽は昇りて、光線もて不滅の光明を拡ぐ。

一六　これら生類は、おしなべて、われらに言葉の蜜（詩的弁才）を滴らさんことを。大地よ、そをわれらに授けよ。

一七　あまねく草木を生む母、掟もて支えられ、固く広く、吉祥にして快適なる大地に沿い、われら願わくは永久に歩まんことを。

一八　広大なる汝は広大なる住居となりぬ。汝の衝撃・動揺・震動（地震）は偉大なり。偉大なるインドラは弛みなく汝を守る。

二二　大地の上に、人は神々に祭祀を行ない、よく調理せられたる供物を捧ぐ。大地の上に、いずれ死ぬべき人間は、おのがじし、食物によりて生く。この大地はわれらに生気と寿命とを授けよ。大地はわれをして長命を得しめよ。

二三　汝より発する香り、大地よ、草木の帯ぶる香り、水の帯ぶる香り、ガンダルヴァ（半神族）らならびにアプサラス（精女）らの分かちもつ香り、それによりわれをして香しき者たらしめよ。何人もわれらに敵意を抱かざらんことを。

二四　蓮華の中に入りたる汝の香り、太古に神々がスーリアー(1)（太陽神の娘）の婚姻（月神ソーマとの結婚）に際してもたらしたる香り、それによりわれをして香しき者たらしめよ。何人もわれ

らに敵意を抱かざらんことを。

二五　女にあれ男にあれ人間の中に、幸運・魅力として存する汝の香り、馬・勇士の中にある香り、野獣・象の中にある香り、乙女の中にある光彩、大地よ、そをわれに帯ばしめよ。何人もわれらに敵意を抱かざらんことを。

二六　この大地は岩・石・塵にして、安固・堅牢なり。黄金の胸もつこの大地に、われは頂礼を捧げたり。

二七　そが上に樹木・森の木の永久に堅く立つ大地、一切を育み堅牢なる大地に、われらは祈願す。

二八　立ちあがりまた坐し、立ち、歩みつつわれらは右足もて、左足もて、大地の上に躓くことなかれ。

二九　清むる大地にわれは告ぐ、呪文（brahman）により増大したる、忍耐強き大地に。滋養と繁栄とを、食物の分け前とグリタとを担う汝の上に、われら願わくは居住せんことを。

四一　そが上に人間が騒がしく歌い踊り、そが上に戦い、そが上に戦鼓の高く鳴り響く大地、この大地はわれらのために敵対者を撃退せよ。大地はわれをして敵対者なき者たらしめよ。

四二　そが上に米・麦・食物の存し、そが上にこれら五種族の存する大地、パルジャニア（「雨神」）

を配偶とし、雨に肥えまさる大地に頂礼あれ。

四三　そが上に神の作れる都城の存し、その領土に〔人々の〕拡がる大地、プラジャー・パティ（「造物主」）は、一切を包蔵するこの大地を、いかなる方面においても、われらのために快適ならしめよ。

四四　宝を豊かに秘め持つ大地は、財貨・宝珠・黄金をわれに与えよ。財を恵む女神（大地）は、好意に満ちて施しつつ、その財富をわれに授けよ。

四五　住居に従いて言語を異にし、風習を別にする多様の民を担う大地は、千条の富の流れをわれに滴らさんことを、動かず立ちて蹴ることなき乳牛のごとくに。

四六　冬に閉じこめられて、動かず隠れ横たわる汝の蛇、螫すこと激しき蠍、虫類が、大地よ、――雨期来たれば活気を得て蠢くすべてのものが――這いてわれらに這い寄らざらんことを。吉祥なるものもてわれらに情深かれ。

四七　数多き汝の道、人間の通う道、馬車・荷車の進む道、それを通りて、善き人も悪しき人も同じく行く道、――われら願わくは、敵なく盗賊なき道をかち得んことを。吉祥なるものもてわれらに情深かれ。

四八　愚人を担い、重きを担い、善人・悪人の居住を忍ぶ大地は、猪に協和して野豚に身を開く（何ものをも拒否しない）。

四九　森に住む汝の獣、林に置かれし野獣の群、獅子・虎、人を食らいて徘徊するもの、ウラ（ula 豺？）・狼・禍を、ここより、大地よ、羅刹女と羅刹（魔類）とを、われらより追い払え。

五〇　かつて、女神よ、汝が前方（東方）に拡がりつつ、神々に命ぜられて、偉大（mahitva）に進み寄りたるとき、そのとき繁栄は汝に入れり。汝は四方を形成したり。

五一　大地の上に存する村落・森林・集会・群衆・公会、これらにおいて、われら願わくは、汝に快きことを語り得んことを。

五二　馬が砂塵を〔振い散らすが〕ごとく、彼女（大地）は、生まれて以来大地に住したる種族を分散したり、優美にして先頭に進む世界の守護者、樹木・植物の把握者は。

五三　わが語るところ、そをわれ蜜をこめて語る。わが見るところ、そを人々はわれより望む（?）。われは光彩に富み、速力に富む。われは他の敵対者を打ち倒す。

五四　平和にして香しく、快適にしてその乳房は甘露に満ち、乳あふるる広き大地は、乳もろともわがために語れ。

六〇　汝が混沌たる海中に没入したるとき、ヴィシュヴァ・カルマン（「創造神」）は、供物を捧げて探し求めたり。ひそかに隠されたる享楽の杯（大地）は、〔大地を〕母としてもつ者どものため、姿を現わしたり、享受のために。

六一　汝は人間の分散者アディティ（「無垢の女神」、神々の母）にして、あらゆる願望を満たし、遠く拡がる。汝に欠けたるところ、そを天則の初生児プラジャー・パティは汝のために満たす。

六二　汝の懐は、病患なく労症なく、われらのために設えられてあれ、大地よ。われら願わくは、〔朝な朝な〕長命のために目覚めつつ、貢物をもたらす者たらんことを。

六三　母なる大地よ、幸福もてわれを安定せる者たらしめよ。天と共々に、弁才ある女神よ、われに吉祥と繁栄とを恵み給わんことを。

（1）　Cf. **R** X. 85, **A** XIV, 辻『リグ・ヴェーダ讃歌』二三九―二四〇頁。

▽ヴラーティアの讃美（一五　抄訳）

Aの思想的讃歌に見える最高原理の中には、奇矯な名称が少なくない。ヴラーティアもその一例で、**A**一五全体はその讃美に当てられている。ヴラーティアはアリアン人でありな

がら、正統バラモン教の圏外にあった特殊の集団であったらしい。ヴラーティアは或る首長（sthapati または gṛhapati）に率いられて集団生活を営み、特殊な服装をして武器を携え、特徴ある車を御して遠征し、武力によって獲物を求めた部族の総称であったと思われる。これ以上の詳細は備考一（二三九頁）にゆずる。

ブラーフマナ文献にいわゆる天的ヴラーティアは、地上のヴラーティアの原型または祖先と認められる。プラジャー・パティ（「造物主」）は独一のヴラーティアと呼ばれ（cf. *infra* 1. 6）、マハーデーヴァ或いはイーシャーナ（ルドラ神の称呼）と同一視され（cf. *infra* 1. 4, 5）、ヴラーティアはすでに最高神の地歩を占めるが、さらに昇華されて、宇宙の最高原理の一名称となった。**A**一五は散文で書かれ、一五節（paryāya）に分かれている。文体・内容ともに古代の讃歌の風格を去ること遠く、むしろブラーフマナ散文またはウパニシャッドの或る部分に類似している。思想的価値には乏しいが、社会的一面を反映する珍奇な一篇たるを失わない。以下ヴラーティアの称讃、彼らに付随する事物の列挙、賓客としての彼らに関する部分を摘訳して、内容の一斑を伝えることとした。

第一節

一 ヴラーティアは絶えず歩行しつつありき。彼はプラジャー・パティを立たしめたり。

二 その[1]プラジャー・パティは、自身の中に黄金を見たり。彼はそを生みいだせり。

三 そは唯一のものとなれり。そは美しきもの(lalāma ?)となれり。そは偉大なるものとなれり。そは最勝のものとなれり。そはブラフマン(呪文の神秘力)となれり。そは熱力となれり。そは真実となれり。彼はそれによって繁殖せり。

四 彼は成長せり。彼は偉大となれり。彼はマハーデーヴァ(ルドラ神の称呼)となれり。

五 彼は神々の支配権を確保せり。彼はイーシャーナ(同上)となれり。

六 彼は独一のヴラーティアとなれり。彼は弓を取りたり、インドラの弓(虹)を。

七 その[2]腹面は青色にして、背部は赤色なりき。

八 [かく知る者は]青色をもって実に敵意ある競争者を蔽いかくし、赤色をもって彼を憎む者を貫くと、ブラフマンの論師たち(brahmavādinaḥ)は言う。

第二節

一 彼は立ちあがれり。彼は東方に向かって進めり。ブリハット(旋律の名)とラタンタラ(同上)、アーディティア神群と一切神群とは、彼に従いて進めり。ブリハットとラタンタラとに対し、アーディティア神群と一切神群とに対し罪を犯す、かく知る[3]ヴラーティアを誹謗する者は。かく知る者はブリハットとラタンタラとの、アーディティア神群と一切神群とのいとしき住居なり。彼にとり東方において信念(śraddhā, 'Hingabe' H.-W. Köhler)は娼婦[4](puṃścalī)にして、ミトラ(「盟友神」)はマガタ[4]国人(または吟遊詩人)なり。識別は衣服、昼はターバン、夜は頭髪、両ハリタ(haritau ?)は二個の環飾、カルマリ(kalmali ?)は宝珠、過去と未来とは二人の従僕、意は粗雑なる車、マータリシュヴァン(神名)とパヴァマーナ(ソーマ)とは粗雑なる車の二頭の牽獣、ヴァータ(「風神」)は御者、旋風は突棒、名声と栄誉とは二人の前駆者なり。かく知る者に名声は到来す、栄誉は到来す。

二―四 (以下南方・西方・北方に進むヴラーティアにつき、同様の記述が行なわれる。主な興味はヴラーティアの持物・財産の列挙にあるが、上記に加えるところがないから省略する。)

第三節

アーサンディー(āsandī)と呼ばれる一種の長椅子の記述、前節の財産目録には洩れているが、ヴェーダ祭式の諸所に用いられる「王座」と共通点を示している。

一 彼は一年の間直立せり。神々は彼に言えり、「ヴラーティアよ、何故に汝は立つや」と。

二 彼は言えり、「人々をしてわがために、アーサンディー(長椅子)をもち来たらしめよ」と。

三 人々は彼のためにヴラーティアのアーサンディーをもち来たれり。

四 夏と春とはその〔前方の〕両脚なりき。秋と雨期とはその〔後方の〕両脚なりき。

五 ブリハットとラタンタラとは縦の枠木なりき。ヤジュニャー・ヤジュニア(旋律の名)とヴァーマ・デーヴィア(同上)とは横の枠木なりき。

六 讃誦詩節(ṛc)は縦に渡せる綱、祭詞(yajus)は横に渡せる綱なりき。

七 ヴェーダは褥(しとね)にして、ブラフマン(呪文の神秘力)は枕なりき。

八 旋律は座にして、ウドギータ(udgītha 歌詠の主要部)は背凭(せもたせ)なりき。

九 そのアーサンディーにヴラーティアは上がりたり。

一〇 彼にとり神々は従僕なりき。思惟(しゆい)は使者なりき。万有は侍者なりき。

一一 かく知る者にとり、実に万有はその侍者となる。

第十節

一 いかなる王の家にもあれ、かく知るヴラーティアが賓客として来たるとき、

二 彼を自身より勝れたる者として敬うべし。かくして彼(王)は主権(kṣatra)に対して罪を犯さず。かくして王権(rāṣtra)に対して罪を犯さず。

三 さて実にブラフマン[5](聖権)とクシャトラ(主権)とは立ち現われたり。彼ら両者は言えり、「われら誰にか入るべき」と。

四 「ブラフマンは実にブリハス・パティ(「讃頌主」)に入るべし、クシャトラはインドラに」と、実にかく言われたり。

五 そこにおいて実にブラフマンはブリハス・パティに入れり、クシャトラはインドラに。

六 この地界は実にブリハス・パティにして、天界はインドラなり。

七 この火は実にブリハス・パティにして、かの太陽はクシャトラなり。

八―九　地界をブリハス・パティと知り、火をブラフマンと知る者に、ブラフマンは来たり、彼はブラフマンの栄光を有する者となる。

一〇―一二　太陽をクシャトラと知り、天界をインドラと知る者に、インドラの力は来たり、彼はインドラの力を有する者となる。

第十一節

一　いかなる人の家にもあれ、かく知るヴラーティアが賓客として来たるとき、

二　〔主人は〕みずから彼を立ち迎えて言うべし、「ヴラーティアよ、汝はいずこに宿りたりや。ヴラーティアよ、〔ここに〕水あり。ヴラーティアよ、満足せしめられてあれ。ヴラーティアよ、汝に好ましきごとく、しかあれ。ヴラーティアよ、汝の欲するごとく、しかあれ。ヴラーティアよ、汝の望むごとく、しかあれ」と。

三　彼に対し、「ヴラーティアよ、汝はいずこに宿りたりや」と言うことにより、実に神々に達する道を獲得す。

四　彼に対し、「ヴラーティアよ、ここに水あり」と言うことにより、実に水を獲得す。

五　彼に対し、「ヴラーティアよ、満足せしめられてあれ」と言うことにより、実に生気（寿命）を長からしむ。

六　彼に対し、「ヴラーティアよ、汝に好ましきごとく、しかあれ」と言うことにより、実に好ましきものを獲得す。

七　かく知る者に好ましきものは来たり、みずから好む人に好まる。

八　彼に対し、「ヴラーティアよ、汝の欲するごとく、しかあれ」と言うことにより、実に欲するところを獲得す。

九　かく知る者に欲するところは来たり、欲するところある者の中の最上者となる。

一〇　彼に対し、「ヴラーティアよ、汝の望むごとく、しかあれ」と言うことにより、実に望むところを獲得す。

一一　かく知る者に望むところは来たり、最上の望みに達す。

第十二節

一　いかなる人の家にもあれ、祭火[6]が取り分けられ、アグニ・ホートラ[7]祭の〔供物〕が火に掛けら

れたるのち、かく知るヴラーティアが賓客として来たるとき、

二 〔主人は〕みずから彼を立ち迎えて言うべし、「ヴラーティアよ、許せ、われ焼灌（供物を祭火に捧げること）を行なわんとす」と。

三 彼もし許さば、焼灌を行ないてよし。もし許さざれば、焼灌を行なうべからず。

四 かく知るヴラーティアに許されて焼灌を行なう者は、

五 祖霊に達する道を認識し、神々に達する〔道を認識す〕。

六 彼は神々に対して罪を犯すことなく、彼の〔アグニ・ホートラ祭は〕成就す。

七 かく知るヴラーティアにより許されて焼灌を行なう者のために、この世界において居所は残存す。

八 しかれどもかく知るヴラーティアにより許されずして焼灌を行なう者は、

九 祖霊に達する道を認識せず、神々に達する〔道を認識せず〕。

一〇 彼は神々に対し罪を犯し、彼の〔アグニ・ホートラ祭は〕成就せず。

一一 かく知るヴラーティアにより許されずして焼灌を行なう者のために、この世界において居所は残存せず。

第十三節

一 いかなる人の家にもあれ、かく知るヴラーティアが、一夜を賓客として過ごすとき、彼はそれにより、地界における清浄なる世界を獲得す。

二 いかなる人の家にもあれ、かく知るヴラーティアが、第二夜を賓客として過ごすとき、彼はそれにより、空界における清浄なる世界を獲得す。

三 いかなる人の家にもあれ、かく知るヴラーティアが、第三夜を賓客として過ごすとき、彼はそれにより、天界における清浄なる世界を獲得す。

四 いかなる人の家にもあれ、かく知るヴラーティアが、第四夜を賓客として過ごすとき、彼はそれにより、清浄なる世界の中、〔最も〕清浄なる世界を獲得す。

五 いかなる人の家にもあれ、かく知るヴラーティアが、無数の夜を賓客として過ごすとき、彼はそれにより、実に無数の清浄なる世界を獲得す。

六 いかなる人の家にもあれ、ヴラーティアにあらずしてヴラーティアと称し、ただ名のみをもつ者が賓客として来たるとき、

七 〔主人は〕彼を引き入るるもよし、彼を引き入れざるもよし。

八 この神格のために、われ水を呈す。この神格をわれ宿らしむ。これなるこの神格に、われ努めて侍くと考えて、彼[8](自称ヴラーティア)に努めて侍くべし。

九 かく知る者にとり、そはこの神格に捧げられたるものとなる。

第十四節

一 彼(独一のヴラーティア)が東方に向かって進みたるとき、マルト神群は生起して彼に従い進めり、意(思考力)を食者[9](annāda)となしたるのち。かく知る者は意を食者として食物を食す。

二 彼が南方に向かって進みたるとき、インドラは生起して彼に従い進めり、力を食者となしたるのち。かく知る者は力を食者として食物を食す。

三 彼が西方に向かって進みたるとき、ヴァルナは生起して彼に従い進めり、水を食者となしたるのち。かく知る者は水を食者として食物を食す。

四 彼が北方に向かって進みたるとき、ソーマは生起して彼に従い進めり、焼灌を食者となしたるのち。かく知る者は焼灌を食者として食物を食す。

五 彼が不動の方角(天頂)に向かって進みたるとき、ヴィシュヌ(神名)は生起して彼に従い進めり、ヴィラージュ(「遍照者」)を食者となしたるのち。かく知る者はヴィラージュを食者として食物を食す。

六 彼が家畜に向かって進みたるとき、ルドラ(神名)は生起して彼に従い進めり、植物を食者となしたるのち。かく知る者は植物を食者として食物を食す。

七 彼が祖霊に向かって進みたるとき、ヤマ王(「死神」)は生起して彼に従い進めり、聖語スヴァダー[10](svadhā)を食者となしたるのち。かく知る者は聖語スヴァダーを食者として食物を食す。

八 彼が人間に向かって進みたるとき、アグニは生起して彼に従い進めり、聖語スヴァーハー[11](svāhā)を食者となしたるのち。かく知る者は聖語スヴァーハーを食者として食物を食す。

九 彼が上方に向かって進みたるとき、ブリハス・パティは生起して彼に従い進めり、聖語ヴァシャット[12](vaṣaṭ)を食者となしたるのち。かく知る者は聖語ヴァシャットを食者として食物を食す。

10 彼が神々に向かって進みたるとき、イーシャーナは生起して彼に従い進めり、激情(manyu)を食者となしたるのち。かく知る者は激情を食者として食物を食す。

二 彼が生類に向かって進みたるとき、プラジャー・パティは生起して彼に従い進めり、生気を食者となしたるのち。かく知る者は生気を食者として食物を食す。

三 彼がすべての中間方角に向かって進みたるとき、パラメーシュティン(「最勝者」)は生起して彼に従い進めり、ブラフマン(呪文の神秘力)を食者となしたるのち。かく知る者はブラフマンを食者として食物を食す。

第十五節

一 そのヴラーティアは、

二 七つのプラーナ(prāna 出息)と、七つのアパーナ(apāna 入息)と、七つのヴィアーナ(vyāna 体内に遍満する風気)とを有す。

三 彼の第一のプラーナは上昇者と名づけられ、そはこの火なり。

四 彼の第二のプラーナは豊満者と名づけられ、そはこの太陽なり。

五 彼の第三のプラーナは運行者と名づけられ、そはこの月なり。

六 彼の第四のプラーナは遍在者と名づけられ、そはこの浄化者(風)なり。

七 彼の第五のプラーナは母胎と名づけられ、そはこの水なり。

八 彼の第六のプラーナは親愛者と名づけられ、そはこれらの家畜なり。

九 彼の第七のプラーナは無限者と名づけられ、そはこれらの生類なり。

第十六節

一—七 (七つのアパーナを、それぞれ満月の日、各半月の第八日、新月の日、信念、潔斎、祭祀、報酬と一致させている。)

第十七節

一—七 (七つのヴィアーナを、それぞれ地、空、天、星宿、季節、季節、季節に由来するもの、歳と一致させている。)

八 神々は共通の目的の周囲を廻り行く(宇宙の秩序の維持)。かく実に季節は歳およびヴラーティアに従って廻り行く(時間・季節の正しい循環)。

九 彼ら(神々)が太陽に入り行くごとく、正にかく〔彼らは〕新月の日および満月の日に入る。

一〇　これ彼らの唯一の不死性なり。かく知りて人は焼灌を行なうべし。

第十八節

一　そのヴラーティアにつき、

二　彼の右眼はすなわちかの太陽なり。彼の左眼はすなわちかの月なり。

三　彼の右耳はすなわちこの火なり。彼の左耳はすなわちこの浄化者(風)なり。

四　昼夜は〔彼の〕両鼻孔なり。〔彼の〕頭蓋の両半はすなわちディティ(女神名)とアディティ(「無垢の女神」)となり。〔彼の〕頭部は歳なり。

五　ヴラーティア[13]は昼には西に向き、夜には東に向く。ヴラーティアに頂礼あれ。

(1) ヒラニアガルバ「黄金の胎児」、**R** X. 121 のモティーフ、cf. n. 8 *ad* **A** XI. 1.

(2) 虹としてのインドラの弓。

(3) かく知る者(evaṁ vidvas = evaṁvid)とは、如実に知る者、真理を知る者を指し、ウパニシャッドにおいても重要な成句として用いられる。

(4) 両者はヴラーティアの随伴者。

(5) バラモン階級の宗教上の権力。これに対しクシャトラは、クシャトリヤ階級の政治上の権力。

(6) ガールハパティア祭火(「家火」)から取り分けて他の祭火を点じること。

(7) 朝夕供物を祭火に捧げる祭式、普通供物は沸かした牛乳。

(8) たとい偽りのヴラーティアに行なった款待も、神格に供養したと同一の功徳をもつ。

(9) 各領域における精髄の摂取者。

(10) 祖霊に対する献供において発する呼声。

(11) 神々の献供において発する呼声。

(12) 献供頌(yājyā)の終りに発する呼声。

(13) 太陽としてのヴラーティア。太陽は夜の間に再び東方に戻る。

備考一

Aの記述は神秘的・神話的に過ぎ、ヴラーティアの実態を具体的に把えることはできない。その後ヴラーティアならびにヴラーティア・ストーマ祭の問題は、ブラーフマナ書の学匠ならびにスートラ作者の注意を引き、豊富な文献が残っている。辻[1]『古代インドの説話』(春秋社、一九七八年)一三四―一四八頁参照。

古典期の定義によれば、ヴラーティアとは上位三階級に課せられた宗教的義務を怠った者、或いは階級相互の混血結婚から生まれた者とされ、これらはヴラーティア・ストーマと呼ばれる特定のソーマ祭を行なわない限り、すべての社会的権利を失う。しかしヴラーティアの起原とその実態は、このように単純なものではなかった。彼らは恐らくアリアン人でありながら、正統バラモン教の規定に従わず、独自の服装・生活様式・宗教儀礼をもった種族であったと思われる。すでに述べた通り、彼らは或る首長に率いられて集団生活を営み、特殊の服装をして、武力による遠征に従事したらしい。バラモン教の本拠クル・パンチャーラの国人と深い関係を保っていたから、恐らくアリアン人の中の特別な団体で、宗教ならびに祭儀の上でも若干の共通点をもっていたと思われる。ただし彼らが東インドのマガダ国と関連したことも否めない。また服装・行作において、ヴェーダ祭式のいわゆる潔斎者(dīkṣita)に顕著な類似点を示すことは、しばしば指摘されている。彼らが遠征に出発する際には、団結による成功を祈り、またそれから帰還したときには、汚染・罪過から身を清めるために、特殊な祭祀を行なったにちがいない。バラモン教の文化が進展して野蛮な風習を除去する傾向が強まり、祭祀の形式が整備されるにつれ、ヴラーティアは正統バラモン社会に容れられず、その風俗や慣習は蔑視され、非難の的となり、彼らを正統化

する方便として、ヴラーティア・ストーマが利用されたと考えられる。この祭式についてはなお種々の問題が存するが、これ以上ここには触れず、彼らの財産に関する一節(パンチャヴィンシャ・ブラーフマナ一七・一・一四—一六)を引用する。

頭布(ターバン)と〔家畜の〕突棒と、矢(または弦?)を伴わない(すなわち使用に堪えない)弓と、板敷の粗雑な車と、黒ずんだ衣服、黒と白との二枚の羚羊の毛皮、銀の装身具、これが首長の〔持物〕である。

他のヴラーティアたちは、赤い縁をもち、紐状の総をつけた〔衣服〕、おのおの二本の紐、おのおの一足の靴(サンダル)、二枚の繋ぎ合わせた羚羊の毛皮を所有する。

これがヴラーティアたちの財産である。いかなる人に彼らがこれを与えるにしろ、実にその人に彼らは〔自身の罪過を〕払拭して〔清浄となる〕。

(1) 参考書の中現在でも次のものが重要である。J. W. Hauer: Der Vrātya, Stuttgart 1927.——J. C. Heesterman: Vrātyas and sacrifice, Indo-Iranian Journal 6 (1963), p. 81-172.

備考二

賓客の優遇は太古から重んじられ、全篇散文をもって書かれ、六節(paryāya)からなる**A**九・六はこれを主題とし、款待の個々の行作を、ヴェーダ祭式の諸要素に擬している。上記**A**一五・一〇―一三も賓客の礼遇を説いているが、その一部分はほとんどそのまま後代のスートラ文献(アーパスタンバ・ダルマスートラ二・三・七、特に同所一三―一七参照)に引用されている。

アタルヴァ・ヴェーダについて――入門者のために

アタルヴァ・ヴェーダ(**A**)は四ヴェーダの一つである。他の三ヴェーダ(三明)、すなわちリグ・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダおよびヤジュル・ヴェーダが、それぞれヴェーダ祭式の主要な構成要素、讃誦・歌詠・供施(ぐせ)に必要な内容を載せているのに対し、**A**は呪法をその本領とし、少なくもその起源において深く民間信仰に根ざしていた。本来祭祀と呪法とは厳格に区別し難く、ことに古代インドにおいて両者は密接に関連していた。しかし上記の三ヴェーダを司った祭官は、厳粛なシュラウタ祭、すなわち三個の祭火を必要とするヴェーダ祭式のみを神聖と認め、**A**の呪法を正統視することを拒んだ。従って**A**が他の三ヴェーダに伍して、第四ヴェーダの地位を確保するまでには、長い年月と多大の努力とを必要とした。**A**を奉じた祭官族は呪法の知識によって次第にその名声を高め、ついに祭式全般の総監たるブラフマン祭官の地位を独占し、さらに戦勝の呪法を必要とする王侯の信用を博して、王室付司祭官プローヒタの職を兼ね、そのヴェーダ本集に適当な増補を施して、正統のヴェーダ祭式に密着する関係を確立した。

㈠ 名　称

Aの最古の名称はアタルヴァ・アンギラスで、火祭すなわち供物を祭火に捧げる単純な祭儀に従事した太古の祭官族、アタルヴァンとアンギラスとの名に由来する。後には同様の祭官族ブリグの名によって、ブリグ・アンギラスとも称せられ、さらに簡略にアタルヴァ・ヴェーダと呼ばれた。呪法の目的は、吉祥・増益と呪詛・調伏とに大別されるが、インドの伝承は前者をアタルヴァン族に、後者をアンギラス族に配当している。しかし最も誇らしいブラフマ・ヴェーダという名は非常に新しく、この際ブラフマンは、ウパニシャッド哲学における宇宙の最高原理の名称にほかならない。

㈡ 学　派

インド古来の伝承に従えば、Aに九派の別があったという。しかし名称に出入が多く、かつほとんどすべての名称が異読(*var. lect.*)を呈するため、学派名を確定することは困難である。ただいずれの場合でも、パイッパラーダとシャウナカ(またはシャウナキーヤ)の名が挙げられ、後世

にA本集を残したのもこの両派である。前者は聖仙ピッパラーダまたはピッパラーディの名に由来し、後者は聖仙シャウナカに基づく。現在も一般に流布しているのは、このシャウナカ派(またはシャウナキン派)に属する文献である。

㈢ パイッパラーダ派(P)の本集(Saṁhitā)

Pの本集の発見には特殊の困難が伴った。[1]カシュミールで発見され、白樺の樹皮(birch-bark)にシャーラダ(śārada)文字で書かれた写本は、[2]まず写真によって出版された。しかしこのいわゆるカシュミール伝本ははなはだ不完全で、脱落・誤記に満ち、シャウナカ派の伝本と配列を異にし、そのままでは学術的使用に堪えるものではなかった。[3]L・C・バレットの三五年にわたる驚歎すべき努力によるローマ字転写ならびに批判的注解にもかかわらず、[4]またこれに多少の修正を加えたラグ・ヴィーラのデーヴァ・ナーガリー文字版にもかかわらず、カシュミール伝本の利用は依然として困難であった。

この事態は、一九五九年、D・バッターチャリアが、オリッサ地区の村落から多量のしかも優秀なP写本、パーム・リーフにオリヤ(Oriya)文字で書かれたものを発見するに成功し、[5]その第

一巻(I. kāṇḍa)を含む第一冊を出版するに及んで一変した。世界のインド学界はもちろんこれを最近の一大発見として歓迎した。なお第二・第三・第四巻を含む第二冊は、D・バッターチャリアの急逝の後、その令息ディーパック・バッターチャリアの手によって上梓された(Calcutta 1970)。ヴェーダ学者として令名の高かった発見者は、第一冊の序文において、新しいP写本に関する重要点を論述し、その令息による第二冊の序文もまた示唆に富んでいる。ここにおいて学界は、しばしばAの冒頭として引用された有名な詩節、śaṁ no devīr abhiṣṭaye(=シャウナカ伝本一・六・一)で始まるP伝本の真正の姿に接するにいたった。出版後いち早くすでに批判的研[6]究が発表されていることは、学界の慶事である。

新写本は比較的に誤謬が少なく、解読し易いとはいえ、決して完璧ではない。オリッサ[7]写本相互の関係、これらと従来のカシュミール写本との関係は複雑で、全貌を明らかにするためには、前者の残余の諸巻が出版される日を待たねばならない。——Pの伝承にオリッサ写本とカシュミール写本との二支流を区別すべきであるとする説(特にK. Hoffmann)にも留意すべきである。

(1) Cf. R. Roth: Der Atharvaveda in Kaschmir. Tübingen 1875. 現在はチュービンゲン大学の図書館に保管されている。

(2) The Kashmirian Atharva-Veda (School of the Paippalādas) reproduced by chronophotography from the manuscript in the University Library at Tübingen, ed. by M. Bloomfield and R. Garbe. Baltimore 1901.

(3) Leroy Carr Barret: The Kashmirian Atharva Veda, Ed. with critical notes. New Haven 1906-1940.

(4) Raghu Vira: Atharva Veda of the Paippalādas, 3 vols., Lahore 1936, 1940, 1941.

(5) Durgamohan Bhattacharyya: Paippalāda Saṁhitā of the Atharvaveda, First Kāṇḍa, ed. from original manuscripts with critical notes. Calcutta 1964.——Vol. Two (with an introduction by Dipak Bhattacharyya), Calcutta 1970.

(6) E.g. L. Renou: Notes sur la version "Paippalāda" de l'Atharva-Veda (Première série), Journal Asiatique 1964, p. 421-450; (Deuxième série), ibid. 1965, p. 15-42.——K. Hoffmann: Remarks on the new edition of the Paippalāda-Saṁhitā, Indo-Iranian Journal 11 (1968), p. 1-10.——H. Ch. Patyal: Critical examination of some readings of the Paippalāda Saṁhitā (Kāṇḍa II), Journal of the Oriental Inst., Basoda 21 (1972), p. 275-282.

(7) Cf. Michael Witzel: On the reconstruction of the authentic Paippalāda-Saṁhitā, Gaṅgānātha Jhā Centenary Volume, 1975, p. 463-488.

(四)　**A**の構成、両伝本の関係

両伝本の本集は共に二〇巻からなり、各巻(kāṇḍa)は讃歌(sūkta)・詩節に細分されている。他の区分はしばらくおき、**A**の引用はこれらの三数字によって規定される。シャウナカ派(**Ś**)の伝本は七三一讃歌、約六〇〇〇詩節を含むといわれる。その約六分の一は、ブラーフマナ文献のそれに似た散文をもって書かれている。これに対し**P**伝本は遙かに多くの分量を有し、カシュミール写本は約六五〇〇詩節を含み、オリッサ写本の詩節数は約八〇〇〇にのぼるといわれる。両伝本は巻数を同じくしつつも、各巻が順次に相応するのではない。**P**第一―四巻は、**Ś**第一―四巻に、**P**第一六―一八巻は、**Ś**第八―一七巻に相応資料をもつが、**Ś**第一五、第一八、第二〇巻は、全く**P**に欠けている。また**Ś**第六、第七巻はその内容を**P**第一九、第二〇巻から採ったと考えられる。いま第一巻を例として見れば、**Ś**伝本は四二五詩節を含むのに対し、**P**伝本は四八六詩節を有し、新しい**P**写本のみに見いだされる詩節は約一五〇に達する。両伝本の対照は**A**研究の初期から注意され、当時知られた限りにおいては、**W**の訳注に記載され(*spec.* cf. p. 1013-1023)、**P**伝本の出版(Barret, Raghu Vira, Bhattacharya)にも、**P**伝本に対する**Ś**伝本の当該個所が付記されている。したがって両伝本の比較は容易になったが、両伝本を詳細に比較検討し、学術的に記述するとすれば、多くの注記を必要とし、本書のごとき入門書のよくするところではない。したがって本書は**Ś**[1]伝本(ed. M. Lindenau)を底本とし、特別の場合を除き、**P**伝本には触れないこととした。

(1) Ed.: R. Roth und W. D. Whitney: Atharva Veda Sanhita [I-XX]. Berlin 1856.——2, verbesserte Auflage [I-XIX], besorgt von M. Lindenau, *ibid.* 1924, 3. Auflage, Bonn 1966.——Cf. W. D. Whitney: Index verborum to the published text of the Atharva-Veda, New Haven 1881.
Shankar Pāndurang Pandit: Atharvavedasaṁhitā with the commentary of Sāyaṇāchārya, 4 vols., Bombay 1895-1898.
Vishva Bandhu: Atharvaveda (Śaunaka), The Pada-pāṭha and Sāyaṇācārya's commentary, 6 vols., Hoshiarpur 1961-1964.
Tr.: R. T. H. Griffith: The hymns of the Atharva-Veda, 2 vols., Benares 1895, 1896.——2nd ed. 1916, 1917.
W. D. Whitney: Atharva-Veda Saṁhitā [I-XIX], revised and edited by Ch. R. Lanman, 2 vols., Harvard Oriental Ser. vol. 7 and 8, Cambridge (Mass.) 1905.

このほか部分訳は非常に多いが(e.g. by Aufrecht: **A** XV, Weber: **A** II-VI, Ludwig, Florenz: **A** VI, Grill: Hundert Lieder, V. Henry: **A** VII. XIII; cf. **W**. p. CI-CVI)、内容が最も豊富でかつ重要なのは次のものである。

M. Bloomfield: Hymns of the Atharva-Veda, together with extracts from original books and the commentaries, Sacred Books of the East, vol. 42, Oxford 1897.

Wの英訳以後出版された抜粋訳としては、V. Papesso: Inni dell' Atharva-Veda, traduzione, introduzione et note, Bologna 1933.——L. Renou: Hymnes spéculatifs du Véda, traduits du sanskrit et annotés, Paris 1956 (本書第二部のため参照)を挙げるに止める。

なお最近ソ連において T. Ya. Elizerenkova により約二三〇篇のロシア語訳ならびに注解が出版され(Moskva 1977)、大正大学斎藤光純師の御好意によって入手できたが、本書の原稿をほとんど完了した後であったのは遺憾である。

本邦における**A**研究には特筆すべきものが少なく、ここには常磐井尭猷・岩本裕『アタルヴァ・ヴェーダ』(**A** I-IV, 1938-1939)の名を記するに止める。

(五) 年代

Aの最終的編集は**R**のそれより新しい。しかし絶対的年代には定説がない。およそ前一〇〇〇年を中心と考えることも、便宜上の仮定に過ぎない。文化の中枢はパンジャーブを去ってガンガー河の流域に移り、**R**にその名を見ない虎を知り、社会的にはバラモンを最高とする四階級を峻別し、思想的には哲学的瞑想を進展させ、後世のバラモン教的特徴を具備している。言語・文体・韻律の相違は、必ずしも時代の差にのみ帰しがたく、両ヴェーダの内容と起源、すなわちソーマ祭を中心とする高級な祭式と、庶民の信仰に根ざす通俗な呪法との差に基づくところも少なくない。しかし概して言語等にも時代の推移の窺われることは否めない。ただし両ヴェーダを余りに判然と隔離して考えることも正しくない。**R**の中に**A**的讃歌の含まれていることは周知の事実である(辻『リグ・ヴェーダ讃歌』三五八—三九五頁参照)。両ヴェーダの密接な関係を示すため、いささか重複の嫌いはあるが、本書に訳出した**A**讃歌とこれに全等あるいはほとんど全等の**R**讃歌若干との対応表を次に掲げる。

E.g. **A** III. 11. 1-4 : **R** X. 161. 1-4
IV. 5. 1, 3, 5, 6 : VII. 55. 7, 8, 6, 5
VI. 27 : X. 165. 1-3

A Ⅵ. 64	: **R** X. 191. 2-4
Ⅵ. 91. 2	: X. 60. 11
Ⅵ. 91. 3	: X. 137. 6
Ⅵ. 126	: Ⅵ. 47. 29-31
Ⅶ. 53. 7	: I. 50. 10

R以外のヴェーダ文献、ことにヤジュル・ヴェーダの中には、**A**と共通する資料が少なくない。また**A**の散文部分にはブラーフマナ文献の散文に通じるものがある。その比較は重要であり、かつヴェーダ文献の年代に関しても興味ある問題であるが、研究範囲が余りに拡大されるため、すべてを**W**の訳注に譲り、ここには割愛した。

(六) **Ś**派伝本の内容

前述のごとく、**Ś**派の本集は二〇巻からなり、主要部分は次の三群に分かたれる。

一、第一—七巻は短い呪法用讃歌を含む。大体において各讃歌の詩節数を規準として配列されている。すなわち順次に四、五、六、七、八詩節のもの、次いで三詩節のもの(第六巻)、最後に

二ないし一詩節のもの(第七巻)を集めている。もちろんこの原則に一致しない場合もある。いずれにせよ**A**の本領を最もよく代表している部分で、単純な措辞・文体の中に、素朴な文学的効果を挙げている場合もある。同種の詩句が中世ヨーロッパの禁厭(まじない)の中に見いだされることは、しばしば指摘されている、cf. e.g. Merseburger Zaubersprüche.

二、第八—一二巻は長い讃歌を収め、第一群の讃歌と同じく、呪法を主要目的とする。第一二巻(五讃歌)を除き、各巻はいずれも一〇讃歌からなるが、その順序ならびに各巻の内部における讃歌の配列は、簡単に説明できない。この群の中には祭祀に関する讃歌および多くの思想的讃歌が含まれ、ことに後者は**R**の末期に擡頭した哲学思想とウパニシャッドとを結ぶ連鎖として、貴重な資料を提供している。

三、第一三—一八巻の各巻は、主題によって統一されている。例えば第一三巻はローヒタ(最高原理としての太陽)に捧げられ、第一四巻は婚姻儀式に必要な詩節を含む(**R**一〇—八五、辻『リグ・ヴェーダ讃歌』二三九—二四六頁参照)。同様に第一八巻は葬送儀式に必要な多数の詩節を集録している(**R**一〇・一六および一八、辻、前掲書、二四六—二五二頁参照)。ただし婚姻・葬送に関する詩節の順序は、実際の祭儀のそれと一致しない。さらに第一五巻は、特殊のア

リアン人部族ヴラーティアの讃美に当てられている。この第一五巻は一八節[1](paryāya)に区分され、全巻散文で書かれている。最後に第一六巻は九節からなり、中心的主題を欠き、大部分は散文で綴られている。

四、以上の三群に対し、第一九巻は明らかに付録の性格を示し、第二〇巻はさらに新しい付加部分で、いわゆる[2]クンターパ讃歌一〇篇(二〇・一二七—一三六)を除き、すべて**R**、特に第八巻から借用した詩節よりなり、ソーマ祭におけるブラフマン祭官(実際上はホートリ祭官)の補助者、ブラーフマナーチャンシン(brāhmaṇācchaṁsin)の使用に供される。

(1) paryāya-sūktāni 'period-hymns' は arthb-sūktāni 'sense-hymns' に対立する名称である。Cf. **W** p. CXXVII, 472, 769, 773, 792-4.

(2) Kuntāpa-sūktāni については、cf. *spec.* **BG** p. 96-101. 内容としては、猥褻な部分、説話的部分(cf. **B** p. 197-198, p. 688-692 : X. 127)、布施の讃美等を含む。

(七) 呪法讃歌の分類

インドにおいては祭祀と呪法との間に本質的区別がなく、**R**の中に**A**的讃歌の含まれていることはすでに見た。またヤジュル・ヴェーダの規定する多数の願望祭[1](kāmyeṣṭi)は、目的と手段とにおいて**A**の呪法と選ぶところがない(cf. **C** p. viii)。共にマントラ(mantra 讃歌・呪文)の神秘力(brahman)と一定の行作との効果によって、必然的に願望が達成された。元来呪法はその関係するあらゆる事物に超人的呪力を認める。病魔、有害な生物、災厄の原因と思われる無生物、垢のごとく付着する罪悪などの間に何らの区別を設けず、すべて具体的に考えられていた。**R**以来の神々は概して威信を失い、援助を求めて呼びかけられることはあっても、副次的役割を演じるに過ぎない。呪法のためには、むしろ種々の薬草・護符その他の物品が肝要であった。時には高圧的・強制的な手段によらず、懇願的に宥めて歓心を買う方法にいで、悪魔や障碍が速やかに退散し、他の土地或いは他の部族に移ることを期待した。当時の社会において、呪法に長じた者が同時に医者(medicine man)を兼ねたことは想像に難くなく、[2]呪法はある程度まで医薬の進歩に貢献したものと考えられる。

呪法の範囲は非常に広い。[3]ここには従来慣用されてきた分類を基礎として略述する。

(一) 病気を癒し、病魔を駆逐するための治病法(bhaiṣajyāni *scil.* sūktāni)。病魔に憑かれることは病気の主要な原因と考えられた。

(二) 健康を増し、寿命を延ばすための息災・長寿法(āyuṣyāṇi)。

(三) 悪魔・魔術師(black magic を行なう者)・仇敵を克服し、他人の呪詛を無効にし、その施行者を破滅させる調伏・反撃法(abhicārikāṇi, pratikriyākarmāṇi)。

(四) 男女の愛情・融和を増進させ、子孫を得るための婦女法(strīkarmāṇi)。

(五) 調和・敬愛・権威を得るための和合法(sāṃmanasyāni)。

(六) 王威を高め、戦勝をもたらし、一旦失った王位を回復するための国王法(rājakarmāṇi)。

(七) バラモンの利益を守り、その権力を増すための呪法。

(八) 開運・繁栄・安穏を目的とする増益法(pauṣṭikāni)。

(九) 罪垢・凶兆・悪夢の影響を消すための贖罪法(prāyaścittāni)。

(一〇) このほか単純に以上の分類のいずれにも配当し難い若干の讃歌がある。なおいわゆる思想的讃歌については、本書第二部参照。

(1) Cf. W. Caland: Altindische Zauberei, Darstellung der altindischen "Wunschopfer", Amsterdam 1908.

(2) Cf. e.g. J. Filliozat: Megie et médicine, Paris 1943.

(3) Cf. *spec.* **B** p. VII–XVI: Contents, **BG** p. 57–101.

(八) 言語[1]・文体・韻律

バラモンの手によって整頓された結果、**A**の言語は概して統一的である。**R**から大量に借用しているとはいえ(全体の約七分の二)、独自の部分について見れば、その起源の通俗性は保持されている。その言語は**R**のそれよりも明らかに新しく、**R**の特徴は衰退している。微妙な音韻現象は減少し、ことに形態の単純化が著しい。例えば名詞・動詞の語尾は単一化され、接続法(subjunctive)、-tum で終わるもの以外の不定詞(infinitive)は消滅の道をたどっている。これに対し、呪法の性質上、命令・希望・願望を表わす人称形(imperative, optative)は頻繁に使用され、未来形、受動的表現は発達し、ことに -ta で終わる過去分詞、-tvā で終わる絶対分詞の使用は増進した。語彙も革新の傾向を示し、多数の新しい単語が加わった。

・**R**における厳粛な文体とは異なり、呪文にふさわしい柔軟性に富み、構文はややもすれば文法的に不正確で散漫に流れ、省略が多いためしばしば補足を余儀なくさせる。文章法(syntax)は特に複雑ではないが、呪文としての性格に従い、音韻の効果に重きを置き、語句の反復・リフレイ

ンが多く、好んで通俗語源を弄んでいる。例えば薬草名 apāmārga と動詞 apa-mṛj「拭い去る」との関連は常に詩人の念頭を離れない。
韻律にいたっては、Rに見る厳格性は影を潜め、言語以上に散漫奔放で、これを是正するための試みは成功しない。もちろん新写本によるPの全貌が公刊されたあかつきには、この方面の研究も大いに進歩するにちがいない。

A讃歌を和訳するに当って、R讃歌と同一の文体を用いることは許されない。Aの約六分の一を占める散文部分にもかかわらず、ブラーフマナ文献の翻訳に用いた素朴な文体もふさわしくない。ここでは呪文の性格にかんがみ、単なる現代口語体よりもむしろ平易な古文体を選んだ。語義も文脈を考慮しつつ、余りに厳格な画一性を避け、適宜の弾力性を認めることとした。

(1) Cf. e.g. L. Renou: Histoire de la langue sanskrite, Paris 1956, p. 32–33; Wackernagel: Altindische Grammatik I, Introduction générale, Göttingen 1957, p. 13 *cum* nn. 176–183.——J. Gonda: Old Indian, Leiden-Köln 1971, *passim*.

(九) A所属の文献

(A) カウシカ・スートラ[1](K)

Aは讃歌を集録しているだけで、呪法の実際面には触れていない。讃歌の唱誦自体に呪力があるとしても、これに随伴する一定の作法、使用すべき物品に関する知識を欠いては実効がない。行作や物品が讃歌の中に示唆されている場合も少なくないが、実際の適用を組織的に説明しているのはKである。成立年代の差を考えれば、Kがどの程度まで当初の作法を忠実に伝えているかは保証の限りではないが、Aの呪法の研究に最も重要な文献であるばかりでなく、呪法一般の研究者、比較研究に関心をもつ民族学者にも、貴重な参考資料を提供する。

Kは一四章(adhyāya)、一四一節(kaṇḍikā)からなり、各節はスートラに細分され、引用は便宜上節とスートラとの二個の数字に依る。Kは一面においてAのグリヒア・スートラ(家庭的儀典の綱要書)と認められるが、他面においてはAの呪法の綱要書たる性格を兼ねている。まず[2]冒頭(7. 1–9. 11)に通則(paribhāṣā)を載せ、次いで前半(10. 1–52. 21)は呪法の規定に当てられ、普通のグリヒア・スートラの内容に共通する事項は後半(53–141)に収められている。なおK六〇—六八は[3]サヴァ・ヤジュニャと呼ばれる特殊の祭儀に関している。A一一・一および一二・三が用いられ、「神聖な粥(brahmaudana)」の調理、献供、その残滓を祭主に塗ること、バラモンの饗

応等が重要な要素をなしている。ソーマ祭に匹敵する効果があり、これにより祭主は種々の願望を満たし得るのみならず、天国が約束されているとさえ言われている。

Kの文体は簡略に過ぎ、注釈の援助にもかかわらず非常に難解である。**K**の解明に多大の貢献したカーラントは、本来[4]の呪法に関する部分(**K** 7-52, *except* 43. 22-45. 19: vaśāśamana)を、注釈を添えて訳出し、研究者にこの上なき指針を提供した。本書が讃歌の後に添えた【適用】においては、全面的にこれに依ることとした。

呪法は普通新月の日または満月の日に行なわれる(cf. **C** p. Ⅵ-Ⅶ)。新月祭または満月祭の祭儀を通常の規定に従って進め、両個[5]のアージア献供(ājyabhāgau)をすませた後、いわゆるアビアーターナ献供(abhyātāna)の中間に、当該呪法讃歌を伴う主要献供(pradhānahoma)が捧げられる(cf. **K** 137. 42, **C** p. Ⅷ)。以下再び新月祭または満月祭の祭儀が続行される。主要献供の供物(havis)は、一般にアージア(ājya 液状バター)または祭餅(puroḍāśa)であるが、供物の残滓(saṃpāta)は水を満たした皿に注がれ、呪法に用いられる物品に塗られる。讃歌の唱誦と共にこの手順は常に繰り返される。本書の適用欄では、特に必要な場合を除いてこの反覆を省略し、各呪法につき、専門家のみならず民族学者・考古学者等一般の読者に興味があると思われる祭儀の特徴

のみを指摘するに止めた。

呪法は元来依頼者と施術者との関係に基づいたものであろうが、祭祀の権利が全般にバラモンの手に委ねられて以来、特別の場合を除き、バラモンによって施行されたにちがいない。ただ国王に関する呪法は王室付司祭官プローヒタ(purohita)によって実施されたと思われる。なお呪法の実際面に興味をもつ読者には、上記**K**の通則(**C** p. 10-18)の一読をおすすめする。——呪法には多くの植物・薬草が用いられるが、筆者にはこれらの植物の名を和訳し、或いは identify する能力がない。本書では原則としてそれらの名をそのまま片仮名に写し、巻末の「対応表」中に、サンスクリット綴りを示すに止めた、cf. **C** p. 187-188: pflanzenliste.

(1) M. Bloomfield: The Kauçika-Sūtra of the Atharva-Veda, with extracts from the commentaries of Dārila and Keçava, New Haven 1890.——H. R. Diwekar, etc.: Kauśikasūtra-Dārilabhāṣya, critically ed. for the first time on the basis of the single codex which is reproduced by offset process, Poona 1972.

(2) Tr.: **C** p. 10-18. **K**の理解に最も肝要。

(3) J. Gonda: The Savayajñas (Kauśikasūtra 60-68), Translation, introduction, commentary,

Amsterdam 1965.

(4) W. Caland: Altindisches Zauberritual, Amsterdam 1900. = **C.**

(5) Cf. A. Hillebrandt: Das altind. Neu- und Vollmondsopfer, Jena 1879, p. 102-107.

(B) ゴーパタ[1]・ブラーフマナ(**G**)

このブラーフマナは独立のブラーフマナ文献の最新層に属し、前後二篇からなる。ただし本来**S**派或いは**P**派に専属したかについては、疑問なしとしない。**G**の成立は新しいとはいえ、下記ヴァイターナ・スートラより古く、前篇は独自の資料を含んでいる。

前篇(pūrva-bhāga)は五章(prapāṭhaka)からなり、後篇(uttara-bhāga)は六章からなる。前篇はまずウパニシャッド的の宇宙論に始まり(I. 1-15)、次いでプラナヴァ・ウパニシャッドとほとんど全く同一の部分(I. 16-30)に進み、さらにサーヴィトリー・ウパニシャッド(I. 31-38)へと続く。これによって明らかなごとく、順を追ってヴェーダ祭式を説明する普通のブラーフマナ書とは、いちじるしく内容を異にする。これに対し後篇は、大体においてブラーフマナ書の体裁を保ち、順次新月祭・満月祭等、主要な祭式を説明する。しかもブラーフマナ文献からの引用に富み、特にシャタパタ・ブラーフマナと密接な関係にある。

(1) D. Gaastra: Das Gopatha Brāhmaṇa, Leiden 1919.――**BG** p. 101-124.

(C) ウパニシャッド(**Up**)

Aにはおびただしい数のウパニシャッドが属するとされているが、通常古代ウパニシャッドと呼ばれるものの列に加えられているのは、次[1]の三篇である。

一、ムンダカ[2]・ウパニシャッド(Muṇḍaka-**Up.**)――三章(anuvāka)からなり、各章はさらに二分されている。カタ(Kaṭha-**Up.**)およびシュヴェーターシュヴァタラ(Śvetāśvatara-**Up.**)と同類の韻文ウパニシャッドで、内容から見ても注目すべき点をもつ。

二、プラシュナ[3]・ウパニシャッド(Praśna-**Up.**)――六章(praśna)からなる散文ウパニシャッドで、本来**P**派に属したと思われる。六個の質問に対するピッパラーダ仙の解答を含み、ムンダカよりやや新しい。

三、マーンドゥーキア[4]・ウパニシャッド(Māṇḍūkya-**Up.**)――一二の短節からなる散文ウパニシャッドで、その名称から判じて、元来**R**の一学派の所産と想像される。プラシュナよりさらに

新しいと思われるが、後世のヴェーダーンタ哲学者ガウダパーダ（西紀七〇〇年ごろ）が、韻文による教義の解明・敷衍たるカーリカー（Kārikā）を著したために有名である。

（1） これらのウパニシャッドの出版・翻訳は非常に多く、容易に閲読できるから、ここには、Les Upanishad, Texte et traduction sous la direction de Louis Renou の中に含まれたものを挙げるに止めた。

（2） J. Maury : Muṇḍaka Upanishad, Paris 1943.

（3） J. Bousquet : Praśna Upaniṣad, Paris 1948.

（4） Em. Lesimple : Māṇḍūkya Upaniṣad et Kārikā de Gauḍapāda, Paris 1944.

(D) ヴァイターナ・スートラ[1]

Aに属する唯一のシュラウタ・スートラ（祭式綱要書）で、八章（adhyāya）、四八節（kaṇḍikā）からなり、他のシュラウタ・スートラと異なり、祭式を統監するブラフマン祭官ならびにその支配下にある祭官、特にブラーフマナーチャンシンのための規定を収める。普通のスートラ体で書かれ、**G**よりも新しい。要するにこの祭官用のマントラ集に過ぎないが、**A**第二〇巻のみならず、**R**およびヤジュル・ヴェーダからのマントラをも引用している。

（1） R. Garbe : Vaitāna Sūtra, The ritual of the Atharvaveda, ed. with critical notes and indices, London 1878.――Vaitāna Sūtra, Das Ritual des Atharvaveda, Aus dem Sanskrit übersetzt und mit Anmerkungen versehen, Strassburg 1878.

W. Caland : Das Vaitānasūtra des Atharvaveda, übersetzt, Amsterdam 1910.

Vishva Bandhu : Vaitāna-śrauta-sūtra, with the commentary called Ākṣepānuvidhi by Somāditya, ed. critically and annotated with text-comparative data from original mss. and other valuable matherials, Hoshiarpur 1967.

(E) スムリティ（Smṛti）

厳格な意味におけるダルマ・スートラは存在しないが、ヘーマードリ（一三世紀）の蒐集したシュラーダ・カルパ（Śrāddhakalpa 祖先祭綱要）の中にパイティーナシ[1]の名によるものが含まれていることは注目に値いする。

（1） Cf. W. Caland : Altindischer Ahnencult, London 1893, p. 243-245.

(F) プラーティシャーキア(音韻書)

三種のテキストが知られている。しかし新しいテキストの発見されるにつれ、相互の関係につき、かえって種々の問題が提起されている。

1. W. D. Whitney : The Atharva-Veda Prātiçākhya or Çaunakīyā Caturādhyāyikā : text, translation and notes, J. of the Amer. Or. Soc. 7 (1862), p. 333-616.——Katre により発見された Kautsaśāstra または Kautsa-vyākaraṇa の部分は、これとほとんど同一である、cf. S. M. Katre, J. of the Royal As. Soc. 1937, p. 731 ff.; New Ind. Antq. 1 (1938), p. 383 ff.

2. Vishva Bandhu : The Atharvaprātiśākhyam, Critically ed. with an introduction and appendices, Lahore 1923. 非常に短く、むしろ ***1.*** を補う性質を示す。

3. Sūrya Kānta : Atharva Prātiśākhya, ed. for the first time together with an introd., English transl., notes and indices, Lahore 1939. 現存の形ではシャウナカ派所属と認められ、パダ・パータ(Padapāṭha)自体の描写を目的とする点に特徴がある。

Cf. L. Renou : Les écoles védiques, Paris 1947, p. 82-83, p. 224-225 (Add.) ; La forme et l'arrangement interne des Prātiśākhya, Journal Asiat, 1960, p. 1-40 *passim*.——J. Gonda : Vedic

literature, Wiesbaden 1975, p. 309.

(G) アヌクラマニー(内容目録)

パンチャ・パタリカーとこれより新しく、拡張されたブリハット・サルヴァーヌクラマニーとの二種がある。前者は Bhagawaddatta によりヒンディー語訳を添えて出版され(Lahore 1920)、後者は Ramgopala Shastri により出版された(Lahore 1922)。しかしここには Vishva Bandhu によって公刊されたものを挙げる。Atharvavedapāṭhānukramaṇī, Hoshiarpur 1964 ; Atharvavedīya-bṛhatsarvānukramaṇikā, *ibid*. 1966 ; Atharvaveda-ṛṣidevatāchandonukramaṇikā, *ibid*. 1970.

(H) パリシシュタ[1](拾遺)

長短七二篇の付録文献を収める。内容は非常に豊富で多岐にわたり、散文のものあり、韻文のものあり、年代も区々で、価値も同一ではないが、他のヴェーダのパリシシュタ文献以上の意義をもつ。その中には重要なテキストが含まれ、独立に出版され研究されている場合も少なくない。例えば No. LXVII : Adbhutaśānti はつとに、A. Weber : Zwei vedische Texte über Omina und

Portenta, Berlin 1859 に資料を提供し、後に Nos. LVII-LXIII, LXIV (partly), LXX b, c, LXXI (cf. J. T. Hatfield, J. of the Amer, Or. Soc. 15, 1893, p. 207-220) は、前兆に関する大規模な研究、D. J. Kohlbrugge : Atharvaveda-Pariśiṣṭa über Omina, Wageningen 1938 に利用されている。

個々のパリシシュタにつき詳しく紹介することはできないから、重要なもの若干を例示するに止める。

Nakṣatrakalpa (No. I). ——パンチャカルパの名のもとに、**A**の文献五種を総括することがある。カウシカ・スートラ、ヴァイターナ・スートラ、次にこのナクシャトラ・カルパ、シャーンティ・カルパ、ヴィダーナ・カルパ(散佚)を指し、学派内において重視されていたことが知られる。

Gaṇamālā (No. XXXII). ——シャーンティ・カルパ (Śāntikalpa, ed. and transl. by G. M. Bolling, Trans. Amer. Philol. Assoc. 35, 1904, p. 77 ff.; J. of the Amer. Or. Soc. 33, 1913, p. 265 ff.) の索引の用をなし、**A**の内容の分類に便宜を与える。

Prāyaścitta (No. XXXVII). ——このほか**P**派所属のテキストが出版されている、cf. J. von Negelein, J. of the Amer. Or. Soc. 33 (1913), p. 71-144, p. 217, p. 253, 34 (1915), p. 229-277.

Śrāddhakalpa (No. XLIV). ——Cf. Caland : Altind, Ahnencult (1893), p. 240-243. なおパイティーナシの名を冠するものについては、上記(E)スムリティの項参照。

Nighaṇṭu (No. XLVIII). ——詳しくは Kautsavya-niruktanighaṇṭu と呼ばれるが、写本の伝承が悪いのは遺憾である。その性格は出版者の言葉から最も明瞭に看取される。"The text here presented is based on a third recension of the list of nighaṇṭavas that form the foundation of Yāska's work. While distinct from both, it is more closely related to the second of the recensions published by Roth" (p. 305).

Caraṇavyūha (No. XLIX). ——「ヴェーダ学派概観」の**A**版として興味がある。

(1) Cf. G. M. Bolling and J. von Negelein : The Pariśiṣṭas of the Atharvaveda, Vol. I. Text and critical apparatus, Leipzig 1909-1910.

(十) 参考書

Aに関する文献が厖大な量にのぼることは、L. Renou : Bibliographie védique, Paris 1931 ; M. B. Emeneau : A union list, New Haven 1935 ; R. N. Dandekar : Vedic bibliography, I-III, Poona

1946, 1961, 1973 の当該個所を一瞥すれば了解される。ここには**A**の研究に志す人のため、最も有益と思われる少数の書物を挙げるに止める。

概説書としては、出版年代の古いのにもかかわらず、M. Bloomfield: The Atharva-Veda and the Gopatha-Brāhmaṇa, Strassburg 1899 が最も良く、簡単に呪法の内容を知るためには、V. Henry: La magie dans l'Inde antique, Nouvelle édition, Paris 1903 がある。主要な出版・翻訳については、それぞれの個所に付記したが、古代インドの宗教・文学・文化に関する書籍は、多かれ少なかれ**A**に触れている。例えばM. Winternitz: Geschichte der indischen Litteratur, Band I, Leipzig 1909, p. 103–138 (cf. Band III, 1922, p. 611), English transl. by S. Ketkar, Calcutta 1927, p. 119–158.——L. Renou: L'Inde classique, I, Paris 1947, p. 284–288. しかし最近の研究文献をも考慮に入れた概論としては、J. Gonda: Vedic literature (Saṁhitās and Brāhmaṇas), Wiesbaden 1975 および The ritual Sūtras, *ibid.* 1977 の当該個所が最も適切である。ただしさらに進んで**A**を少しく専門的に研究しようとする人は、今も**W**と**B**とを座右に備えなければならない。

(書)
ジャンバ Jambha(魔)
シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド Śvetāśvatara-upaniṣad(書)
シュラウタ祭 Śrauta-ritual 公的ヴェーダ祭式；シュラウタ・スートラ Śrauta-sūtra その綱要書
シュラーダ・カルパ Śrāddhakalpa(書)
シラーチー silācī(植) cf. アルンダティー
シンドゥ Sindhu(河名) インダス河，時には海
スヴァプナ Svapna(神) 「睡眠」
スカンバ Skambha 「支柱」，最高原理の名
スタカラ sthakara(植)
スマラ smara(植)
スムリティ Smṛti(書) 「聖伝文学」
スーリア Sūrya(神) 太陽神
スーリアー Sūryā(神) スーリアの娘
スリンジャヤ Sṛñjaya(種族名)
ソーマ Soma(植) 酒神，時に月神

タ　行

ダヴァ dhava(植)
タガラ tagara(植)
タクマン takman(病名)
ダスユ Dasyu 土着民
ダートリ Dhātṛ(神(創造神
ダナ・パティ Dhanapati(神) 財宝の主
ダルバ darbha(植)
ディシャナー Dhiṣaṇā(魔)
デーシュトリ Deṣṭṛ 「指示者」，最高原理の名，女性デーシュトリー
チャンダ Caṇḍa(魔)
トゥヴァシュトリ Tvaṣṭṛ(神) 工巧神
ドゥールヴァー dūrvā(植)
トリシャンディアー triṣandhyā(植)
トリタ Trita(神)
トリチャ tṛcha(植)

ナ　行

ナラダ nalada(植)
ナーラダ Nārada(聖)
ニアグローダ nyagrodha(植) 'banyan tree', ficus indica
ニアスティカー nyastikā(植)
ニタトニー nitatnī(植)
ニフサーラー Niḥsālā(魔)
ニルリティ Nirṛti(神) 破滅の女神

ハ　行

パイッパラーダ Paippalāda(学派名)
パイティーナシ Paiṭhīnasi(人)
パヴァマーナ Pavamāna(神) ソーマの称呼
バガ Bhaga(神) 幸運の神

パーター pātā(植) ＝pāṭha？
バーダカ bādhaka(植) ＝paraśu？
バーナーパルニー bāṇāparṇī(植)
パラーシャ palāśa(植)
パラシュ paraśu(植) cf. バーダカ
バーラティー Bhāratī(河名)
バラドヴァージャ Bharadvāja(聖)
パラメーシュティン Parameṣṭhin(神) 「最勝者」，最高原理の名
パリヴィアーダ parivyādha(植)
パリシシュタ Pariśiṣṭa(書) 「拾遺，附録文献」
ハリドラー haridrā(植)
ハーリドラヴァ hāridrava(鳥名)
パルジャニア Parjanya(神) 雨神
バルヒカ Balhika(種族名)
パンチャ・カルパ Pañcakalpa(書)
パンチャ・パタリカー Pañcapaṭalikā(書)
ピシャーチャ Piśāca(魔)
ピッパラーダ Pippalāda(聖)
ピッパラーディ Pippalādi(聖)
ピッパリー pippalī(植)
ピトリ Pitṛ 「祖霊」
ヒマヴァット Himavat(山名) ヒマーラヤ山
ヒラニアガルバ Hiraṇyagarbha 「黄金の胎児」，最高原理の名
プーシャン Pūṣan(神) 牧畜の神
ブーミ Bhūmi 「大地」
プラクシャ plakṣa(植)
プラジャー・パティ Prajāpati(神) 「造物主」，最高原理の名
プラシュナ・ウパニシャッド Praśna-upaniṣad(書)
プラーティシャーキア Prātiśākhya(書) 音韻書
プラーナ Prāṇa 出息，「生気」，最高原理の名
プラナヴァ・ウパニシャッド Praṇava-upaniṣad(書)
ブラフマ・ヴェーダ Brahmaveda(書) アタルヴァ・ヴェーダの称呼
ブラーフマナ Brāhmaṇa(書)
ブラフマナス・パティ Brahmaṇaspati(神) 祈禱主，cf. ブラフマン，ブリハス・パティ
ブラーフマナーチャンシン brāhmaṇācchaṁsin(祭官名)
ブラフマン brahman *neut.* 呪文，その神秘力；「梵」，最高原理の名；*masc.* 祭式を統監する祭官
ブリグ Bhṛgu(聖)
プリシュニ Pṛśni(神) マルト神群の母
プリシュニパルニー pṛśniparṇī(植)
ブリハス・パティ Bṛhaspati(神) 讃頌主，実際上はブラフマナス・パティと同一視されるが，本来 brahman と bṛh- とは必

ー，ローハニー
アンガ Aṅga（種族名）
アンギラス Aṅgiras（聖）
イーシャーナ Īṣāna（神）ルドラの称呼
イダー Iḍā（河名）
インギダ iṅgiḍa（植）＝iṅguḍa？
インドラ Indra（神）武勇神
ヴァイシュヴァーナラ Vaiśvānara（神）アグニの称呼，「普遍火」
ヴァイターナ・スートラ Vaitānasūtra（書）
ヴァイタハヴィア Vaitahavya（種族名）
ヴァジュラ vajra「電撃」，主としてインドラの武器
ヴァス神群 Vasu's（神）
ヴァーストーシュ・パティ Vāstoṣpati（神）家の守護神
ヴァータ Vāta（神）風神；「気」人体の構成要素
ヴァーチュ Vāc「言語」，最高原理の名
ヴァーマ・デーヴィア Vāmadeva（旋律名）
ヴァルナ Varuṇa（神）司法神
ヴァルナーニー Varuṇānī（神）ヴァルナの神妃
ヴィシュヴァ・カルマン Viśvakarman（神）創造神，造一切神
ヴィシュカンダ Viṣkandha（魔）または（病名）
ヴィダーナ・カルパ Vidhānakalpa（書）今は散佚
ヴィータハヴィア Vītahavya（聖）
ヴィビーダカまたはヴィビータカ vibhīdaka, vibhītaka（植）
ヴィラージュ Virāj（神）「遍照者」，最高原理の名
ヴィーリナ vīriṇa（植）
ヴェーダ Veda（書）
ヴェーナ Vena「見者」，最高原理の名
ウシャス Uṣas（神）曙の女神，暁紅神
ウシーラ uśīra（植）
ウッタラ・アーシャーダ Uttarāṣāḍha（星宿名）
ウッチュシュマー ucchuṣmā（植）
ウドゥンバラ udumbara（植）
ウパニシャッド Upaniṣad（書）
ヴラーティア Vrātya（種族名）最高原理の名
ヴリトラ Vṛtra（魔）

カ　行

カーヴィア Kāvya「詩人」，最高原理の名
カウシカ・スートラ Kauśika-sūtra（書）
ガウダパーダ Gauḍapāda（人）
カシアパ Kaśyapa（聖）
カタ・ウパニシャッド Kaṭha-upaniṣad（書）
カディラ khadira（植）
カーマ Kāma「意欲」，最高原理

の名
ガヤ Gaya（聖）
カーラ Kāla「時」，最高原理の名
カリーラ karīla（植）
カルヴァ khalva（植）
カルヴァンガ khalvaṅga（植）
ガールハパティア Gārhapatya アグニの称呼，「家火」
カンヴァ Kaṇva（聖・魔）
ガンダーリ Gandhāri（種族名）
ガンダルヴァ Gandharva（半神族）
キミーディン Kimīdin（魔）
ギリマーラ，ギリマーラカ girimāla, girimālaka（植）
クシェートラ・パティ Kṣetra pati（神）畑の主
クシェートリヤ kṣetriya（病名）
クシュタ kuṣṭha（植）
グッグル guggulu（植）'bdellium'
クディー kudī（植）＝badarī 'Judendorn'
グドゥーチー guḍūcī（植）
クベーラ Kubera（神）
グラーヒ Grāhi（魔）
クリサラ kṛsara（植）
グリヒア儀典 Gṛhya-ritual 家庭的儀典；グリヒア・スートラ Gṛhya-sūtra その綱要書
クンターパ Kuntāpa（讃歌名）
ケーサラ・プラーバンダー Kesaraprābandhā（人）
ゴーパタ・ブラーフマナ Gopatha-brāhmaṇa（書）

サ　行

サヴァ・ヤジュニャ Savayajña（祭式名）
サヴィトリ Savitṛ（神）激励神
サーヴィトリー・ウパニシャッド Sāvitrī-upaniṣad（書）
サウヴァルチャラ sauvarcala？
サダーヌヴァー Sadānvā（魔）
サダンプシュパー sadaṁpuṣpā（植）
サプタ・リシ Saptarṣi（聖）北斗七星
サーマ・ヴェーダ Sāmaveda（書）
サラスヴァティー Sarasvatī（神）河神，弁舌の女神
サラマー Saramā（神犬名）
シグル śigru（植）
シニーヴァリー Sinīvalī（神）新月を支配する女神
シャウナカ Śaunaka（聖）
シャウナカ，シャウナキーヤ，シャウナキン Śaunaka, Śaunakīya, Śaunakin（学派名）
シャカンバラ śakambhara（病名）
ジャータヴェーダス Jātavedas（神）アグニの称呼
シャタパタ・ブラーフマナ Śatapatha-brāhmaṇa（書）
シャパ śapha（植）
ジャマダグニ Jamadagni（聖）
ジャーミー Jāmī（神）
シャーンティ・カルパ Śāntikalpa

巻	讃歌	頁
VI.	90	42
	91	23
	96	24
	99	133
	100	59
	102	99
	105	43
	106	165
	109	51
	111	66
	112	176
	113	175
	114	170
	115	171
	117	172
	120	173
	124	174
	126	138
	128	152
	130	107
	136	62
	137	63
	138	114
	139	101
	140	116
	142	158
VII.	11	161
	12	122
	13	92
	18	162
	34	113
	35	114
	38	106
	45	110
	50	168
	52	119
	53	69
	56	58
	64	180
	65	90
	70	92
	115	182
	116	34
IX.	2(抄)	199
X.	2(抄)	206
	7(抄)	210
	8(抄)	214
XI.	4(抄)	190
XII.	1(抄)	217
XIII.	1(抄)	194
XV.(抄)		224
XIX.	53	202
	54	204

サンスクリット語対応表

(神)＝神名，(聖)＝聖仙名，(人)＝人名
(魔)＝魔類名，(植)＝植物名，(書)＝書名

ア　行

アヴァカー avakā(植)
アウクシャ aukṣa(植)
アガスティア Agastya(聖)
アグニ Agni(神)　火神
アグニ・ホートラ Agnihotra(祭式名)
アシタ Aṣita(聖)
アーシャー Āśā(神)　「場所」
アーシャー・パティ Āśāpati(神)　場所の主
アシュヴァッタ aśvattha(植)　菩提樹，ficus religiosa
アシュヴィン双神 Aśvinau(神)
アスラ Asura(神)　普通の天神(deva)と区別されるヴァルナの称呼；(魔)　阿修羅，天神の敵対者
アースリー Āsurī(神・魔)　アスラ女，cf. アスラ
アタルヴァ・アンギラス Atharvāṅgirasaḥ(書)　アタルヴァ・ヴェーダの古名
アタルヴァ・ヴェーダ Atharva-veda(書)
アタルヴァン Atharvan(聖)
アディティ Aditi(神)　無垢の女神
アーディティア神群 Āditya's(神)
アートマン Ātman　「個人の本体」，最高原理の名
アトリ Atri(聖)
アヌ aṇu(植)
アヌクラマニー Anukramaṇī(書)　内容目録
アヌマティ Anumati(神)　合意の女神，満月を支配する女神
アーパスタンバ・ダルマスートラ Āpastamba-dharmasūtra(書)
アパーマールガ apāmārga(植)
アプヴァー Apvā(神)　不浄の女神
アプサラー Apsarā(神)　＝アプサラス
アプサラス Apsaras(神)　精女，妖精
アームラ āmra(植)　マンゴー
アーラ āla(毒物)　砒素
アラーティ Arāti(魔)　「吝嗇・貪欲」
アリアマン Aryaman(神)　求婚・婚姻の主護神
アルンダティー arundhatī(植)　別名：ラークシャー，シラーチ

アタルヴァ・ヴェーダ讃歌 ☆☆☆

1979年6月18日 第1刷発行 ©

¥300

訳 者 辻(つじ) 直(なお) 四(し) 郎(ろう)

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩 波 書 店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・三陽社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

翻訳個所一覧表

（数字は**A**の巻数，讃歌の番号および頁を示す）